# パパが見た映画
# 365本

第三集
（下）

磐田　匠

# はじめに

映画が大好きだった、父と
だんだん大きくなってきて、難しい映画とか見始めた二人の息子に。
そして映画を愛する全ての人々に、この本を捧げます

## この本について

いつものまえがきでございます。

ブログをやってました。
過去形で書くってことは、現在休止中でございます。
そのブログのなかで、やれドラマだとか映画だとか、音楽だとかを、ランダムにご紹介しておりましたが…
一日一本の映画を毎日紹介していって、一年で365本の映画を紹介できたりしたら、かっこええやろなって思ったのが全てのはじまりでございました。
更新が遅れると一日二本とか三本とかの映画を紹介し続けて、連載は二年ちょっと続きました。
今週はこんな映画見ました、今週はテレビでこんな映画やりますよって感じでしたね。
で、コツコツと書きためた原稿をまとめたものがこの「パパが見た映画365本」シリーズでございます。
一年続くかな、どうかなって思いながら始めた連載ですが、けっこう映画って見てるものでございます。
そんな事情がある本ですので、シリーズもののご紹介順とか、けっこうぐちゃぐちゃでございます。
テレビオンエア情報みたいな感じで書いていた時期もありますもので。
御勘弁いただきたいと思います。
あと、表記上のご注意。
えっと。スターのみなさんにはなんせ「さま」をつけさせていただいております。
なぜかというと。
一応、私、元役者なんですよね。大阪の古い演劇人の人なんかだと、先生って普通につけちゃいます。
西山先生とか端田先生とか堀内先生とか志摩先生とか。
そうじゃないと「さん」づけ。
須永さんとか馬場さんとか柳川さんとか田中さんとか。
萬子さんとか南条さんとか鍋島さんとかシュン太郎さんとかいのうえさんとか。
辰巳さんはつみさん、生瀬さんはさんちゃんさんだったけど。
で。
西山先生を先生って呼び、シュン太郎さんをさんづけで呼ぶ私が、ハリウッドスターを呼び捨てにしたらあかんやろって思って。
さまづけで統一させていただいております。
ただし、文頭のスタッフキャストは、映画本の慣例にならい、あえて呼び捨てです。
あと、個人的にね。映画のあらすじって、すげえ読みにくいなってずっと思ってましてん。
役名であらすじ書くでしょ。

このときジャックは…とか。ジャックって誰やねん、みたいな。
映画の世界を皆様にイメージしやすくしてさしあげたいなって気持ちでも書いておりますんで、邪道を承知で、演じたスターの名前であらすじ書いてます。
普通、友達に映画のこと説明するときに、「そのあとマクレーンはな…」みたいな説明する人、少ないでしょ。「ウィリスさまがね…」って説明するでしょ。
井戸端会議みたいな映画感想本を目指しておりますので、逆に役名で説明したほうがわかりやすそうな場合を除き、あらすじ上での役名表記も基本はしませんので、こちらもご了承いただきたいと思いまする。

前置きはこれくらいにしまして。
本編、おたのしみください。
はじまりはじまりぃ

# 地雷を踏んだらサヨウナラ

１９９９年作品
監督　五十嵐　匠
主演　浅野忠信、川津祐介、羽田美智子
戦場カメラマン、一ノ瀬泰造さんの命がけのカメラマン人生を描きます。
本当に鮮烈で劇的。
これまで「元戦場カメラマンの主人公」を描いた作品は何度か見てきましたが、「戦場カメラマン」そのものを主人公にした作品に触れたのは初めてなんじゃないでしょうか。
１９７０年代のお話。
ベトナム戦争だとか、カンボジアの内乱だとか、世界中が戦争に夢中になっていた時代の物語。
戦場での写真撮影に命をかけている青年、一ノ瀬＝浅野さま。
本当に死とすれすれのところでカメラマン活動をしているわけですね。
明らかな「戦場」は当然危険いっぱいなわけですが、滞在している現地の集落が砲撃されて、ついさっきまでいっしょに遊んでいた子供たちが次の瞬間に死んでしまったり、お世話になっている人の結婚の席で、同じ村の少年が地雷を踏んで死んでしまったり。
でもカンボジアの人たちはそんな中で生きていくしかない。
浅野さまが撮影した写真は、信じられないような安い値で通信社が買って、それが世界に流されていきます。
戦争写真集などで目にするフィルムが生まれるまでの凄惨な舞台裏を見せつけられているような感覚になります。
浅野さまの命知らずな行動は、いつしか政府軍に目をつけられてしまいまして、彼は国外退去を命ぜられます。
戦場カメラマンとしてしか生きることのできない浅野さま。
彼はより強烈な写真を撮ることに執着しまして、反政府組織がアジトとして利用している「アンコールワット」でゲリラたちの姿を撮影しようと考え、またまた命がけでカンボジアに潜入。
しかし政府軍に目をつけられている浅野さまは、ゲリラに見つかっても政府軍に見つかっても射殺されても文句の言えない立場です。
案の定、「アンコールワット」を目指す彼と彼のガイドは政府軍に捕らえられてしまいます。
そしてそして…
題材が題材だけに、さわやかな感想なんて残りようがないわけでありまして、やはりグダグダのブルーな気持ちでエンドロールを見ることになってしまいました。
よくできた映画ではありますが、どっちかというと好んでは見ないタイプの作品でございます。
パパの採点。１００点満点中７０点。
なんかねえ、普通に暮らしているカンボジアの子供たちが、ドカーンって音がして、気がつくと死んでいる。
そういう描写が続くと、本当に戦争って何なんだろうって思ってしまいます。

早く全世界に平和が訪れますように。

# ブレイド３

２００４年アメリカ映画
監督　デヴィッド・Ｓ・ゴイヤー
主演　ウェズリー・スナイプス、クリス・クリストファーソン、ジェシカ・ビール
半分が人間・半分がバンパイヤの男「ブレイド」（＝スナイプスさま）。
バンパイヤ・ハンターとしての彼の戦いを描くシリーズ第三弾。
今回はちょっとお話がふくらんでおりましてね、人間のバンパイヤ・ハンターだとか、逆にバンパイヤに味方する人間だとかが出てきます。
今回のブレイドの敵は全てのバンパイヤの始祖となる「伯爵」。
変身能力をもち、めっちゃ強力な特殊能力をもっていたりします。
この「伯爵」一派、バンパイヤ一族をより安全に繁栄させるためにホームレスを拉致し、血液を搾り出しながら生命を維持させる技術を開発しております。
逆にバンパイヤ・ハンター側は、バンパイヤのみに効果を発揮するウイルスを開発しておりまして。
しかしそのウイルスは、ある種類のバンパイヤには効果があるが、別の種類のバンパイヤには効果がなかったりすると、そんな段階なんですね。
バンパイヤ・ハンター側は全ての始祖たるバンパイヤの遺伝子を入手すれば、全てのバンパイヤに効力のあるウイルスが開発できると、そう考えているわけですな。
そんなグループとは全く別の次元でバカスカバンパイヤ退治をしていたブレイド。
しかしバンパイヤ側の陰謀で、「人間なのにバンパイヤに味方する人」を射殺してしまいまして、あわれブレイドは警察から追われる身となってしまいます。
で、バンパイヤ・ハンターのみなさんの突入で救出されます。
しかし警察内部にもバンパイヤの一味がおったりして。
ここが第一の山場。
で、クライマックスはもうちょっと派手なアクションシーン炸裂でございます。
第一作からレギュラーのクリス・クリストファーソン様、本作で残念ながらお亡くなりになられましたが…
なんかこのキャラ、毎回亡くなっているような気がします。
また生き返ったりして。
パパの採点。１００点満点中７５点。
アクションとＳＦＸはさすがですが、ちょっとマンネリ化してきた感は否めません。
第一作のおどろおどろしい雰囲気はちょっと薄くなってきて、アクション色が濃くなってきたように思いました。
それはそれでいいんですが。

# トロイ

２００４年アメリカ映画
監督　ウォルフガング・ピーターゼン
主演　ブラッド・ピット、エリック・バナ、オーランド・ブルーム、ダイアン・クルーガー、ピーター･オトゥール
有名なホメロスの叙事詩を壮大なスケールで映画化したスペクタクル史劇。
もう、とにかくそのスケールの雄大さに驚いてしまいます。
物語はギリシャの戦士、アキレス＝ピットさまを中心に描かれます。
いつも思いますが、こういう史実（っていうか誰でも知っている物語）のコラムを書くのって、けっこう気をつかいます。
映画って、細かい設定とか、最初にワワワって説明するみたいなところがあるでしょ。
その辺のところをメモをとらずに見たりしたらこうなるのであります。
まあまあ、ざっくりしたあらすじだと思ってお読みくだされ。
アキレス＝ピットさまはギリシャの勇者です。
アガメムノン王に仕えております。
ブルームさまはトロイの国の王子。
ブルームさまがアガメムノンの弟の妃とデキてしまいましてねえ。
和平の宴の席の日、ブルームさまはその妃を連れてトロイに連れて帰ってしまいます。
当然ギリシャ側は激怒。
大軍を率いてトロイに攻め込みます。
しかししかし。トロイの城壁は強固。外からの攻めにはすこぶる強い。
最強の勇者ピットさまは神官の女奴隷の処遇をめぐってアガメムノンともめまして、トロイとの戦いに参加することを拒みます。
ギリシャ軍はピットさま抜きでトロイ軍と交戦。
ギリシャ軍は敗走。勢いに乗るトロイ軍はさらに追撃。
そこに現れたのは勇者ピットさま、ではなくピットさまの扮装をしたピットさまのいとこ。
彼はブルームさまの兄王子と戦って命を落とします。
ピットさまは激怒し、トロイの城壁前で兄王子に決闘を申し込み、見事兄王子を倒します。
トロイ王オトゥールさまはこれを悲しみ、ピットさまはトロイが喪に服する二週間の間の休戦を約束します。
休戦の過ぎてもギリシャからの攻撃はない。
ギリシャ軍が陣をはっていた海岸には、疫病で死んだらしい数名の兵士と、「航海の無事を神に祈願するための巨大な木馬」。
ギリシャは去ったと思うトロイ。
王はその木馬を勝利の印として城壁の中に持ち帰ることにしますが…
間違ってまへんやろか。

だいたいこんな感じやと思うんですが。
とにかくスケールの大きなシーンの連続。ＣＧの合成も非常に巧く、とんでもない質感を表現できています。
パパの採点。１００点満点中８５点。
レッド・ツエッペリンの曲に「アキレス最後の戦い」って曲があるんですが、この叙事詩がテーマなんでしょうね。
訳詩とかちゃんとチェックしたわけじゃないからよくわからないんですが。
とにかくブラッド・ピットさまの熱演が光っております。
ギリシャの戦士を演じてもとにかくかっこええわけですから、男前ってええなあって思ってしまいますね。

# 隣人は静かに笑う

１９９８年アメリカ映画
監督　マーク・ペリントン
主演　ジェフ・ブリッジズ、ティム・ロビンス、ジョーン・キューザック、ホープ・デイヴィス
けっこうダークな気分になるサスペンススリラーの傑作。
「笑う」隣人はティム・ロビンスさま。「笑われる」主人公はジェフ・ブリッジズさま。
ブリッジズさまはテロの歴史を大学で教える教授でございます。
彼には死んだ妻と、その妻の間にできた息子がおります。
妻は元ＦＢＩの捜査官でございまして、捜査中の銃撃戦で殉職しております。
ある日、ブリッジズさまの運転する車の前にふらふらで血まみれの少年が倒れます。
三ヶ月前に引っ越してきた隣人・ロビンスさまの息子でございます。
このことがもとになって、ブリッジズさま父子とロビンスさま家族は仲良く交流をもつようになります。
しかしですなあ、ブリッジズさま、だんだんとロビンスさまの行動に疑問をもつようになるわけですね。
最初はロビンスさまが設計の仕事をしているってことを聞いて、彼の家の今に広げられている図面をみたとき、「明らかに大型施設の設計図」なのに、「これは一般家庭の建て増しの図面だよ」なんて言われたりしたことにひっかかったのが始まりだったわけですが。
妻の元同僚に聞いてみたり、図書館で調べてみたり。疑いだしたらいろんなことが気になりはじめます。
やがてブリッジズさまは、ロビンスさまは国家に恨みを抱くテロリストなんじゃないかって疑いはじめます。
ロビンスさまのことを調べまわるブリッジズさまですが、ある日ついにロビンスさまが牙をむくわけですね。
ロビンスさまは過去、爆弾事件で捕らえられたことを認めた上で、「息子の命が惜しかったらこれ以上コソコソ調べまわるのはやめろ」と脅しをかけてきます。
しかし少しずつロビンスさま一味の謎の行動はヒートアップしてくるわけです。
ついにブリッジスさまの同棲相手が事故死するに至りまして、ブリッジズさまは息子の命を助けるためにテロリストとの対決を決意するのであります…
巧妙に仕掛けられたテロ計画。
息子への報復が恐ろしくて通報とかができない状況に追い込まれるブリッジズさま。
「そんなんほっといたらええやんか」って思いますが、テロの歴史を教える正義感ですから、放っておけないんでしょうなあ。
この人、すっごく善人そうに描かれてるし。
パパの採点。１００点満点中８５点。
クライマックスには、とにかく唖然。

すげえすげえ。とってもよくできている脚本です。
クライマックスのクライマックスで、主人公がテログループの真意に気づく場面がありましたが、主人公と同時に観客に「その仕掛け」に気づかせるすばらしい物語展開でございます。
けっこう楽しめて、けっこう引き込まれましたです。

# プロミス

２００５年中国・日本・韓国合作
監督　チェン・カイコー
主演　真田広之、チャン・ドンゴン。
「ヒーロー」「ラバーズ」に続く中国歴史絵巻第三弾。
っていうか、たまたまそういう順番で製作されて、そういうくくられかたしていますが、三本が三本ともけっこう独自なカラーを持った作品なので、正編続編ってわけでもないし、やはりなんとなく雰囲気が似た別々の作品って考えるのが正解ではないかと思います。
主要キャストも役名もメモをとるの忘れてましたので、いつもは役者さんの名前でコラム書きますが、今回は「設定名」でご勘弁くださいませ。
戦乱の世を生きる孤児の少女。
死んだ兵士の手から饅頭だとかを奪って命をつないでおります。
彼女の目の前に女神が姿を現す。娘は永遠に愛を手に入れることはできないと予言されてしまいます。
で、時は流れて。
獣よりも速く走ることのできる奴隷（これはドンゴン）、その力を見抜き、彼の持ち主となった将軍（真田）。
奴隷も将軍もめっちゃすごいです。
奴隷のほうは野牛の大軍よりも速く走る。ＣＧ炸裂。
ぎょえ～っ。
将軍もめちゃ強い。くるくる空中で回転しながら相手をバンバン切りつける。
こいつはワイヤーアクションプラスＣＧ。いぐわあああ。
将軍は森の女神から自らが仕える王の命が狙われていることを知らされますが、その直後の戦いで負傷してしまいます。
やむを得ず将軍は奴隷に自分の鎧を着せ、王を守りに城に向かうよう命ずるわけでございます。
んで、城ではけっこうゴタゴタしておりまして、若い王妃がまあ言えばクーデターまがいのことをしまして、怒った王が王妃を殺そうとします。
そこへ間が悪く例の（将軍の鎧を着た）奴隷が到着。
「女を殺そうとする悪人めえ～」って感じで、奴隷は王を殺してしまいます。で、王妃を連れて逃げる逃げる。
わけわからんうちに罪人にされた将軍。困ったもんです。
で、王妃に思いをよせていた貴族がこの将軍と奴隷の中にはいってきまして、実はその王妃は「永遠の愛を手に入れることはできない」って言われた少女が成長した姿なんだってことがわかったりしまして、ごちゃごちゃするうちに将軍も貴族も奴隷も王妃に思いをよせるようになったりしまして、ぐちゃぐちゃになってしまいます。
「ヒーロー」だとか「ラバーズ」あたりは、ありえない中でのリアリティみたいな、「現実的な

寓話」の世界みたいな印象を受けたんですが、本作は「ありえない寓話」っぽく感じてしまいました。
映画見ながら、「すごいなあ」とか「かっこええなあ」とか思う以前に「これはありえへんなあ」って思ってしまいました。
紙一重なんだろうけど、ちょっと漫画っぽくなりすぎましたね。
パパの採点。１００点満点中６５点。
ちょっと点数きつめ。描いている世界が漫画なのに、描きかたがあまりにも真面目なんで、ちぐはぐな印象を受けました。
ちょっとありえない系の描写を押さえたらもうちょっと楽しめたと思うのですが。ちと残念ですね。

# この胸いっぱいの愛を

２００６年「この胸いっぱいの愛を」製作委員会作品
監督　塩田明彦
主演　伊藤英明、ミムラ、富岡　涼、宮藤勘九郎、吉行和子、愛川欽也、中村勘三郎、倍賞千恵子、古手川祐子
一時期こういった系統の作品が流行りましたね。
「黄泉がえり」「いま会いにゆきます」系のファンタジー系恋愛映画。
作品コピーで「これは未来からの『黄泉がえり』です」って書いてあったので、ある程度ネタばらししてしまってもいいかと思いますが。
どんな理由があってかは作中では描かれませんでしたが、伊藤さまは飛行機に乗って、少年時代に短期間過ごした九州を訪れます。
少年時代の伊藤さま＝富岡くんはお父さんがなくなったとき、お母さんの仕事とかが落ち着くまでの間、九州のおばあさん＝吉行さまのところにあずけられていたわけですね。
するとそこには少年時代の自分がいる。ありゃま。そうこうしているうちに、同じ飛行機に乗り合わせた乗客たち数名が、伊藤さまと同じように二十年前にさかのぼっていることを知ります。
どういうこっちゃねん、自分たちはこの時代でどうすればいいねん、って試行錯誤したりします。
そのうちにいろんなことがわかってきまして、この時代に迷い込んだ者は、その時代に残してきた「思い」（っていうか、未練っていうか、やり残したことっていうか）を成就させたら消えてしまうこととか、自分たちは刺されたりしても死なないんだってこととかがわかってきます。
んで、伊藤さま、同じように時間を飛び越えた人に「刺された」瞬間に思い出します。
自分が乗っていた飛行機は墜落して自分はもう死んでしまっていることを。
そして、若くして病で死んでしまった「近所のおねえちゃん」＝ミムラさまにしてあげられることを模索しはじめるわけでございます…
作品見ていまして、中盤のネタばらしになったとき、「またかいなあ」って思ってしまいました。
こういう設定多いですもんね。まあこの作品は、中盤でガンってネタばらししてしまいまして、そこからの乗客それぞれの選択に重点をおいて描いていましたが。
しかしどんなに良い話を作っても、やっぱり「二番煎じ」の感は否めません。残念な話でございます。
パパの採点。１００点満点中８０点。
伊藤さまの少年時代を演ずるのが、上巻でご紹介した「ガメラ」とかでけっこう注目をあびていた富岡　涼くんでございます。
けっこう芝居もうまかったし、注目しておりましたが、芸能界から引退されたようですね。
ちょっと残念。

# ＪＵＯＮ　呪怨

２００４年アメリカ映画
監督　清水　崇
主演　石橋　凌
そもそもはビデオから始まりまして、そのあと映画化されました「呪怨」。
今回はハリウッド版でございます。
とはいっても舞台は日本。でも主人公はアメリカ人。
どういうことかといいますと、映画・ビデオの「呪怨の家」を借りたのがアメリカ人だったって設定でございます。
で、そこのあばあちゃんをボランティアで介護しにいって呪われてしまうのが主人公。
けっこう「呪怨」の基本世界の物語展開に沿ってダークでどんよりした世界が繰り広げられます。
清水監督の「呪怨」ワールドって、ある人物を中心に恐怖エピソードを描いて、そこから時間と空間がポンと飛んで、別の人物のエピソードになって…っていう手法がとられています。
ビデオ版も映画版も、物語のそれぞれのパートにメインで描かれる人物の名前がタイトルとしてつけられていたので、「あ、ここで別チャプターに話が移ったんだな」ってわかったんですが、今回はそのタイトルはなし。
で、ひとつのチャプターの中で時間と空間がポンって飛ぶような構造になっております。
だから、今回に関して（というよりそもそも「呪怨」を見るにあたっては、ですが）作品の中のちょっとした伏線とかを見逃さず、登場人物の相関関係とか名前とか、けっこう把握して、さらに時系列を意識しながら見ていただいたほうがいいかと思います。
前作までみたいに登場人物がオール日本人だったら、なんとなく映画見ているだけで「誰と誰がこういう関係で、誰の妹の名前がナニナニで…」って把握できるんですが、あまりよくわかっていない外人さんがガガって出てくるこういう作品、ちょっときつかったですね。
ショックシーンについては、過去の「呪怨」シリーズの総集編っぽい感じです。
「あ、こんな場面あったなあ」って感じで見てしまいました。
そういう意味ではあまり新しい「恐怖」はありませんでした。
まあ海外進出作品ですもんね。
冒険演出をせず、過去の作品から自信のあるショックシーンをぶつけてきた感じですね。
今回初めて「呪怨」を見る人にはいい感じかもしれませんが、「呪怨」フリークの私としましては、「うむむ…」って印象が残りました。
パパの採点。１００点満点中７０点。
もうちょっとやりようあったんじゃないでしょうか。
うん。
っていうか、どうして作品の舞台を日本にしたんでしょう。
やっぱりアメリカ人主人公ならアメリカで話を進めるべきだったろうし、作品的にそれが難しい

なら、チャイナタウンとか日本人居住地とかを舞台に設定して、そこで物語を進めるべきだったかもしれませんね。

# 博士の愛した数式

２００５年「博士の愛した数式」製作委員会作品
監督　小泉堯史
主演　寺尾　聰、深津絵里、浅岡ルリ子、吉岡秀隆
とっても静かな人間ドラマでございます。
作品が始まってから終わるまで、特に大きな物語上の起伏もなく、とにかく淡々と作品のなかの時間が過ぎていく感じです。
まあそれがとっても心地よかったりするのが不思議ですね。
主人公は深津さまが演ずる家政婦。
けっこうキャリアのある人で、「あなたならこの仕事をこなせるに違いない」って感じですっごく「微妙な」仕事先に派遣されます。
そこは天才的な数学者寺尾さまと、その義姉浅岡さまが住む屋敷。
まるで世界そのものから幽閉されているかのように、博士はそこの離れで静かに暮らしています。
この「博士」には秘密がありましてですねえ、十数年前の事故がもとで、博士は記憶そのものを九十分しか保つことができなくなっております。
ってことは、いくら博士と仲良くなっても、翌日に博士の家を訪れたときには二人は初対面。
「君の靴のサイズはいくつかね」みたいな自己紹介をずっと繰り返すことになります。
ドラマそのものよりも、映画の中で説明される数の神秘、「完全数」だとか「親和数」だとか、そういうものにけっこう惹かれてしまいましたね。
中学時代にね、１／３ってなんなんやろって思ったこととか、高校時代に円周率を必死になって覚えたりとか、あと、楽器やるようになって、弦の長さに対するハーモニックスポイント（弦をかるく押さえながら弾いてでるハーモニックスって、弦の１／２、１／３、１／４のポイントで出るんですわ。不思議ですよねえ）なんかに神秘感じちゃったこと、思い出してしまいました。
パパの採点。１００点満点中８５点。
深津さまの息子が成長し、高校の数学の先生になりまして、彼が生徒に「博士との思い出」を話しながら数の神秘を説明していくって作品構造、とてもわかりやすく、親近感をもちました。
すばらしい作品だと思います。
寺尾さま・深津さま・浅岡さま、吉岡さま。
それぞれの演技もすばらしいです。
特に寺尾さまがすばらしい演技を見せてくれています。

# 京極夏彦・怪／隠神だぬき

２０００年ＢＳＷＯＷＷＯＷ作品
監督　酒井信行
主演　田辺誠一、佐野史郎、遠山京織子、谷　啓、嶋田久作、南条好輝
この作品は厳密には劇場公開された映画ではありません。
そもそもはＢＳＷＯＷＷＯＷが製作したオリジナルドラマ。
原作はもちろん京極夏彦大先生の「巷説百物語」でございます。
以前「怪・七人みさき」とかをご紹介したときに勢いでご紹介しようかなあとか思ったりもしたんですが、やっぱＢＳオリジナルドラマだしなあってことでご紹介を外した作品でございます。
まあここで強引にご紹介です。
作品の主人公グループは、闇の仕事人でございます。
原作は必ずしもそういう感じではなく、妖怪の仕業とも思える不思議な事件を解決していくグループなのですが、この連作ドラマでははっきり「仕事人」として描かれております。
御業の又市（田辺さま）、山猫まわしのお銀（遠山さま）、事触れの治平（谷さま）、戯作者百介（佐野さま）らが仕事人一味です。
これにゲスト仕事人が加わるわけですな。
第一話は夏八木 勲さま、第三話は火野正平さま、最終話は近藤正臣さまとか小木茂光さまとか。
さてさて「隠神たぬき」のお話。
謎の面をかぶった辻斬り事件が起こります。
事件は尾張～近江～阿波へと続くわけでございますね。
こうなると、このコースをたどった旅のものが疑われます。
奉行所が疑ったのは旅の一座なわけですが、実はこの一座、覆面をかぶった謎の御仁をかくまっていたわけですな。
実はこの御仁こそが辻斬り犯人だったわけでございます。
さてさて、この辻斬りに娘と孫を斬られてしまった老人、芝右衛門（奥村公延さま、名演でございます）。
彼の目の前に芝右衛門を名乗る男（谷さま）が現れます。
で、男は自分は実は狸だと言う。
辻斬り犯は自分と狸合戦を戦って敗走した狸だと言います…
かなり複雑に入り組んだ作品構造ですので、ちょっと映像だけではわかりにくいかもしれません。
わかりにくいようでしたら、原作を併せてお読みいただけたらと思います。
パパの採点。１００点満点中８５点。
出演者の一人、南条好輝さまは、劇団時代にある芝居で競演した間柄。
今でも現役で頑張っておられる様子。うれしく思います。

# キングコング（１９７６）

１９７６年アメリカ映画
監督　ジョン･ギラーミン
主演　ジェシカ・ラング、ジェフ･ブリッジズ、チャールズ・グローディン

元祖怪獣映画の「キングコング」執念のリメイク。
めっちゃがんばっております。
でもねえ。やっぱねえ。うむむ。って感じですわな。
物語は旧「キングコング」と大きくは変わっておりません。
私的に一番大きく変わったと感じたところは、コング登場シーンで戦う相手が恐竜から大蛇にかわったところくらいでしょうか。
南海の孤島で発見された巨大な猿「キング・コング」。
コングは記録映画撮影クルーの一員、ラングさまに恋をしてしまいます。
別に人間に恋せんでもええのに。
コングは捕らえられ、アメリカに連れてこられまして、「コングの恋人」としてとりあげられてマスコミにわやくちゃにされるラングの姿を見てプッツンしてしまい、鎖を切ってニューヨークでおお暴れするわけでござんす。
で、エンパイアステートビルから舞台を変えました「世界貿易センタービル」に登るわけでございます。
ジェシカ・ラングさまってけっこうかわいくてきれい。
この映画を見た当時中学生の私は、コングみたいにラングさまに恋してしまいました～
短い恋だったけど。
パパの採点。１００点満点中７０点。えっと、この作品が製作された当時、私は中学生でした。
最新の科学を駆使した、コンピューター制御の実物大キングコングが作られたって映画誌の紹介とかを見まして、めっちゃ期待したんですが…
「コンピューター制御のキングコングって、こんなん？」って思ってしまいました。
やっぱり実物大のキングコングの製作って無理があったんだなあ。

# 海底二万マイル

１９５４年アメリカ映画
監督　リチャード・フライシャー
主演　カーク・ダグラス、ジェームズ・メイスン、ポール・ルーカス

五十音順に作品紹介をしていくシリーズです。前は「お」で終わりましたので、今回は「か」からまいります。
ディズニープレゼンツの海洋冒険アクションでございます。
最近こういう系統の作品、めっきり少なくなってしまいました。
むかしはねえ、ドラマなんかでも「シュービュー号」とか「スティングレー海底大戦争」とか、日本ものでも「マイティジャック」みたいなものがあったんですが、最近ってあまり見ないような気がします。
最近の映画では…
潜水艦ものでは、わが国では「ローレライ」、海外では…なんやろ。
海ものでは「ディープブルー」とか「アビス」とかになるんでしょうか。
でもどれも「海洋冒険アクション」って雰囲気はないような気がしたりして。
思うに、科学が進歩しちゃって、海がロマンの対象ではなくなってきつつあるのかなって感じがしたりしますね。
さて、「海底二万マイル」のお話。
ジュール・ヴェルヌの原作を、ディズニーが総力をあげて娯楽大作に仕上げたって感じです。
潜水艦ノーチラス号のネモ船長の物語。
かなり昔に見た映画なんで、記憶とかおぼろげですが、ネモ船長はジェームズ・メイソンさまだったような気がします。
で、カーク・ダグラスさまはそもそもは普通の船の乗組員で、ひょんなことからノーチラス号の冒険につきあうことになる若い水夫の役。
だったような気がします。
作品冒頭で、ダグラスさまが船の甲板でギター弾きながら腰をふりふり歌っている場面だけ強烈に覚えております。
まあ、作品のほうはいかにもいかにもなディズニー作品。
次から次へと事件が起こりまして、ハラハラドキドキするんだけど、ああよかった、ってお話。
人食い人種だとか巨大イカだとか、映像ばえするような場面が山盛りでございます。
この映画、何回か見てまして、最後に見たのは中学の映画会のときだったと記憶しております。
でもやっぱり巨大イカとノーチラス号が戦う場面しか覚えていないのは、やっぱり友達とのおしゃべりに夢中で、しっかり見ていなかったんだろうなあ。
パパの採点。１００点満点中７５点。
主演のカーク・ダグラスさまは、もちろん今をときめくマイケル・ダグラスさまのお父さん。

私が中学のころは、とにかくカーク・ダグラスさまはめっちゃ有名でした。
コーヒーのマキシムのコマーシャルとか出てたし。
若手マイケル・ダグラスさまがテレビの連続ドラマに出ていたころです。
「ニューヨーク大捜査線」だったでしょうか。あのドラマの映像ってまだあるのかなあ。
ちょっと見てみたい気がします。

# ガイバー

１９９１年アメリカ映画
監督　スクリーミング・マッド・ジョージ
主演　ジャック・アームストロング、ヴィヴィアン・ウー。
五十音順に作品紹介をしていくシリーズです。
ちょっと昔のアニメなんですが、「強殖装甲ガイバー」ってアニメがありまして。
「きょうしょくそうっこお～ガイバー」って主題歌の。
タイトル書いただけみたいですが。気持ち的には歌っておりますのでご容赦ください。
このアニメをアメリカで実写映画化したのがこの作品。
監督は「ソサエティ」とかでけっこう強烈な特殊メイクの腕前を披露しましたスクリーミング・マッド・ジョージさまでございます。
特殊メイクアーティストが監督した作品でございますので、その方面の演出は問題なし。
「ガイバー」って、そもそもけっこうドロドログチャグチャのグロい系のアニメヒーローでございましたので、原作にけっこう近い、グチョっとした世界が再現されております。
高校生アームストロングさま。
謎の「ユニット」と名づけられた生体兵器を拾ってしまいます。
その「ユニット」ってのは持ち主の体にぐにょぐにょって巻きついて合体し、とんでもないパワーをもった超人「ガイバー」にしてしまうものだったんですな。
この「ユニット」を手に入れようと狙っているのが「ゾアノイド」ってグループでございまして、こいつらは「獣化」する能力をもっております。
で、ガイバーは「獣化」したゾアノイド軍団と戦うことになるわけでございますね。
「ガイバー」の作品世界、伝わりましたでしょうか。
原作アニメはけっこう好きで、シリーズをけっこう見た記憶があるのですが、それに比べるとやっぱりこの映画の印象は地味です。
まあしかたない。
スクリーミング・マッド・ジョージ監督も、潤沢とはいえない予算の中で撮影されたみたいだし。
パパの採点。１００点満点中７０点。
ちょい昔の、ＳＦＸ系ホラー系の映画の役者さんって、けっこういいかげんな感じでキャスティングされとるって感じるのは私だけでしょうか。
主役・ヒロインともに「あんた誰」って感じ。
最近はちょっと事情が変わっておりまして、ホラー映画って若手俳優さんの登竜門みたいになってますよね。
まあこの時代って、ぶっちゃけポルノ女優さんがホラー映画のヒロインしてたような時代だから、しかたないかもしれませんけど。
また思い出しました。

ケビン・ベーコンの「１３金」と、ジョニー・デップの「エルム街」、早く見なくちゃ。

# カイロの紫のバラ

１９８５年アメリカ映画
監督　ウッディ・アレン
主演　ミア・ファロー、ジェフ・ダニエルズ、ダニー・アイエロ
五十音順に作品紹介をしていくシリーズです。今日は「か」。
「カイロの紫のバラ」のご紹介。
めっちゃええ映画です。私ってね、こういう映画への愛情にあふれた映画って大好きでございまして。
ウッディ・アレンって、私的にはけっこう苦手系の作品ばっかり撮る監督さんでございまして、ついつい敬遠ばっかりしていた人でございますが、この映画は見ました。
なんかの映画を見たときに、この映画の予告編を見まして、その数日後には見てました。
映画ファンならわかると思うんですが。
映画の登場人物が映画から出てきて、自分と恋するみたいな妄想。
本作のヒロインのファローさまはまさにそんな女性。
彼女には旦那がおりまして、これがアイエロさま。
けっこう壊れた系の旦那さんでございます。
生活に疲れたファローさまの唯一の楽しみは、映画館で同じ映画を何度も見ることのようで。
彼女が見ていたのは「カイロの紫のバラ」って作品。
しかしある日、映画の主人公ダニエルズさまがファローさまに「今日も見にきてくれているんですね」みたいな感じで映画の中から声をかけてきます。
そればかりか、ダニエルズさま、映画の画面から抜け出してファローさまを口説いたりしはじめて、観客も映画の他の登場人物も大弱り。
この摩訶不思議な現象のことを聞きつけた映画関係者・撮影関係者・さらには映画の主役のほうの「役者・ダニエルズさま」までやってきます。
そしてややこしいことに「役者・ダニエルズさま」もファローさまに好意をもってしまいます。
彼女は夫のいる身でありながら、「映画から抜け出したダニエルズさま」と「役者・ダニエルズさま」の両方に好意を持たれてしまい、さてさてどうなることやら。
本当に、映画好きの夢がいっぱいつまったいい作品です。
こういう夢をラブストーリーの方向に展開したらこの映画になって、アクションのほうに展開したら「ラスト・アクション・ヒーロー」みたいになるんでしょうね。
パパの採点。１００点満点中８５点。
ミア・ファローさまがとってもいいです。
アメリカン倫理みたいなもんにガチガチに縛られた系のキャラではなく、素直に自分の気持ちのままに突っ走る感じで描かれていて、嘘っぽくなくてよかったと思います。

# 帰ってきたドラゴン

１９７３年香港映画
監督　ウー・ユーエン
主演　ブルース・リャン、倉田保昭、ウォン・ウンツェー
五十音順に作品紹介をしていくシリーズです。
今日は「か」。「帰ってきたドラゴン」です。
ブルース・リーさまの登場による第一次カンフーブーム。
「燃えよドラゴン」公開当時にはすでにリーさまは故人だったこともありまして、ポスト・ブルース・リーさまは誰やねん、みたいな感じでけっこういろんな人が出てまいりました。
日本でのとりあげられかただけで考えれば、結果的には本作で悪役を演じた倉田さんの一人勝ちみたいな感じになりましたね。
やっぱりジーメンの力は偉大でございます。
倉田さまがジーメンにご出演されるまでは、ポスト・ブルース・リーさまっていいますと、やはりジミー・ウォングさまかブルース・リャンさまだったのではないかと思います。
そんなブルース・リャンさまの主演作品。
えっと、物語はけっこうシンプルでございまして。
街を支配する悪いボスがおりましてなあ。
その街にドラゴンがやってくるわけでさあ。
ボスは魔法の宝石だか何だかを持っておりまして、この宝石をめぐって、ドラゴン＝リャンさまと、ボスの用心棒＝倉田さまが果てしないなバトルを繰り広げるわけでございます。
この作品でのリャンさまと倉田さまのハイパーバトルアクションめっさ伝説となっておりまして。
なんと戦いながら壁のぼりしていくという。
なんで壁登りする必然性があったのかよくわかりませんが。
この作品の映像って、ビデオやＤＶＤで見ることのできる状況になっているのかどうかわかりませんが、とにかくここのシーンだけでも見てもらいたいなあって思ってしまいます。
パパの採点。１００点満点中９０点。
えっと。倉田さまが出ておられるってだけで、ポイント甘くなってしまいます。
私が一時期出入りしていました芸能プロダクションの社長さん、倉田さまの元マネージャーさんでして、その関係で倉田さまとは何度かお会いしたことがございます。
やっぱりめっさオーラ出てましたね～
っていうか、実は私って香港時代から倉田さまのファンだったんで、もうお顔を拝見しただけで金縛りにあってしまいましたが。
懐かしい思い出でございます。

# カサンドラ・クロス

１９７６年アメリカ映画
監督　ジョージ・Ｐ・コスマトス
主演　バート・ランカスター、リチャード・ハリス、ソフィア・ローレン、エヴァ・ガードナー
五十音順に作品紹介をしていくシリーズです。
今日も「か」。「カサンドラ・クロス」です。
この作品って、私的にはすんげえ思い出のある作品。
中学のころだったでしょうか。学校の映画鑑賞会で見た作品です。
中学校が映画鑑賞会に選ぶ作品ですので、当然いやらしい場面は一切ありません。
けっこうスリリングで、緊迫してて、ラストにはスペクタクル場面とか用意されてて。
しかも実は超豪華キャストやし。出演者書いててびっくりしました。
テロリストのグループが、世界保健機構（ワールド・ヘルス・オーガニゼーション。ＷＨＯですな）の本部を爆破しようとして失敗、そこに保管されていた細菌に感染してしまいます。
そのゲリラが列車に乗り込んでしまうわけです。
その細菌は非常に致死率が高い細菌でございまして、細菌の感染を危惧した政府は、その電車をまるまる隔離してしまおうと考えます。
誘導される場所に着くためには、ちょっとヤバイ老朽化した橋、「カサンドラ・クロス」があるわけですな。
連絡を受けてその車中の人となった医師、ハリスさま。
彼はテロリストとのすったもんだの大変な状況を潜り抜け、殺人ウイルスのある特性に気づきます。
ウィルスの無力化を確信したハリス医師。
しかし彼らの目の前には、あからさまに「どない考えてもあかんやろ」って古い橋が横たわっているわけですわな。
「ジャガーノート」と並ぶ故リチャード・ハリスさまの代表的傑作でございます。
この人好きだったんですが。
「天地創造」とかにも出ておられました。
晩年は「グラディエイター」とか「ハリーポッター」シリーズとかで、おじいちゃん俳優としてええ味だしておられましたが。
パパの採点。１００点満点中８５点。
かなり高評価にあたる作品です。
ただ、ええもんと悪もんがちょっとステレオタイプに描かれていたのがちょっと鼻につきましたね。
同じ設定ではありませんが、なんとなく似た設定（っていうか、問題の車両を別のレールに引き込むって点だけが共通なんですが）の「皇帝のいない８月」と比べてしまいますと、ちょっとこっちのほうが落ちるかもしれません。

豪華キャストのわりに「惜しい」作品でございますです。

# カジュアリティーズ

１９８９年アメリカ映画
監督　ブライアン・デ・パルマ
主演　マイケル・Ｊ・フォックス、ショーン・ペン
五十音順作品紹介シリーズ。今日も「か」。
「カジュアリティーズ」です。
ブライアン・デ・パルマさまって大好きな監督さんなんですが、この作品はちょっと苦手。
っていうか、ベトナム戦争ものがちょっと苦手なんです。
ベトナムものって、どうしてもちょっとジトっとした画像になっちゃうでしょ。
っていうか、ベトナム戦争が終結して、ハリウッドがあえてあの戦争を正面からとりあげようとした時期がありまして。
そんな時期の作品って、とにかく苦手です。
マイケル・Ｊ・フォックスさまは「ファミリータイズ」のころからけっこう好きな役者さんで、そんな流れで見た映画のような記憶があります。
とにかく重かったですね。
作品前半の「重要なシーン」がけっこう強烈でございまして、かなりどんよりした気分で後半見ることになりました。
作品の舞台は１９６６年。
１９６３年のケネディ大統領暗殺以降、ベトナムは泥沼化していったってことは「ＪＦＫ」でドナルド・サザーランドさまが言っておりましたが、まさに泥沼化していた時期のお話でございます。
フォックスさまはけっこう正義感の強い系の兵士。
彼は上官や同僚兵士が、ベトナム人少女をレイプして射殺する現場を目撃してしまいます。
彼は事件の一部始終を軍の上層部に報告しますが、その報告は無視されてしまい、そればかりか彼は「密告者」として犯人グループに命を狙われることになります。
なんてこったい。
正義感をもって「通報」したものがとんでもない目にあうってのは、現代の日本なんかでもよくある話なんですけど、しかしこんなのって本当にどんよりしてしまいますよね。
私的にはもうこいらへんでダメでした。
ちょっと集中して見ることできなかったです。
パパの採点。１００点満点中７０点。
大好きな監督さんでも、ベトナムを描くとけっこう苦手な作品に仕上がってしまうって典型的な作品です。
この作品のほかにもキューブリック監督の「フルメタル・ジャケット」（これはあんまりジトっとした場面なかったですが）、ジョン・ウー監督の「ウインドトーカーズ」なんかもめっちゃ苦手。

でもオリバー・ストーンの「プラトーン」は大好きだったりします。
ってか、この作品って「プラトーン」と作品構造かぶっているような気がします。気のせいかなあ。

# カジュアル・セックス？

１９８８年アメリカ映画
監督　ジュヌヴィエーブ・ロベール
主演　リー・トンプソン、ヴィクトリア・ジャクソン
五十音順作品紹介シリーズ。今日も「か」。
「カジュアル・セックス？」です。
前回ご紹介したのが、ベトナム戦争を描いた「カジュアリティーズ」。
今日のが「カジュアル・セックス？」。
「カジュア」まで同じなんで、普通に並んでしまいますが、こんなに雰囲気違う作品が並ぶのってどないなんやろ、って思うくらいにノーテンキな映画でございます。
私って一応作家志望じゃないですかぁ。
で、作家修行の一環として、「とにかくいろんなジャンルの作品を書いてみよう」って思っていろいろ書いた時期がありまして。
その中に「ハーレクイン風ラブロマンス」ってやつのあらすじと書き出しとを書いてみたら、ほとんどこの映画みたいな世界になっちゃいました。
どないやねんな。
えっとね、これってビデオレンタルして見たんですが…なんでこの作品のビデオを手にとって、なんでレンタルしちゃったのか全然わからないです。
タイトルにひかれたんでしょうか。
主演の女優さん、けっこうかわいかったけど、ほんまそれだけって感じで。
物語はね、素敵な男性とめぐりあうために温泉リゾートに行ったりフィットネスリゾートに行ったりする今どきの若いねーちゃんの話。
かといってセックスが主体の、ポルノ作品などではなく、めっちゃ中途半端。
というか、「恋愛」ってものの象徴として「セックス」って言葉が使われているだけで、ほんまに普通の恋愛映画でございました。
ちなみにこの映画を見たころの私って、たぶん女性との恋愛経験なかったころだと思います。
ほんま、中学高校大学と、彼女できなかったんですよね。
大学卒業して二年か三年くらいして、初カノジョできましたが。
そんなかわいそうな私が、映画みながら擬似恋愛してたのかもしれませんね。
パパの採点。１００点満点中６５点。
なんて言うんでしょう。
作品がはじまったらすぐ、主人公の二人が黒い背景の前に普通にでてきて、カメラに向かって「カジュアル・セックスってどういうのをいうのかしら」って感じではじまります。
私ってこういうの許せないタイプでございまして。いきなり「こら、普通に映画を始めんかいな」って突っ込んでしまいそうになりました。
もうこの冒頭だけでブチ醒めでございました。

やはり苦手ジャンルの作品には手をださないほうがいいようです。

# 華氏４５１

１９６６年イギリス・フランス合作
監督　フランソワ・トリュフォー
主演　オスカー・ウェルナー、ジュリー・クリスティ、シリル・キューザック
五十音順作品紹介シリーズ。今日も「か」。
「華氏４５１」です。
レイ・ブラッドベリさまの原作をトリュフォー監督が映像化した作品。
素晴らしい作品でございました。
っていうか、めっちゃびっくりしました。
こんな映像表現の手段あったんやなあって。どこがどうって言えないんですが、作品全体がなんかリズミカルっていうか。
「ウエストサイド物語」を始めて見たときと同じくらいびっくりしたかもしれません。
さすが映像の詩人って異名をとるトリュフォー監督でございます。
華氏４５１度ってのは、紙が自然発火する温度のことです。
描かれるのは未来社会。その未来では、本ってものは人間を堕落させるってことで、読書が禁止されております。
実は思想弾圧なんですね。
市民の思想を管理するのが目的。
本は発見次第、政府の役人によって燃やされてしまいます。
焚書坑儒の世界ですわな。
主人公のウェルナーさまは、そんな焚書隊のメンバーでございます。
そんな彼が恋におちるわけです。お相手は、本を隠し持っているっていう女性。
彼女との交流によって、彼は「本」というものの有益さに気づくわけなんですね。
「本」の虜になってしまった彼ですが、自分は焚書が仕事。
本の有益さがわかっていながら、その本を燃やさないといけない。
めっちゃ苦しい世界ではございますが。
やがて彼は焚書隊を辞し、読書を行うことができるという「隠れ里」に向かいます。
でもその隠れ里には本なんかない。
本当に一冊も本がないわけなんですね。
どういうこっちゃねんって思っていたら、そこにはあっと驚く事実が隠されていたわけでございます。
これ以上は書けないですけど。
パパの採点。１００点満点中７５点。
とにかく、一番印象に残っているのは、まるでミュージカルのような計算されたキャストの動きでございます。
そしてラストシーンのせつないほどの美しさ。

もうめっちゃびっくりしました。もっと高い点数つけようかな、とか思ったりしたんですが…
ごめんなさい、わがままで。
この作品、本当にもう一回見たいんですわ。
そのときに感じた点数ってのがこの作品の評価なんだろうなあって思いまして、今回は基準点の７５点ってことでご勘弁くださいませ。

# 風が吹くとき

１９８６年イギリス映画
監督　ジミー・Ｔ・ムラカミ
声の出演（吹替）森繁久弥、加藤治子
五十音順作品紹介シリーズ。今日も「か」。「風が吹くとき」です。
この作品は舞台でもとりあげられました。
神戸の労演の公演で、「中学生日記」の先生役をされていた湯浅実さまが主演されておられました。
核戦争に直面し、老夫婦が聞きかじりの知識を総動員しながら生き延びる手段を考え、そして静かに死んでいく。
そんなとってもせつない作品です。
英国の田舎にすむ老夫婦。
苦労だらけの半生の末、田舎の一軒家で静かに暮らしております。
ある日、夫婦はテレビで戦争が起こったこと、核ミサイルが発射されたこと、そしてまもなくそのミサイルが落ちてくることを知ります。
夫婦は急いで「政府のガイドブック」通りに準備をはじめます。
家に白いペンキを塗ったり、ドアを外して簡易シェルター作ったり。
やがて爆弾が着弾する。ものすごい爆風。
家の中はめちゃくちゃになります。最初はシェルターの中に隠れていた夫婦ですが、やがてシェルターを出て片付けとかはじめるわけです。
やがて夫婦は放射能に冒されはじめます。
吐き気とか抜け毛とか下痢とか。
やがて衰弱してきます。夫婦は室内で、「放射能予防に効果があると信じている」白い覆面をかぶったまま、静かに死んでいきます。
なんかねえ、すんごいどんよりした気分にさせられてしまう作品。
善良すぎて、純粋であるがゆえに愚かに死んでいく老夫婦。
もうねえ、悪い作品では決してないのですが、ひたすらどんよりしてしまいました。
パパの採点。１００点満点中７０点。
労演の舞台のほうも、ひたすらどんよりした気分になって終わりましたです。
ほんま、どないしてくれんねんって気分。
映画のほうもそうでしたなあ。
主役二人の声の出演は森繁久弥大先生と加藤治子先生。
お二人ともとにかく巧すぎて、どんより度ヒートアップでございます。
この映画が公開された当時って、森繁先生は日本の演劇人でつくる協会の会長をされておられました。
今って会長どなたなんでしょうか。

まあ普通に考えたら森繁先生を超える俳優さんなんてそうそうはおられないわけで。加藤さんもとんでもない名優だし。しかもこの作品の日本語版の監修は大島渚さまだそうだし。
これだけのスタッフキャストが集まってどんよりさせようとしてくれているのだから、素直にどんよりしなきゃいけませんね。

# 合衆国最後の日

１９７７年アメリカ映画
監督　ロバート・アルドリッチ
主演　バート・ランカスター、リチャード・ウィドマーク、バート・ヤング
五十音順作品紹介シリーズ。今日も「か」。
「合衆国最後の日」です。この映画は、中学のときの映画鑑賞会で見た映画です。
うちの中学～高校（中高一貫の私学だったんですが）、けっこう映画鑑賞会には力入れてましたねえ。
「天地創造」「海底二万マイル」「ロッキー」「チャンプ」「八甲田山」「カサンドラクロス」みたいな作品、見せてくれました。
ですから、この作品は見ようと思って見た映画では決してありません。
でも、映画見終わったあとはすごく好意的な印象が残った作品です。
なんとなく見逃していて、そういう機会に見て、すごく面白いなあって思って「見てよかった」って思った系の作品です。
刑務所を脱獄した男たち。米軍のミサイル基地に侵入し、占拠します。
ボスはランカスターさま。
彼はこの基地の建設にたずさわった元米軍将校で、彼は平和主義の思想がもとで投獄されていたわけですね。
彼はミサイルの発射ボタンでアメリカ合衆国と交渉するわけでございます。
彼らの要求は、ベトナム戦争当時の秘密文書の公開と現金。
そして「人質としての大統領」です。
大統領ウィドマークさまは彼らの要求を受け入れ、自ら人質となることを受け入れますが、米軍タカ派の将校はテロリストの要求に屈することを受け入れられず、自ら狙撃チームを中心とした犯人鎮圧チームを組織しまして、大統領が犠牲になることさえ厭わないって勢いで武力鎮圧を計画します。
果たして事件の顛末は…
けっこう豪華キャスト。
スタッフも超豪華。
でもあまり作品的な評価が高くないってのは、やはり「中学の映画鑑賞会で使われるくらい健全な内容」がネックになってしまったからでしょうか。
ちょっと残念な気がします。
パパの採点。１００点満点中８０点。
作品途中で、当時としては画期的な「スプリットスクリーン」を使った場面がでてきます。
この手法を使う監督さんって、その頃はブライアン・デ・パルマ監督くらいしか知らなかったから、めっちゃびっくりしました。
デ・パルマ監督の「キャリー」はロードショーで見たはずなんで、その少しあとです。

んでまた、そのスプリットスクリーンの手法がめっちゃ効果をあげているからびっくりです。
今ではテレビドラマ「２４」なんかでポピュラーになった手法ではありますが。
そういう意味では、演出面でもびっくりした佳作です。

# ガッチャ！

１９８５年アメリカ映画
監督　ジェフ・カニュー
主演　アンソニー・エドワーズ、リンダ・フィオレンティーノ

五十音順作品紹介シリーズ。今日も「か」。
「ガッチャ！」です。ガッチャってのは、劇中に登場するサバイバルゲームで使う言葉。
サバイバルゲームの説明は大丈夫でしょうか。
迷彩服とか着て、ペイント弾を装填したエアガンを持って戦う、あれですな。
敵に弾を命中させたら「ガッチャ」って言うんだそうです。
主人公はサバイバルゲームの名人の大学生、エドワーズさま。
彼はバカンスにヨーロッパ旅行に出かけます。
で、パリーでめっちゃ美人の女性、フィオレンティーノさまと出会って恋に落ちるわけですな。
うんうん。ありがちな展開やなあ。
まあベタベタまったりの時を過ごすわけです。
で、彼女はベルリンに仕事で行かなきゃならないというわけで、スケベ青年のエドワーズさまはホイホイついていくわけです。
彼女は東ベルリンへ。
そこで何かをうけとらなきゃならないようで。
そこで彼女が受け取ったものは何かのフィルムで、彼女はそれをエドワーズさまに預け、西ベルリンに脱出するように指示します。
なんかあからさまに怪しい雰囲気。
西ベルリンのホテルの部屋は荒らされてるし、そのあと彼女に落ち合おうとした場所には銃をもった男が現れたりするし。
どうやらとんでもないことになりそうな雲行き。
アメリカに帰ったエドワーズさまですが、アパートも荒らされております。
どうやら彼が預かったそのフィルムってのは、ＫＧＢとＣＩＡが奪い合いするようなヤバい品物だったようで。
走行しているうちに、彼の周囲には東西のスパイが出没しはじめます。
彼は麻酔薬を手に入れ、サバイバルゲームの名人としてのテクニックを駆使してスパイたちと戦うことになります…
ちょっとお話できすぎのような気がしますね。
いくらサバイバルゲームの名人ったって、相手はスパイでっせ。まあええけど。
パパの採点。１００点満点中７０点。
まあね、筋書きとかはちょっと都合よすぎますが、爽快感は残ります。
けっこう楽しく見られました。

この映画みたあと、ちょっとサバイバルゲームとかしたくなっちゃいました。

# 彼女について私が知っている二、三の事柄

１９６６年フランス映画
監督　ジャン・リュック・ゴダール
主演　マリナ・ブラディ、ロジェ・モンソレ、ラウール・レヴィ
五十音順作品紹介シリーズ。今日も「か」。
「彼女について私が知っている二、三の事柄」です。
この映画見るために京都まで行きました。
「気狂いピエロ」と二本立てでした。
わけわかりませんでした。
え、みたいな感じ。
え、どこをどう見て、どこで何をどう感じたらいいの、みたいな感じです。
まだ高校生か、なりたての大学生か、確かそんな時期だったと思うんですが。
まあ相手はゴダールですから。
この映画見るまではね、ゴダールの映画だろうが何だろうが、ちゃんと見ればわかるに違いないって考えていましたが、思い上がっておりました。
素直にわけわかりませんでした。
「気狂いピエロ」のほうがまだわかりやすかったです。ストーリーあったし。
この作品って、ストーリーあるようなないような。
ドキュメンタリータッチで撮られているんですが、「これってドキュメンタリーなん？」みたいな錯覚に陥ったりもしましたし。
うんうん、まあ、こういう作品もありかもしれませんねえって虚勢をはるのが精一杯でございました。
あるようなないようなストーリーはこんな感じ。
主婦のブラディさま。
無線オタクの旦那がおります。子供は小さい。
彼女、実は売春やっておりまして、託児所がわりに売春宿に子供を預け、んで街をうろつく。
なんとなくウインドショッピング。で、街で客をみつけ、ホテルで仕事して、報酬で服だの何だのを買う。
そんな場面が淡々と続いて、別の客とこんなことしてあんなことして。
んで、なんかごちゃごちゃして、終わり。わけわからん。
こういう作品の「意味」ってやつを嗅ぎ取れるのが大人なんかなあ。
今、もう一回この映画見たら印象とか変わるのでしょうか。
この年になって「ゴダールわからん」とか言いたくないので、あえて最近ゴダールは避けて通っておりますが。
まあもう少ししたらもう一回見てみようかなあって気持ちはありますが。
パパの採点。１００点満点中６５点。

ちょっとコメントも採点も難しいです。
私のセンスがないから理解できないんだって言われたらそれまでやし。
ただ、当時見た映画館のお客さんみんな、映画が終わって、いきなり場内が明るくなって「え？終わったん？」みたいな感じでございました。
これだけは申し上げておきます。

# ガバリン

１９８６年アメリカ映画
監督　スティーブ・マイナー
主演　ウィリアム・カット、スティーブ・ウェント
五十音順作品紹介シリーズ。今日も「か」。
「ガバリン」のご紹介です。コミカルな「ホラーコメディ」に分類されるのでしょうか。
そのわりには「ガバリン」の造形が不自然に力が入ってたりしまして、ちょっとちぐはぐな印象が残っております。
主演のウィリアム・カットさまはかのデ・パルマ監督の主演作品「キャリー」でキャリーちゃんのプロムパーティでの相手役の金髪の男前。
っていうか、それくらいしかトピックスないですなあ。
この作品を見て、「あらあ、カットはん、お久しぶりです～」みたいな気持ちになってしまいました。
同じ「キャリー」でワルガキ役をやっておられたジョン・トラボルタさまが大スターとなったのと対照的。
けっこう男前だったし、芝居も悪くないんですが。
なんかかわいそうな役者さんでございます。
カットさまは作家さん。
息子が行方不明になって、そのせいで奥さんとうまくいかなくなった、みたいな不遇なおっさんです。
彼は小説の執筆のために親戚の不幸があったいわくつきの家に引っ越してきます。
そらねえ、出ますわな、普通。
カットさまがかわいそうになるくらいいろんなモンスターが登場します。
イメージでいうとモンスターじゃなくて、グレムリンみたいな感じなんですが。
で、そいつらがわんさか悪さを繰り広げるわけですね。
やがてカットさま、行方不明になった息子は実はこのガバリンたちにつかまっていたんだってことに気づきまして、息子を取り返すためにガバリンたちと戦うことになります。
１９８６年の作品ですから、当然ＣＧによる映像革命以前の作品でございます。
現在のような目の覚めるようなＳＦＸ映像は望むべくもない世界でございまして。
クリーチャーたちも、なんかマペット系の情けないキャラばっかりでちょっと残念でございました。
話の着眼点そのものは悪くはないと思うのですが。
パパの採点。１００点満点中６０点。
えっとね、話そのものは悪くないですが、作品の落とし方がちょっと気になりました。
オチがめっちゃ安易で、「それはないやろ」って感じでございました。
ホラーでこのオチは禁じてにしていただきたいと思うのですが。

# カブキマン

１９９０年アメリカ映画
監督　ロイド・カウフマン
主演　リック・ジャナーシ、スーザン・バイアン
五十音順作品紹介シリーズ。今日も「か」。
衝撃の作品、「カブキマン」のご紹介です。
えっと。わけわかりませんわ。そもそものこの作品の狙いというか、そのへんがわかりません。
監督はロイド・カウフマンさま。
「悪魔の毒々モンスター」を撮った人です。この作品の第三弾でモンスター君、日本にきたわけですが…そのときにカウフマン監督って日本をどう思ったんでしょうか。
っていうか、この人、日本が好きなのか嫌いなのかさっぱりわからないです。
なんか愛情持って撮っているのか、バカにしようとしているのか。ってくらい現実認識のなさが突出している作品でございます。
主人公の警官が、ひょんなことからスーパーヒーロー「カブキマン」に変身して、悪人どもをやっつける話。
まあ話はそうなんだけど。どないやねん。
カブキマントで空をとび、手に持った刀をふりまわしていたかと思うと、扇子・ゲタ・手裏剣・割り箸（なんでやねんっ）を武器に戦います。
で、登場するときには「カブキマ～ン」と名乗りをあげる。
登場人物の日本に対する現実認識のなさも爆笑ですし。
そら日本人は刺身が好きでね、魚を生で食べますがぁ、生きたどじょうを生では食べません。
そんな日本人見たことないです。「柳川鍋」と「白魚の踊り食い」あたりがごっちゃになってます。
ありえへん。
私的には、日本びいきのカウフマン監督が、日本のファンを楽しませようと思ってこの作品撮ったってえんなら許せるんですが、アメリカのお客さんに向けてこの作品撮ったってえんならちょっと許せないかな。
あのねえ、日本人はみんなカラテとか使えるわけじゃないし、みんないきなり忍者みたいに天井にへばりついたりしないの。
ありえへんでしょ。
でも日本人だって中国の人は普通に拳法つかえるって思ってたりするからなあ。
まあそういう意味ではおあいこなのかもしれませんが。
ちなみに私の友人の中国の人は、拳法とか全然できません。でもサックスが得意。普通なんですよ。やっぱり。
パパの採点。１００点満点中８５点。
でも点数すっげえ高いし。好きなんです。こういうブロークンな世界。

できれば続編見たい。「カブキマン２」、誰か作ってくれないかなあ。
調べてみましたら、ＤＶＤは販売されていないそうです。
ってことは幻の名作ってことになりますかな。

# 硝子の塔

１９９３年アメリカ映画
監督　フィリップ・ノイス
主演　シャロン・ストーン、ウィリアム・ボールドウィン、トム・ベレンジャー
五十音順作品紹介シリーズ。今日も「か」。
ちょっとエッチ系のサスペンス、「硝子の塔」でございます。
「氷の微笑」で大ブレイクしましたシャロン・ストーンさま。
かわいいしきれいだし、んでセクシー。
そんなストーンさまですから、もうこのころは彼女が出ているってだけでみんな見に行きました。
今思い出してみるとねえ、「うむむ、この映画ってどうやったんやろ」みたいな感想しか残っておりませんが。
なんか、ストーンさまとボールドウィンさまのエッチシーンしか記憶に残っていなかったりして。
どないやねんなて感じです。
なんとなくあらすじだけは覚えておりますが、サスペンスなのに犯人とか事件の経緯とかまるで覚えてないし。
ストーン色っぽかったなあ、みたいな印象しか残ってないし。
なんかブルース・ウィリスさまの「薔薇の素顔」見たあとの印象みたい。または「ＲＡＭＰＯ」か。
ストーンさまはガラス張りの超高級マンションに引っ越してまいります。
そのマンションはかつて殺人事件が起こった場所。
このマンションは、随所に何者かが監視カメラを仕掛けております。
やがて、またしても、しかも次々と殺人事件が起こります。
果たして犯人は誰なのか。そしてストーンさまのエッチシーンを見ているのは誰なのか。
いぐわあああ。だってそれしかポイントないじゃないですか。
競演はウィリアム・ボールドウィンさまにトム・ベレンジャーさま。
けっこうええ布陣やないですか。でも、そのキャストが効果的に機能しているかどうかは…　って感じでしょうか。
パパの採点。１００点満点中７０点。
シャロン・ストーンさまはいいんだけど。それだけってわけにもいかないし。
もう少ししっかりした作品で彼女の良さを見てあげたいなあって思いますね。
悪くはないです。でもなあ。なんとなくちょい弱い印象でございます。
キャストはけっこう強力なんですが。残念系の作品でございます。

# かわいい女

１９６９年アメリカ映画
監督　ポール・ボガート
主演　ジェームス・ガーナー、ゲイル・ハニカット、リタ・モレノ、ブルース・リー

五十音順作品紹介シリーズ。今日も「か」。
ハードボイルド探偵映画の「かわいい女」でございます。
レイモンド・チャンドラーさまの代表的傑作の映画化でございます。
主人公はジェームス・ガーナーさま。
ハードボイルドの名探偵、フィリップ・マーロウを演じます。
タイトルの「かわいい女」はゲイル・ハニカットさま。
行方不明になった兄の捜査をマーロウに依頼するわけでございます。
で、マーロウ、ハードボイルド的に活躍しながら犯人を追うって感じです。
なんかめっちゃええ感じでハードボイルドでございます。
でもねえ、ジェームス・ガーナーさまってどないやねんって感じなんですが。
なんかちょっとインパクトに欠ける役者さんでございます。
出演作品、悪くないんですよ。「大脱走」なんかすごくよかったし。
でもなあ。申し訳ないんですが、イマイチ作品に恵まれなかった系の役者さんじゃないでしょうかね。
ハードボイルドものの作品としてはかなりいい線いっております。
ただ、このあとに映画化された「チャイナタウン」とか「さらば愛しき女よ」なんかのほうが私的には好みでございます。
ガーナーさまはちょっと甘すぎてタフすぎる感じがしますね。
やっぱりロバート・ミッチャムさまとかジャック・ニコルソンさまとかのちょっと崩れた系の役者さんのほうが雰囲気だと思うのですが。
パパの採点。１００点満点中６５点。
えっとね、この作品、私世代の映画ファンはかなり認知度は高いと思います。
なぜってブルース・リーさまがちょい役で出演しているから。
本当のチョイ役です。でも、出演しているのは間違いないわけでございましてなあ。
しかし、ブルース・リーさまがブレイクしていた時期は、当然のように「ブルース・リー出演作品～」みたいな宣伝のされかたしていました。
ブルース・リーさまもね、出演作品の絶対数少ないから、どうしてもこうなってしまうんですね。
そういう意味では貴重な作品には違いないんですが、でも「それってどうよ」って印象は拭えません。残念。

# ガンマー３号・宇宙大作戦

１９６８年アメリカ日本合作
監督　深作欣二
主演　ロバート・ホートン、リチャード・ジャッケル

五十音順作品紹介シリーズ。今日も「か」。
「ガンマー三号宇宙大作戦」でございます。
アクション映画の神様（と、私は思っている）深作欣二監督による日米合作ＳＦスリラーアクション。
深作監督って、「仁義なき戦い」シリーズなどのアクションの大家って印象がありますが、どっか職人さんみたいなところがある人でして。
「火宅の人」「華の乱」みたいな超文芸作品も撮るし、「上海バンスキング」「蒲田行進曲」なんかのアクションを生かした文芸作品も撮る。
伝奇時代劇の「里見八犬伝」も、ＳＦの「宇宙からのメッセージ」もこの人のメガホンです。
あと忘れちゃいけない「バトルロワイヤル」。
「いつかギラギラする日」みたいなバイオレンスもあります。
しかもそれぞれの作品がかなりの完成度をもっているってところが素晴らしいです。
地球に向かって飛来してくる惑星。
地球の科学者たちはその惑星を爆破しようと考えます。
宇宙ステーションガンマー３号のクルーを惑星に派遣し、無事ミッションを達成。
ほうほう。
「アルマゲドン」でも「ディープインパクト」でも簡単にはいかなかったミッションですが、ガンマー３号のクルーは優秀だったみたい。
しかしこちらはここからが本筋。
隊員が宇宙生物を持ち帰ってしまったわけですね。
で、宇宙生物はステーション内部で増殖。やがてそれは人間を襲いはじめるわけでございます。
きゃあああああっ。
宇宙生物の造形がめっちゃくちゃグロテスクで気持ち悪いです。
ええ感じで気持ち悪い。
この作品は小学生時代に見ましたが、このモンスターの造形だけはかなりしっかり覚えております。
ただ、同時期の東宝や円谷プロの大人向けの作品（「マタンゴ」だとか「緯度０大作戦」だとか「マイティジャック」みたいな作品です）同様、エイリアンのソフビ人形とかは発売されなかったようです。
んだもんで、ちょっと一般的認知度は低いモンスターですね。かなりええ線いってるデザインなんですが。

パパの採点。１００点満点中７０点。
深作監督をはじめ、スタッフのほとんどが日本人でございまして、それに対してキャストはオール外国人。
それでもこれだけのクオリティの作品を仕上げるって、さすが私が師と崇めていた深作監督でございます。

# 黄色いリボン

１９６８年アメリカ映画
監督　ジョン・フォード
主演　ジョン・ウェイン、ジョーン・ドルー、ジョン・エイガー
五十音順作品紹介シリーズ。今日から「き」。
「黄色いリボン」でございます。
先日ご紹介した深作欣二監督がアクションの神様だとしたら、この作品のジョン・フォード監督は西部劇の神様でしょうか。
「アパッチ砦」から「リオグランデの砦」へ至るシリーズの中間となる「騎兵隊三部作の第二作」とのことですが、そもそも「騎兵隊三部作」、この作品しか見ておりませんので、このシリーズのことについては何とも言えません。にゃはは。
この作品を見たのはおそらく小学校の高学年くらいの時期だったと思います。
黄色いリボンってのは騎兵隊が首に巻いているスカーフの色のことだったと思いますが。
なんか退役するときに黄色いスカーフもらうとか、なんかそんな記憶があるんだけど。
ウェインさまは退役を間近に控えた騎兵隊の隊長。
そんな老騎兵隊員が引退するまでの日々を、情感たっぷりに描きます。
そんな事情がありますので、この作品では必殺ガンアクションとかはかなり控えめ。
情感たっぷりに描くわけですから、小学生にはちょっとわからない世界です。
私的には「駅馬車」とかみたいなアクションを期待していましたが、どっちかってえとこの作品、西部劇的人間ドラマでございまして。
あんまり楽しめなかったですね。
それでもこの作品の評価、めっちゃくちゃ高いです。
やっぱりなあ。大人の目で見たら傑作なんでしょうね。
大人になった今の目で見直さなければならない作品のひとつでございますね。
パパの採点。１００点満点中６５点。
主題歌の「黄色いリボン」はめっちゃ有名です。
実は私は映画ファン（ってえか、映画音楽ファンかも）だったもんで、この映画めっちゃ期待してみましたが…
ジョン・ウェインさまがめっちゃおじいちゃんって設定で、いきなりがっかりしてしまいました。

# キャッチ２２

１９７０年アメリカ映画
監督　マイク・ニコルズ
主演　アラン・アーキン、ジョン・ヴォイド、オーソン・ウェルズ、マーティン・バルサム
五十音順作品紹介シリーズ。今日から「き」。
「キャッチ２２」でございます。キャッチ２２ってのは、アメリカ陸軍内部で、兵士の行動に規制をかけるための内規のことです。
「２２条の条文で兵士の行動を捕まえておく」、みたいな解釈でいいのではないでしょうか。
第二次世界大戦の最中、戦争行為が嫌になっちゃった兵士たちの心情と行動を描いた傑作戦争コメディでございます。
この映画、間違いなく見ております。
見ているんだけどお。かなり昔に見た映画で、内容に自信ないんですわ。
「マッシュ」とごっちゃになっているところかなりありましてですねえ。
「マッシュ」のほうはかなり過激でオゲレツな内容の、これまた戦争コメディ映画の傑作。
確か見たのは「マッシュ」のほうが先だったように記憶しております。
で、「マッシュ」見まして、けっこう面白く見れたのでこっちも見ようかなって思って、想像していたよりはるかにまじめで真剣な作りの映画だったので「おやっ」って思ったように記憶しております。
どちらの作品も、一つの事件を丹念に描くのではなく、戦場の後方で起こるああだこうだをエピソードとして描いていく手法をとっておりました。
で、時代が時代なんで厭戦的な雰囲気が画面上にほとばしっている感じがありますです。
作品中のエピソードで、アラン・アーキンだったと思うんですが、自分は戦闘の影響で精神に異常をきたしているので、戦場にはいけないと軍医に申告する場面がありました。
アーキンは「自分は異常だから戦場には行けない」という。
ところが軍医は「自分が異常であると判断できるという君は正常だから戦場に行きなさい」と。
そらそうやけど。なんかこの場面がめっちゃ印象に残っておりますです。
とにかくこういう調子で進んでいくちょっと一風変わった戦争映画。
こういう作品が生み出されたっていうのがいかにも時代やなあって思います。
１９７０年ですから、ビートルズ解散の年でございます。このころはこういうひねったコメディという形をとらないと戦争を語ることはできなかったわけですね。
パパの採点。１００点満点中７０点。
うん、ある意味基準点みたいな採点でございます。映画を本気で見始めてまもなくに出会った作品。
それだけに当時中学生の私には理解しきれなかった作品ともいえるかもしれません。

# キャノンボール

１９８１年アメリカ映画
監督　ハル・ニーダム
主演　バート・レイノルズ、ロジャー・ムーア、ジャッキー・チェン、ファラ・フォーセット、ディーン・マーティン
五十音順作品紹介シリーズ。今日は「き」。
「キャノンボール」でございます。
このキャノンボール、シリーズ化されましてけっこう見たような記憶があるんですが、どれを見てどれを見ていないとか、けっこうあやふや。
でもそれぞれの作品、けっこう面白く作られておりまして、シリーズどの作品をとってみてもそれなりに楽しめる作品になっておりました。
「キャノンボール」ってのは、公道違法カーレースの名称でございます。
コネチカットからロサンゼルスまでの５５００キロを走るめっちゃ強引なレースでございます。
このレースの賞金につられて、まあいろんな人がいろんなマシンでレースに参加するわけですね。
このレース参加者がけっこうオールスターキャストでございまして、バート・レイノルズさまやらファラ・フォーセットさまやらディーン・マーティンさまやらロジャー・ムーアさまやらジャッキー・チェンさまやらがブイブイ言わせるわけでございます。
しかしまあこの映画の時代って、バート・レイノルズさまの全盛期でございまして、かのミスター００７三代目ボンドのロジャー・ムーアさまもちょっと格下的な扱いをされております。
この作品の二年後に製作されるシリーズ第二作にはリチャード・キールさまが出演しています。
製作年度から考えまして、この映画が撮影された時期までに「死ぬのは奴らだ」「黄金銃を持つ男」「私を愛したスパイ」「ムーンレイカー」あたりまでは撮られていたわけですよね。
ムーアさまってこの時点で大スターなんですが、それでも主役はあくまでレイノルズさま。
そういう時代だったわけですわ。
ジャッキー・チェンさまはハリウッドに進出してまもなくの頃だったのではないかと記憶しております。
もう、本当に適当な扱いされているのが印象的でした。
今でも現役バリバリってジャッキー・チェンさまくらいのものなんですが。
それはそれで時代を感じてしまいますよね。
パパの採点。１００点満点中７５点。
子供のころ、「チキチキマシン猛レース」ってアニメがありました。
覚えておられますでしょうか。ブラック魔王とケンケンが出てくるやつ。
このアニメのキャラだった魔王とケンケンが後にピンになって「飛行機ヴァージョンの伝書鳩をつかまえるアニメ（すんません、タイトル忘れました）」につながったと記憶しておりますが、その元ヴァージョンのほう、「チキチキマシン猛レース」のリアル実写版みたいなイメージで見

ておりました。
まあいい意味で漫画的な、面白い作品でございます。

# Ｑ＆Ａ殺人調書

１９９０年アメリカ映画
監督　シドニー・ルメット
主演　ニック・ノルティ、ティモシー・ハットン、アーマンド・アサンテ
五十音順作品紹介シリーズ。今日は「き」。
「Ｑ＆Ａ殺人調書」でございます。
監督はシドニー・ルメットさま。
いつもながらこの人、渋くていい映画撮りますよね。
この作品もルメット監督らしい、社会派サスペンス映画でございます。
警察官による麻薬密売人射殺事件が発生します。で、警察当局はこの件を警察官による正当防衛として落着させようとします。
で、この件を調査にやってきた検事局の若い検事が、警部の証言に疑問を感じ、いろいろと事件のことを調査していくわけですね。
調べを進めていくうちに麻薬売買にからむ警察内部の腐敗だとか、歪んだ権力だとか人種差別だとかのダークな問題がボロボロでてくるわけです。
若き検事はそんな腐敗した権力と戦いながら事件の真相を究明しようとするわけでございます。
めっちゃええ感じのサスペンス作品です。
言うまでもなく「Ｑ＆Ａ」ってのは検事が事件を捜査する段階で作成される調書の内容のことです。
このタイトルが示すように、どっちかっていうとアクションとかではく、理論を積み上げていく系のサスペンス映画でございまして、ちょっと疲れる展開の作品であるって感は否めません。
あと見終わったあとの感覚がちょっとどんよりしてしまいました。
まあ社会派サスペンスだから仕方ないですが。
ってことで、映画見てスカッとした人にはちょっと不向きな作品かもしれません。
パパの採点。１００点満点中７５点。
「４８時間」だとか「ダブル・ボーダー」なんかで正義感あふれる「頑固一徹星一徹」みたいな刑事を演じてきたニック・ノルティさま。
この作品では一転してワルの警察官を演じます。
もうめっちゃ巧い。
なんかめっちゃ憎憎しいワルを貫禄たっぷりに演じます。
ニック・ノルティさまってこんなに巧い俳優さんだったんだって思わず見直した作品。
しかしながら、キャスト欄を見て「ニック・ノルティさまが悪の警察官を退治する胸のすくような刑事ドラマ」を期待してこの作品を見ただけに、なんだかどんよりした重いものが残ったことも事実でございます。
ちゃんと解説とか読んで、下調べしてから映画とか見なきゃいけませんやな。

# 吸血狼男

１９６０年イギリス映画
監督　テレンス・フィッシャー
主演　クリフォード・エヴァンス、オリヴァー・リード
五十音順作品紹介シリーズ。今日は「き」。
「吸血狼男」でございます。
めっちゃゴシックで高貴な気品漂う、古き良き時代のホラームービーでございます。
どこが高貴でどこがゴシックでどこに気品があるのか、定義としてよくわからないかもしれませんが。
この作品の主演のオリヴァー・リードさまって人は、ラッセル・クロウの「グラディエイター」に出ておられた人でございます。
逃亡して奴隷となった主人公の将軍を買う、奴隷商人の親方の役の人。
ああいう感じの人でございます。
もうええおじいちゃん。
そんな人が「若者」を演じていたころの作品ですわ。
えっとね、私って子供時代から、ホラー映画とかモンスタームービーとか大好きだったんです。
そのころに作られていた作品が「猿の惑星」シリーズであったり、ハマープロの「ドラキュラ」シリーズであったり。
で、そのころの少年雑誌に巻頭スペシャル恐怖映画特集みたいな企画でとりあげられていた「懐かしの恐怖映画」が、ボリス・カーロフの「フランケンシュタイン」だとかベラ・ルゴシの「魔人ドラキュラ」とかの作品。
今日のお題の狼男でいうとロン・チャニイ・ジュニアの「狼男」なんかがとりあげられてました。
このオリヴァー・リード版の「吸血狼男」も、時代が時代だけに流血シーンや残虐シーンはかなり控えめでございます。
今だと狼男ムービーは「変身シーンをどれだけのインパクトをもって映像化するか」だけにポイントが集中してしまいがちですよね。
この作品は「狼男への変身過程」をコマ送り方式の特撮で描いた（恐らく）最後くらいの作品ではないかと思います。
この次に映画化された狼男ムービーっていうと、恐らく「狼男アメリカン」あたりになると思いますので。
そういう意味では「使用前・使用後の使用前のほう」としてとりあげられることも多い変身シーンが見られます。
物語のほうはそうとうどんよりしてしまいます。
狼男ってどんよりしない終わらせかたってほぼありえないですよね。
そういう意味ではストーリー展開もクライマックスもめっちゃ紋切り型のものだし、あえてここ

で物語ご紹介するまでもないかと思うようなお話でございます。
パパの採点。１００点満点中６５点。
オリヴァー・リードさまって、おそらくこの作品で認められてブレイクした役者さんだと思います。
それまでは多分舞台のほうで活躍されていたんだと思いますが。でもやっぱりめちゃくちゃ巧いです。
この人、文学座の江守　徹さんに似ているって思うのは私だけでしょうか。
ま、だからなんやねんって話ですが。
そんなオリヴァー・リードさま、２０００年の５月に亡くなっておられました。
原稿執筆にあたり、いろいろ調べておりまして知りました。ご冥福をお祈り致します。

# 恐怖の報酬

１９７７年アメリカ映画
監督　ウィリアム・フリードキン
主演　ロイ・シャイダー、ブリュノ・クレメール、フランシスコ・ラバル
五十音順作品紹介シリーズ。今日は「き」。
「恐怖の報酬」でございます。
けっこう映画が好きだった父が絶賛していた作品、「恐怖の報酬」。
高校生だか大学生だかになって、けっこう映画を見るようになった私に、父が「『恐怖の報酬』見たか？あれ、おもしろかったぞ」って言ってくれたことがありまして。
父が私に、具体的に作品名をだして「この映画が面白かった」って言ってくれた作品って少なかったんで、妙に記憶しております。
ただ、父が言っていた「恐怖の報酬」はアンリ・ジョルジョ・クリーゾー監督、イブ・モンタンさま主演のフランス映画。
そうです。この作品、リメイクなんですわ。
映画評論の書籍なんかを見たところ、作品的なクオリティは「雲泥の差」らしいです。
それぐらいクルーゾー版は素晴らしかったそうでございます。
ごっつい山奥の油田で火災事故が発生いたします。
その消火にはニトログリセリンが不可欠。
誰かが保管場所の倉庫から火災現場までそいつを運ばなければなりません。
ところがこのニトログリセリンってのは皆様ご存知の通り液体爆薬でございまして、ちょっとしたショックで爆発してしまいます。
大規模な油田火災事故の消火活動に使おうってんですから、必要とされるニトログリセリンの量は半端ではありません。
どうしようかってんで、命知らずのならず者トラックドライバーが選ばれまして、二台のトラックが別ルートで出発して現場に向かいます。
それぞれのトラックに載せる爆薬の量は火災消火に十分な量でございます。
ってことはどういうことかといいますと、「どちらか一台のトラックが無事火災現場にたどりつけばそれでいい」ってことでございます。
言い換えると、二台のトラックどちらもが無事にたどりつけるとは思われていないほどの悪路を通って爆薬を届けなきゃならないってことでございます。
もうこれだけでサスペンスが約束された設定でございましょ？
パパの採点。１００点満点中８０点。
実はめっちゃ面白かったです。
クライマックスの処理がちょっと端折られてしまったかなってきらいはありますが、十分楽しめました。
トラックが行く道も、ええ感じでめっちゃ悪路やし。

壊れかけのつり橋とかあるし。
オリジナル早く見たいんですが、なんかチャンスなくて。でもこれ見たあとでオリジナル見るのも、なんだかなあって感じかもしれませんですね。

# 巨大生物の島

１９７６年アメリカ映画
監督　バート・Ｉ・ゴードン
主演　マージョー・ゴートナー、パメラ・フランクリン、アイダ・ルピノ
五十音順作品紹介シリーズ。今日は「き」。
「巨大生物の島」でございます。
原作はＨ・Ｇ・ウエルズの「神々の糧」です。
この映画見に行ったのは確か中学一年のとき。塾をさぼって大阪まで見に行った記憶があります。
そういう意味ではけっこうごんたくれの中学時代を過ごしてたんですなあ。
名画座デビューは小学校六年だったし。
こういう作品、今だったらたぶんロードショーはされていないんじゃないでしょうか。
よくてこっそりＤＶＤリリースくらいで。
そんな作品でしたが、当時は阪神間に一館しかないシネラマの「ＯＳ劇場」でロードショーされておりました。
舞台はどこかの島。
めっちゃ曖昧な記憶ですんまへん。
個人が所有しているとか、企業が所有しているとか、そういった雰囲気の島です。
この島に主人公たちがやってくるわけですな。
この島には不思議な物質がありまして、その物質を含むものを食べた生物は巨大化してしまうわけです。
一行はとりあえず巨大化した蜂に襲われます。
なんでやねんって思う間もなく、今度は人間くらいの大きさに巨大化したネズミが襲ってくるわけでございますね。
物語の大半はこの巨大ネズミとの戦いに費やされるわけでございまして、やっぱりネズミって頭がいいですから、家とかにもうまく侵入してくるわけですね。
主人公たちはそういう生物を退治にこの島にやってきたわけではないので、ろくな武器とかない状況での巨大ネズミと戦いになるわけです。
パパの採点。１００点満点中７５点。
中学一年生のガキんちょが面白がって見た映画ですから、やっぱり今みたらショボイ映画って感想しか残らないでしょうね。
食べたら巨大化するって設定の「神々の糧」っていう素晴らしいツールがあるにもかかわらず、巨大ネズミとの戦いに終始するって物語の展開もちょいとしょぼい。
今だったらもっといろいろな生き物を登場させてサスペンスもりあげるところでしょうが。
特撮もそんなにいい出来ではなかったです。
左に大写しのネズミ、右に大騒ぎする人間、この二つの画像を合成させる、みたいな特撮。

ネズミと人間がからんで戦うって場面はやっぱりすっごくわかりやすいヌイグルミ使ってましたし。
今の撮影技術使って再映画化してもらえたらもっと楽しめる作品になるのではないかと思います。

# 銀河伝説クルール

１９８３年アメリカ映画
監督　ピーター・イエーツ
主演　ケン・マーシャル、リゼット・アンソニー
五十音順作品紹介シリーズ。今日は「き」。
「銀河伝説クルール」でございます。
何を思ってこの映画を見に行ったのか、全然思い出すことができません。
８７年の作品ですから、大学を卒業して二年後くらいの映画なんですよね。
もっと前に見た映画だって思い込んでました。
どっちかというと、ファンタジー系のＳＦ作品でございます。
覚えているのはそれくらいで、本当に物語の内容とか覚えておりません。
なんか我々のすむ銀河とは別の銀河で、なんとなく中世っぽい雰囲気の惑星があって、そこで魔法とか予言とか剣とかなんたらかんたら。
で、人間の未来を見ることができる一つ目の預言者が出てきたり、不思議な生物が出てきたりしながら悪のボスをやっつけるために旅をする主人公、みたいな。
雰囲気伝わりますでしょうか。
なんかそのまんまテレビゲームみたいなお話でございますでしょ。
ロケ地はほとんどヨーロッパだそうでございます。
普通のＳＦだったらほとんどセット撮影になりそうなもんですが、やっぱり中世チックな雰囲気を作りたかったら撮影地はこうなっちゃいますよね。
なんか雰囲気だけで映画一本作っちゃった、みたいな感じの作品でございます。
でも、設定といい、作品世界といい、そのまんまテレビゲームみたいな感じ。
時代的に、それなりにロールプレイング系のテレビゲームに影響を与えた作品であることは間違いないと思います。
パパの採点。１００点満点中６０点。
こんなに記憶があやふやな作品も珍しいなあと素直に驚いております。
たいがいの作品、あらすじとか断片的な場面とか覚えているんですが。
でも間違いなく見てるんですよね。
パンフレットも持っていたし。今は引越しのどさくさでどっかにやっちゃいましたが。
こういうやばい・苦手系の作品は、映画見終わった直後にちゃんと感想書いておかないとだめですよね。

# キングコング（１９３３）

１９３３年アメリカ映画
監督　メリアン・Ｃ・クーパー
主演　フェイ・レイ、ロバート・アームストロング

五十音順作品紹介シリーズ。今日は「き」。
「キングコング」でございます。
「ウッホ、ウホウホ、ウッホッホ」などと懐かしい歌を思いだしてしまいました。
この曲はアニメ「キングコング」の日本語版の主題歌。
みんな知らんかなぁ。
アニメ版の「キングコング」はこの映画のかなりあと。
ジェシカ・ラングさま主演版の「キングコング」のはるか前。
キングコングものでいうと、日本ものの「キングコング対ゴジラ」とか「キングコングの逆襲」のちょっとあとくらいではなかったでしょうか。
ま、アニメの話は置いといて。
やっぱりこの「キングコング」、全ての怪獣系特撮映画の原典ともいえる歴史的傑作でございます。
私がこの映画を見たのはやっぱりかなり昔でございまして、小学校の高学年くらいのころでしょうか。
アメリカものの怪獣特撮ってのは、伝統的にミニチュアコマ撮り撮影が主流でございまして、それに対して日本の特撮は着ぐるみとか、ミニチュアをワイヤーで操作する撮影が主流でございました。
ですから、この映画を見たころまだまだ子供の私にとっては、この「コマ撮り型の特撮」ってのが新鮮でたまらなかったことをよく覚えております。
シンドバットシリーズとか、恐竜ものとか。
しかし、これらの特撮作品はこの「キングコング」がそもそもの始まりだったってふうに考えられるわけで。
そういった意味で映画史上においての「記念碑的傑作」であるとみていいのではないかと思います。
物語のほうは、もう皆様ご存知の通りでございます。
南海の未開の孤島で巨大な猿「キングコング」が捕獲されます。
コングは人間の女性に恋をしちまったようで。
娘を片手にエンパイヤステートビルにのぼるってえことになってしまいます。
ま、そういうわかりやすい話ですわな。
パパの採点。１００点満点中８０点。
今思い出すと、かなりショボイ特撮ではございますが、それはそれ。

なんせ１９３３年の作品でございますから。
「キングコング」はこのあと、前述のジェシカ・ラングさま主演とナオミ・ワッツさま主演で二度、映画化されます。
それだけでもこの作品が後の映画界に残した業績の大きさがわかるってものですよね。

# キンドレッド

１９８６年イギリス映画
監督　ジェフリー・オブロウ
主演　デヴィッド・アレン・ブルックス、ロッド・スタイガー、キム・ハンター

五十音順作品紹介シリーズ。今日は「き」。
「キンドレッド」でございます。
この映画が封切りされたころ、「映画予告編グランプリ」ってのがありました。
その年一年の映画予告編のなかで、よくできたものに賞を与えましょうって企画。
そもそもはテレビ番組の企画だったんだと思います。
司会は竹中直人さんがされておられました。
で、１９８５年のグランプリを発表する年の番組で、「これから見られる作品の予告編をご紹介」ってコーナーがありまして、その中で司会の竹中さんが絶賛しておられた予告編がこの映画の予告編。
きゃあああああ、ぎぇえええええ、おーまいがー、みたいな。
本当に「予告編とはこうあるべきだ」みたいな予告編でございました。
私も思わずビデオ借りてみましたです。
とにかくよくできた予告編でございました。
ってことは本編はどないやってんな、ってことにしかなりませんが、「とにかくよくできた予告編の映画だ」としかご紹介できないのがつらいところでございます。
新しい命を創造しようとしたマッドサイエンティストのスタイガーさま。
彼は人間と軟体動物と節足動物が合体したみたいな生き物を創造します。
その生命体が「キンドレッド」。
やがてその生命は博士の研究室から脱走して…みたいな作品。
けっこうグロい造形の新生物。
やっぱり床下とかに潜んでおりまして、床下から触手を伸ばして人をつかまえてひきずり込みます。
その様子を見ていた人はやっぱり言います。「オーマイガー」。
予告編でいいところ全部見てしまっておりましたので、本編は全然印象に残っていないってくらい、よくできた予告編でございました。
って褒めているのか貶しているのか。
パパの採点。１００点満点中６５点。
ロッド・スタイガーさまとかキム・ハンターさまとか、実に渋い役者さんがクレジットに名を連ねておりますが、「ああ、あんた出てはったんでっか」みたいな感じでございます。
残念ながら予告編が素晴らしい作品と素晴らしい作品は必ずしも等号では結ばれないようですね。

# 暗闇にベルが鳴る

１９７５年アメリカ映画
監督　ロバート・クラーク
主演　オリヴィア・ハッセー、ケア・ダレー、マーゴット・キダー

五十音順作品紹介シリーズ。今日から「く」。「暗闇にベルが鳴る」でございます。
私が音楽を聴き始めたころ。甲斐バンドで甲斐よしひろさんが新曲を出しまして。
「テレフォン・ノイローゼ」って曲。
時期でいうと、さだまさしさんが「線香花火」、オフコースさんが「心はきまぐれ」、アリスさんが「遠くで汽笛を聞きながら」をリリースされたころです。
こんな書きかたするとめっちゃ年ばれるし。
その「テレフォン・ノイローゼ」の歌詞で「悩ましく今日も暗闇にベルが鳴る」ってのがありました。
出会って一ヶ月あたりで、めっちゃ電話がしたくてしかたがないにいちゃんの歌。
甲斐さん、この映画見たのでしょうか。見ていないにしても、この映画のことご存知だったことは間違いないですね。
女子寮で起こる連続殺人事件。
犯人は犯行の前に被害者に怪電話をかけることがわかっております。
これがけっこうポイントやったりしますが。
ほとんどイタズラ電話に近いノリの電話なんですが、怒って電話を切ったりしたら犯人の思うツボでございまして。
犯人の毒牙にかかってしまうことになるって寸法です。
まあ怒って電話切らなくても結果は同じだろうと思いますが。
殺人事件が「連続」ともなりますと、犯行に至るパターンがわかってきます。
犯人が被害者に「電話をかける」ってことがわかっていたら、「電話のベルが鳴る」ってことがホラーな状況になるわけですな。
この電話がめちゃくちゃ効果的に使われていて、面白かったです。
オリヴィア・ハッセーめっちゃかわいい。
娘っぽさが消えて、一番女性として魅力的だったころではないでしょうか。
オリヴィアちゃんけっこう好きだったんで、もう少し精力的に活躍してほしかったですね。
パパの採点。１００点満点中８０点。
犯行直前に狙っている相手に電話をかけてくるサイコキラー。
「スクリーム」とかででてきたパターンではありますが、そんな描写のルーツはこの作品。
そういう意味では、サイコキラーものの先駆的な作品でありますし、後の作品に大きな影響を与えた作品であることは間違いないと思います。

# クラス・オブ・１９９９　処刑教室２

１９９０年アメリカ映画
監督　マーク・Ｌ・レスター
主演　ブラッドレー・グレッグ、トレーシー・リン

五十音順作品紹介シリーズ。今日は「く」。
「クラス・オブ・１９９９　処刑教室２」でございます。
えっと。なんかすごく不思議な流れになってしまった学園バイオレンス「処刑教室」シリーズの第二弾でございます。
不思議な流れってのはどういうことかといいますと、第一作（「クラス・オブ・１９８４」が原題っす）は奥さんをレイプされた教師がブチ切れて、学校の不良グループを一人また一人と抹殺していくってお話だったんですよ。
だけど、第二作（「クラス・オブ・１９９９」が原題っす）はいきなり近未来ＳＦになってしまいまして、学校を牛耳っている不良グループと、アンドロイド教師軍団との悶絶ハイパーバトルアクションに仕上がっております。
暴力がはびこる高校が舞台。
学校側はエスカレートする一方の生徒たちの暴力に対抗するため、アンドロイド教師を導入します。
このアンドロイド教師がけっこうバイオレンスな奴らでございまして、生徒たちはアンドロイド教師たちに力で対抗するわけですな。
かくして校内でＳＦチックなバトルアクションが展開していくこととなるわけでございます。
前作は暴力生徒にえらい目にあう教師たちが主人公。
日本でも松田優作さま教師・舘ひろしさま生徒で「暴力教室」みたいな傑作がありました。
しかしながら今回は教師たちの抑圧に抵抗する生徒が主人公になっておりまして、構造は全く逆になっております。
「狂い咲きサンダーロード」風というか、「火山高」風というか。
アンドロイドが出てくるところなんざ「ウエストワールド」とか「ターミネーター」みたいなノリだったし。
なんかシリーズでありながらのこの視点のあいまいさみたいなところがちょっとひっかかりましたですね。
まあ面白ければそれでいいって言えばそれまでなんですが。
パパの採点。１００点満点中７０点。
上述の「視点の変化」がけっこう戸惑った原因でございます。
まるっきり別の作品にしてしまったほうがよかったような気がします。
「…１９８４」も「…１９９９」も嫌いな世界ではないんですが、暴力を描く立場とか視点とかはシリーズとしては変えないでいただきたかったですね。

ちょっと残念です。

# グリズリー

１９７６年アメリカ映画
監督　ウィリアム・ガードラー
主演　クリストファー・ジョージ、リチャード・ジェッケル

五十音順作品紹介シリーズ。今日は「く」。
「グリズリー」でございます。
「ジョーズ」からはじまった動物パニック映画ブーム。
その中の一編でございます。
グリズリーってのは大熊を指した言葉だったと思います。
「ジョーズ」だとか「オルカ」だとかは海の生き物でございますよね。
で、陸でもこういうモンスターパニックアクションができないものかってことはまあ誰でも考えるところでございますわな。
で、それを素直に映画化したのがこの作品でございます。
舞台はアメリカ。
場所はなんだかキャンプ場だか森林公園だか、なんせそんな感じの場所。
そこに人食い熊が出没し、キャンパーの皆さんが次々に犠牲になります。
そしてついに人間対熊の戦いが繰り広げられることになるわけでございます。
熊ってけっこう全世界におります。
日本にもけっこう普通にいてる動物ですよね。
鮫もそうだけど。
そういう「身近なんだけどめったに会わない動物」の恐怖を描いたのはけっこう正解だったと思います。
とはいえ、柳の下には二匹目のどじょうはあんまりいないもんですし。
映画そのものはそこそこヒットしたって記憶がありますが、作品としては同じ動物襲撃ものの中では「吸血の群れ」（これはビッグモンスターではなく、普通の大きさの爬虫類が襲ってくるって作品でした）みたいな、ちょっとひねったもののほうが好きですね。
パパの採点。１００点満点中６５点。
それなりに面白かったことは面白かったですが、「うん、なんだかなあ」って印象が最初から最後まで消えませんでした。
やっぱり「ジョーズ」の世界をそのまんま陸にもってきたんやなあって印象がつきまとっていた作品でございます。
前述の部分では書ききれなかったですが、動物パニックものはこの「グリズリー」のあと、巨大動物でありながら親子愛みたいなところまで描いた「オルカ」とか、可愛がっていたお隣のペットの犬に襲われてしまうってダークな設定の「クジョー」なんかの「ちょっとひねった」系の作品が製作されます。

好みっていう意味ではこのへんの作品のほうが好みでございます。

# クレオパトラ

１９６３年アメリカ映画
監督　ジョセフ・Ｌ・マーキンウィッツ
主演　エリザベス・テイラー、レックス・ハリソン、リチャード・バートン

五十音順の作品をご紹介しております。今日は「く」。
「クレオパトラ」のご紹介。
エリザベス・テイラーさまってね、めっちゃくちゃきれいだったですよね。
冷たい系の美人ではありますが、美人には間違いないです。
っていうか、ちょっと前のハリウッド女優ってすんごいお人形さんみたいにきれいな人が多いですよね。
グレース・ケリーさまとかマレーネ・デートリッヒさまとか。
エリザベス・テイラーさまって、子役から出てきた人でございます。
１９５０年代から６０年代を代表する美人女優。
この「クレオパトラ」は彼女が３０歳とか３１歳とかのころの作品でございます。
もう一番脂がのった美女だった時期になりますでしょうか。
まあ私的には「ジャイアンツ」のころが一番ええなあって思いますが。
伝説の美女、クレオパトラの生涯を壮大なスケールで描いた超大作。
製作費も半端な金額ではなかったってえことは画面を見ましたら普通に見てとれるところでございます。
クレオパトラに関しては、シェイクスピアの史劇とかでも描かれておりますし、何度も映画化されておりますので、皆様ご存知かと思います。
映画ではチャールトン・ヘストンさまがアントニーを演じた「ジュリアス・シーザー」とか「アントニーとクレオパトラ」あたりの作品が印象に残っております。
シーザーとアントニウスの両英雄に愛された女性でございます。
私はクレオパトラものの映画はこの作品を含めてあわせて三本見ておりますが、「ジュリアス・シーザー」や「アントニーとクレオパトラ」はどっちかというと戦闘シーンの描写に重点が置かれているような気がしますね。
絢爛豪華さとか、クレオパトラの生きかたとかはこの作品のほうがいろいろと伝わってくるものが多かったように思います。
パパの採点。１００点満点中８０点。
本作でシーザーを演じるのはレックス・ハリスンさま。
アントニーを演じたのは、私生活でもテイラーの旦那さんだったことのあるリチャード・バートンさまでございます。
テイラーさまとバートンさまは二回くらい結婚したり別れたりしているはずです。
なんせテイラーさまって8回結婚しておりますんで。

# グレートレース

１９６５年アメリカ映画
監督　ブレイク・エドワーズ
主演　ナタリー・ウッド、トニー・カーティス、ジャック・レモン、ピーター・フォーク

五十音順の作品をご紹介しております。今日は「く」。
「グレートレース」のご紹介。
名匠ブレイク・エドワーズさまの代表作といえばこの作品でございます。
この作品は小学校５年生くらいのときにテレビオンエアを見ました。
当時は「刑事コロンボ」シリーズが放映されはじめたころです。
レースに出場するジャック・レモンさまの配下役でピーター・フォークさまが出演しておりまして、とにかくピーター・フォークさまの「コロンボ以外の芝居」が見たくてめっちゃ集中して見た記憶がございます。
えっとね、少し前に「キャノンボール」のご紹介をしたかと思いますが、そのときにアニメの「チキチキマシン猛レース」っぽいってご紹介をしたと思います。
この作品は「キャノンボール」以上に「チキチキマシン」っぽい作品。
ジャック・レモンさまの役柄って、自分がレースで有利になるためにいろいろと小細工する人でございます。
まんま「ブラック魔王」ですわな。
大新聞社の主催でニューヨーク～パリ間のレースが開催されます。
カーティスさまやレモンさまがこのレースの参加者。
ウッドさまはこのレースを取材する女性記者でございまして、フォークさまはレモンさまの部下。
レモンさまとフォークさまは参加者の車に細工をして、結局レースはカーティスさまとレモンさまで争われることになりますが、レース途中でレモンさまがヨーロッパの小国の国王だか皇太子だかに間違われてお家騒動に巻き込まれて…みたいなお話。
ジャック・レモンさま、ピーター・フォークさまがけっこう頑張っております。
この人たちくらい芸達者な役者さんがあからさまな悪巧みとかするあたり、けっこう面白いですね。
巧い人が悪役（っていうか小細工するようなキャラの人）を演じると、本当に物語が面白くなります。
パパの採点。１００点満点中８５点。
この当時はトニー・カーティスさまとかディーン・マーティンさまとかの人気が全盛のころです。（ディーン・マーティンさまはこの作品には出ておりませんが）
私ってトニー・カーティスさまとかイマイチ好きじゃないんですが。

# クロールスペース

１９９６年アメリカ映画
監督　デヴィッド・シュモーラー
主演　クラウス・キンスキー、タリア・バルサム、バーバラ・ウィナリー

五十音順の作品をご紹介しております。今日は「く」。
「クロールスペース」のご紹介。
えっと、この本を執筆するにあたりまして、映画のタイトルとか製作年度とかスタッフキャストなんかの情報が五十音順に並べられた資料本を見ながら、この映画は見た、この映画は見ていないって感じでチェックしたりしておりますが、この「クロールスペース」、「インナースペース」または「アルタードステーツ」と豪快に勘違いしてリストアップしておりました。
で、つい最近、クラウス・キンスキーさまの主演映画を見ていたことを思い出しまして、クラウス・キンスキーさまから逆に検索かけてヒットしたのがこの作品。
結局見ていた作品でございました。
怪優って表現がぴったりのクラウス・キンスキーさまの変態演技が堪能できる一編でございます。
キンスキーさまはアパートの大家さん。
彼は女の人にしか部屋を貸さない大家さんでございます。
実はこの大家さん、めっちゃアブない趣味を持っておりまして。
アパートの女性の部屋を、通気口からのぞくのが趣味のおっさんなわけですね。
で、実はもっとおぞましくてあぶない趣味がありまして。
実はこの人、快楽殺人の趣味もありまして、部屋を借りている女性のお気に入りの人を次々とえげつない方法で殺していく。
だんだんとナチズムとかサディズム崇拝のキャラクターがでてまいりまして、ただの変態ではないことが明らかになってきます。
もう後半なんかは変態キンスキーさまの独壇場。唖然とする勢いで暴れまくります。
パパの採点。１００点満点中８０点。
クラウス・キンスキーさまってほんま、変。
「ノスフェラトウ」もたいがい変でしたが、本作は「もうええやろ」ってくらいに「変」でございます。
役柄が変だから本人も変だってわけでは断じてないのですが、本人も「変」に違いないって思わせるくらいに「変」。
巧く演じられている変態キャラでございます。
とにかくキンスキーさまの存在感と名演（っていうかやっぱり怪演ですね、やっぱり）が目一杯堪能できる作品でございます。

# 激突

１９７１年アメリカ映画
監督　スティーブン・スピルバーグ
主演　デニス・ウィーバー

五十音順の作品をご紹介しております。今日から「け」。
「激突」をご紹介します。
若干２５歳のスティーブン・スピルバーグさまがメガホンをとりました、伝説の傑作でございます。
そもそもはテレビドラマとして製作されましたが、日本では劇場で公開されました。
めっちゃ普通に田舎道を走っておりましたセールスマンのウィーバーさま。
目の前にはなんかチンタラと走る大型タンクローリー。
クラクション鳴らしても我関せずって具合で、相変わらずチンタラ。
強引に抜こうとすると幅寄せしてきたりします。
タンクローリー、速度を落として「先に行け」サインを出したので抜かそうとすると、対向車が迫ってきていて事故りそうになったり。
ウィーバーさま、だんだん腹がたってきまして、めっちゃ強引にこのタンクローリーを追い抜きます。
しかししかし、これが悪夢のはじまり。
タンクローリー、ウィーバーさまの車をひたすら追いかけてきます。
後ろから並走して幅寄せとか、踏み切りで列車が来ているのに車を当ててグイグイ押してきたり、ゴンゴンバンパー当ててきたり。
やりすごそうと思って車を止めても、どこかで待ち伏せしていていつの間にか後ろについていたり。
なんかめっちゃ怖い。
スピルバーグさまの巧いところは、タンクローリーの運転席を一切映さないこと。
見せてもらえるのは、まるで巨大な動物のようなタンクローリーの外観と、極悪運転手の腕とか手とかだけ。
運転手のおっさんがどんな奴かまったくわからないまま、追いかけられて嫌がらせされてえらい目にあうわけでございます。
「恐怖の対象」がなかなか姿を現さないってのは、このあとの「ジョーズ」の恐怖につながりますが、「誰の身にいつふりかかるかわからない、そんな可能性を秘めた恐怖」っていう意味ではこちらの作品のほうがよっぽど怖いような気がします。
そういえば大学生くらいのとき、高速道路で追い抜いたトラックにむっちゃ危険な幅寄せとかされたことがありまして、すごく怖かった記憶があります。
追いかけられはしなかったけど。

そういう意味ではとてもよくできたサスペンス作品だと思います。
パパの採点。１００点満点中９０点。
この作品を見たのはテレビのオンエアでございました。
小学校六年くらいだったかな。
ＮＨＫで「刑事コロンボ」に続いて「警部マックロード」が放送されていたくらいの時期でございます。
マックロード警部＝ウィーバーさまがタンクローリーに追いかけられて怖い目にあうってことで、小学生ながらにすごく怖いって思いながらも楽しんだ記憶がございます。

# ケンタッキー・フライド・ムービー

１９７７年アメリカ映画
監督　ジョン・ランディス、ジェリー・ザッカー、ジム・エイブラハムズ、デヴィッド・ザッカー
主演　コリン・メイル、ジェリー・ザッカー、ジム・エイブラハムズ、デヴィッド・ザッカー

五十音順の作品をご紹介しております。今日は「け」。
「ケンタッキー・フライド・ムービー」です。後に「フライング・ハイ」シリーズや「裸の銃を持つ男」シリーズで大暴れすることになるザッカー・ザッカー・エイブラハムズのトリオがジョン・ランディス監督と撮った悶絶ギャグムービー。
作品そのものはオムニバス形式になっておりまして、短いギャグコント（になるんだろうなあ）が積み重ねられて一本の映画になっております。
例えば、「オイル不足」ってネタ。
全世界的なオイル不足が深刻になり、企業はさまざまな方法で対応しておりますってＰＲしたあとに、ニキビ面の若者の顔からオイルをとっていたり、フライドチキンの食べ残しだとか包み紙からオイルをとっている場面がでてきたり。
教育番組のパロディ「塩化亜鉛と生活」ってコントでは、平和なキッチンから「塩化亜鉛」を原料となった製品が順に消えていき、キッチンが火の海になり、ブレーキの壊れた車が突っ込んできたりします。
「アイワットネス・ニュース（目撃ニュース）」は、エッチしている若者の行為をテレビの向こうのニュースキャスターとかスタッフが「目撃」して大興奮するってオゲレツなネタでございます。
作品の中盤の「燃えよ鉄拳」はけっこう長い超大作。
っていってもほとんど「燃えよドラゴン」のパロディなんですが。
めちゃくちゃ細かくいろいろなシーンをパロディにしてくれております。
これはラストが驚き。爆笑してしまいました。
ネタの中ではこれが一番好きでしたね。
画面のすみっこのほうでちょこちょこって遊ぶみたいなところが「裸の銃を持つ男」あたりの作品ではありましたが、このころからすでにそういう遊び心が満載でございます。
パパの採点。１００点満点中９５点。
「フライングハイ」シリーズや「裸の銃を持つ男」シリーズにつながる破天荒なギャグはここからはじまったって感じでございますね。
そういう意味では個人的には大好きな作品でございます。

# 荒野の用心棒

１９６４年イタリヤ・西ドイツ・スペイン合作
監督　セルジオ・レオーネ
主演　クリント・イーストウッド、ジャン・マリア・ヴォロンテ

五十音順の作品をご紹介しております。今日から「こ」。
「荒野の用心棒」です。
黒澤　明監督の「用心棒」を無断で西部劇に翻案して作品撮ったら、あっと驚く大当たりをしてしまったって作品でございます。
西部劇に翻案された黒澤作品って、「七人の侍」と「用心棒」が有名ですが、「荒野の七人」のほうはユル・ブリンナーが翻案の権利をちゃんと買い取ったのに対して、この「用心棒」は無断翻案でございまして、確か裁判沙汰になっていたような記憶がございます。
この作品に関しては、もう言い訳のしようがないくらいに細部までコピーされておりまして、裁判のほうはおそらく黒澤監督の勝訴になったのではなかったでしょうか。
手元の資料では、監督　原作　脚本・セルジオ・レオーネ、原作　黒澤　明・菊島隆三ってなっております。
舞台はメキシコの国境に近い町。
ここでは町の有力者が二人おりまして、その二派が血で血を洗う抗争を繰り返していたわけです。
その町にふらりとやってきたガンマン＝イーストウッドさま。
彼は町の人々がその争いに巻き込まれて犠牲になっていることを知り、その二派を互いに戦わせて同時にブッ潰すという荒っぽい計画をたて、実行することにしますが…
なんか「用心棒」のあらすじ書いているみたいな気分になりますが、しゃあないですな。
だって話の筋が同じなんだもん。
主演のイーストウッドさま、それまでちょっとヒット作に恵まれない系の役者さんでしたが、この一作で大ブレイク。
スターの仲間入りを果たすことになります。
以後、髭面のガンマンっていうマカロニウエスタンの定番主人公像は、この作品のイーストウッドがそもそものはじまりでございます。
パパの採点。１００点満点中７０点。
五社英雄監督の「御用金」もウエスタンにコピーされていたような記憶があるんですが。
この作品に関しては翻案版のタイトル覚えておりませんで、本コラムではとりあげておりません。
情報ご存知の方はご一報くださいませ。

# ゴシック

１９８６年イギリス映画
監督　ケン・ラッセル
主演　ガブリエル・バーン、ジュリアン・サンズ、ナターシャ・リチャードソン
五十音順の作品をご紹介しております。今日も「こ」。

「ゴシック」のご紹介です。
巨匠ケン・ラッセル監督が描く、幻想的ホラー世界。
ってふれこみだったんですが。
ホラーの部分をめっちゃくちゃ期待して見ましたが、ホラー部分があまりにも中途半端に描かれておりまして、イマイチ乗れなかったです。
かといって文芸作品って呼ぶにはクセがありすぎるし。
うむむ。どんな評価をするべきか、最後までわからなかった作品です。
「フランケンシュタイン」が創作されるに至る経緯を描く作品。
詩人のシェリー夫人が詩人バイロンに誘われて彼の屋敷に招かれまして、まあそこには名前の通った詩人や作家なんかが招かれていたりなんかします。
バイロンはけっこう怖いもの好きなおっさんでございまして、本物の幽霊を招く儀式なんかしたりするわけですな。
そんなことしながら、招かれたそれぞれのゲストに怖い話を創作させたり。
で、シェリー夫人はこの滞在での体験をもとに「フランケンシュタイン」を執筆するのでございました、みたいな話。
幽霊を招く儀式とかして、「エクソシスト」みたいにごっついことになるわけではありません。
なんとなく不思議なことがあったり、ゲストの皆さんが怖い夢見たり。
話が進んでいくにつれ、今、映像として見せられているのは「現実」なのか「ゲストが見ている夢」なのか「誰かの創作」なのかがだんだんわからなくなってきまして、まあそういうあたりが幻想的かなあとか思いましたが、どっちにしても「現実」に起こる怪奇現象はあんまりたいして怖いものではなく。
京極堂（作家京極夏彦さんが描く、推理小説の主人公でございます）あたりなら、「この世には不思議なことなど何もないのだよ、シェリーくん」とか言って簡単に謎解きしてしまいそうなレベルの怪異です。
んだもんで、ホラー好きな私にしてみましたら、なんとなく消化不良な内容でございました。
パパの採点。１００点満点中６０点。
この映画を見たときのビデオジャケットに、夢魔だかゴブリンだかが描かれておりましたが、これも「創作」または「夢」の場面。
本当にゴブリンとか出てきて欲しかったんですが、まあ登場人物が実在の人ばっかりなんで、そうもいかなかったのかなあ。

# 個人生活

１９８６年フランス映画
監督　ピエール・グラニエ・ドフェール
主演　アラン・ドロン、シドニー・ローム、ジャンヌ・モロー
五十音順の作品をご紹介しております。今日も「こ」。

「個人生活」のご紹介です。
アラン・ドロンさまの人気絶頂期に封切された不倫恋愛ドラマでございます。
何度も書いておりますがこの頃のアラン・ドロンさまってめっちゃくちゃ人気がありました。
「ロードショー」「スクリーン」誌の人気スター投票では常時二位。
ちなみに一位がブルース・リーさまで三位がジェームス・ディーンさま。
四位がロバート・レッドフォードさまあたりだったと記憶しております。
ブルース・リーさまとジェームス・ディーンさまはこの時点ですでに故人でしたので、当時存命していたスターの中ではダントツの人気俳優だったってことになります。
女優ランキングはけっこうころころ入れ替わってましたね。
オードリー・ヘップバーンさまとかオリヴィア・ハッセーさまとかジャクリーン・ビセットさまあたりが人気ありましたね。
さて今日のお題はアラン・ドロンさまの「個人生活」でございます。
「アラン・ドロンのゾロ」の回あたりでご紹介したと思いますが、この映画は製作された順番でいいますと「ゾロ」の直前だとか直後とかでございます。
つまり一番人気があったころです。
この頃のドロンさまは、アクションものとかの起伏に富んだ話でなくても不倫もののラブロマンスで楽勝にお客さんを集めることができたってことです。
ドロンさまが演じるのは政治家。
大臣の椅子でも狙おうかって男。
そんなおっさんがファッションモデルのロームさまと出会いまして、いい関係になります。
ドロンさまはもちろん家庭をもっておりまして、家庭と愛人の間、そして仕事とプライベートの間をごちゃごちゃと揺れ動くことになるわけですな。
クライマックスはけっこうダークな感じでございます。
ロームさまはついにドロンさまに仕掛けるわけですな。
今夜決めた時間までに来てくれないと自殺します、みたいな。
その日のドロンは政治家的勝負の大事な日。さあてどうする色男。
パパの採点。１００点満点中６５点。
アラン・ドロンさまを評価するかしないかで評価は大きく変わってくると思いますね。
私的にはイマイチアラン・ドロンさまって好きではありませんので、やっぱり評価は低め。
小学校時代は五十作の全てを制覇したいって思うくらい崇拝しておりましたが。

# コナン・ザ・グレート

１９８２年アメリカ映画
監督　ジョン・ミリアス
主演　アーノルド・シュワルツェネッガー、ジェームズ・アール・ジョーンズ

五十音順の作品をご紹介しております。今日も「こ」。
「コナン・ザ・グレート」のご紹介。
アーノルド・シュワルツェネッガーがデビューして間もなく、その名前を認知されるに至った最初の作品でございます。
コナン・ザ・グレートシリーズのあとにかの「ターミネーター」主演ってことになります。
「コナン・ザ・グレート」でございますが、これはＲ・Ｅ・ハワードさまの人気冒険ファンタジー小説の映画化でございます。
実はこの映画を見た当時、私はこのお話のことよくわかっておりませんで。
史劇だろうなって思って見ておりましたら、いきなり呪術師だとか魔法だとかが出てきまして、けっこうびっくりした記憶があります。
時代設定っていつなんでしょう。
奴隷とか剣闘士とか出てくるから、それなりにめっちゃ昔です。
呪術師に家族を殺され、故郷の集落を皆殺しにされた少年。
彼は奴隷として売られまして、めっちゃ力仕事をする現場（なんかみんなで棒をもってごろごろ回す仕事なんですが。伝わるかなあ）にまわされます。
少年がごろごろ棒をまわしていたら、時はながれて十数年後。
少年はシュワルツェネッガーさまに成長しております。これがコナンね。
いつしか彼は剣闘士になりまして、無敵の称号を手に入れるわけですな。
やがて彼は仲間たちの力を借り、家族の仇をとる旅をすることになります。
で、魔法とか妖術とか大蛇とか。
コナンが手に持つのは剣で、鎧をつけて戦うと。
うんうん。ファンタジーの世界でございます。
えっと。私ってファンタジーは苦手なんですが、こういう「コナン系」のファンタジーはけっこう許せる人でございます。
「ダンジョン・アンド・ドラゴン」とか「ドラゴン・スレイヤー」、「銀河伝説クルール」なんかは苦手なんですが、「コナン・ザ・グレート」とか「ウイロー」は許せる。
ちょっとどこがどうって説明しにくいんだけど。
中途半端な昔の設定ってあかんのでしょうか。
「剣闘士」の昔なら許せるんだけど、「おとぎ話の魔法使い」の時代は苦手って感じでしょうか。
ようわかりませんが。

パパの採点。１００点満点中７０点。
奴隷として強制労働させられていたコナン君。なんであんなにムキムキになれたのでしょう。
プロテインちゃんと摂れてたのかなあ。
他の奴隷はけっこう貧相な身体つきで、シュワちゃんだけが筋骨隆々ってシーンがめっちゃ気になりました。
肉体労働のせいでみんなムキムキなんだってのならわかります。
逆にシュワちゃんも貧相な身体で、剣闘士になって食生活が変わってだんだん栄養が身体に行き渡ってムキムキになったってのならわかるけど。
ひょっとしたら弱っちい奴隷仲間の食事強奪してムキムキになったんやろか。

# コピーキャット

１９９５年アメリカ映画
監督　ジョン・アミエル
主演　シガニー・ウィーバー、ホリー・ハンター

五十音順の作品をご紹介しております。今日も「こ」。
「コピーキャット」のご紹介。
この作品のことを知って、めちゃくちゃ期待しましたが、実際見ましたら予想していたほどでもありませんでした。
ちょっと残念。
衝撃のサイコサスペンスってことでかなり宣伝とかされておりました。
「サイコサスペンス」っていいますと、「羊たちの沈黙」とか、「恐怖の岬（または「ケープフィアー」）とか、タイトルを書いてはいけない作品を思い浮かべますが、結局「サイコ」の部分を強調してドンデン返しの楽しさを味わう作品にするか「サスペンス」を強調して、その犯人がたまたまサイコさんで、その犯人とハラハラドキドキって作りにするかどっちかだと思うんです。
本作は後者の典型的作品かと思います。
ウイーバーさまは犯罪心理を研究している分析医でございます。
彼女はかつて異常者に命を狙われたことがありまして、それが原因で外出恐怖症に悩まされております。
そんなとき、かつて起こった殺人事件をコピーした連続殺人事件が発生します。
ウイーバーさまはその犯行手口から、犯人はかつて自分の命を狙った殺人犯ではないかと疑います。
ウイーバーさまは事件担当の女刑事ハンターさまに連絡をとりまして、協力して捜査にあたりますが…
ウイーバーさまが徹底的にいじめられ、いたぶられる物語展開。
で、やっぱり逆襲されてしまうわけですが、どうなんやろ。
もう少しか弱いイメージの女優さんを起用したほうが面白くなったのではないかなって思います。
ウイーバーさまが悪いわけではありませんが、うん。
ちょっとね。
このキャスティング、なんか違うんじゃないかなって思いました。
パパの採点。１００点満点中６５点。
かのエイリアンと戦い続けたウイーバーさまの主演作品でございますが、申し訳ありませんが
ウイーバーさまって「エイリアン」のイメージが強すぎるんですよね。
エイリアンとタイマン勝負できる女が、たかが犯罪者ひとりに手こずるなんてありえへん、って

勝手に思ってしまうのでしょうか。
シュワルツェネッガーさまとかスタローンさまとかラングレインさま、あとジェット・リーさまなんかが普通の人相手に手こずったりしたら、やっぱり違和感感じるでしょ。
彼女もそういう感じのキャラでございますね。ちょっとかわいそうな感じもします。

# サイゴン

１９８８年アメリカ映画
監督　クリストファー・クロー
主演　ウィレム・デフォー、グレゴリー・ハインズ

五十音順の作品をご紹介しております。今日から「さ」。
「サイゴン」のご紹介。
「プラトーン」で圧倒的な存在感をみせたデフォーさま。
再びベトナムが舞台の作品に登場です。
私個人としてはデフォーよりも「スーパーダンサー、グレゴリー・ハインズ」の活躍を見たかったわけですが、やっぱり「サイゴン」ってタイトルの映画では踊らないですよね、普通。
ハインズさまはこれまでにも「シカゴ・コネクション～夢みて走れ」でダンスの登場しない普通の作品に挑戦しておりますが、ベトナム戦争下のサイゴンを舞台にしたこの作品ではやっぱりスーパーダンスは披露してくれなかったです。
デフォーさまとハインズさまは刑事でございます。
連続殺人事件が発生しまして、捜査の結果、事件の重要参考人として浮かんできたのが現役のアメリカ軍将校でございます。
二人は将校を捕らえるためにベトナムのサイゴン、つまり戦争の最前線にやってまいります。
しかしながらそこにはやはり「戦争犯罪」をめぐる様々な壁がかれらの捜査を阻むことになりまして、事件は意外な展開を見せることになっていきます…
ウィレム・デフォーさまってこのころが一番いいように思いますね。
「プラトーン」とか「ストリート・オブ・ファイヤー」なんかのころはいかにもいかにもな若造っぽかったし、かといって「スパイダーマン」くらいになるとただのおっちゃんやし。
ハインズさまは、実は普通の芝居でもけっこういいんですわ。
でもやっぱり「コットンクラブ」だとか「ホワイトナイツ」なんかで踊る役をやったらめっちゃ輝きますよね。
もっと踊る作品で頑張っていただきたいんですが、そろそろ「踊りたくても踊れない」世代になりよるんでしょうなあ。
パパの採点。１００点満点中７０点。
予想していたよりも社会派カラーか強くて、それなりの充実感・重厚感が残りました。
「サイゴン」ってタイトルだけでこちらは構えてしまいますが、それでもけっこうどおんと重いものを感じましたからなあ。
さすがの作品って感じでございます。

# ザ・キープ

１９８３年アメリカ映画
監督　マイケル・マン
主演　スコット・グレン、アルバータ・ワトソン
五十音順の作品をご紹介しております。今日も「さ」。
「ザ・キープ」。
Ｆ・ポール・ウィルスンさまのめっちゃぶっとい原作小説を映像化したホラー作品。
この映画が製作されたころ、書店ではこの作品の原作小説が売っておりました。
どうってことはないモンスター系ホラー作品なんだけど、すごく力の入ったプロモーションしてたことだけが印象的。
原作小説もね、例えて言うならスティーブン・キングさまの長編小説くらいの分厚さありました。
映画見ましたが、この映画の原作小説がどうしてこんなにぶっとくなるんだろうって不思議に思ったくらいでした。
ってことは原作に比べて映画は内容薄いってことになるんでしょうか。
まあ原作と映画化作品って似て非なるものであること多いんですが。
戦争中、ドイツ軍が駐留していた「城塞（キープ）」がありましてね、実はその城塞には魔物が封じ込められているわけでございます。
魔物は、自らその封印を解こうと、ドイツ軍兵士たちを操って「封印の十字架」を排除しようとするわけですが、「善なる使徒」みたいなおっさんが出てきて、魔物の復活を阻止しようとするわけです。
しかし彼の努力も空しく、魔物は復活。
で、使徒と魔物の戦いとなるわけでございます。
パパの採点。１００点満点中７０点。
監督のマイケル・マンもそれなりの人だし、原作小説はけっこう評価高いし、主演はスコット・グレンだし、音楽はタンジェリン・ドリームだし。
けっこうすごい作品になる要素いっぱいなのに、ちょっとわけわかんない作品になってしまったのは、主人公の人物描写の描きこみが足らなかったせいじゃないかなって思ってしまいます。
っていうか、ストイックなのか不真面目なのかよくわからないキャラでございましてねえ。
まあしゃあないか。
「復活する伝説の魔物」もめっちゃしょぼい。
「めっちゃ苦労して復活した魔物ってあんたかいな」ってつっこまれそうな造形でございます。
こいつはちょっといただけなかったですねえ。
今だとなんかすごいＳＦＸでややこしい魔物作りそうですが。

# ザ・ショック

１９７７年イタリア映画
監督　マリオ・バーヴァ
主演　ダリア・ニコロディ、ジョン・スタイナー
五十音順の作品をご紹介しております。
今日も「さ」。
「ザ・ショック」のご紹介。
マカロニ・ホラー映画の御大・マリオ・バーヴァさまの遺作となったホラー作品でございます。
１９７７年っていいますと、私が映画みはじめた中坊のころです。
このころって、めっちゃホラー映画好きでございましてなあ。
当時はこの系統の映画、ホラー映画って言わずにオカルト映画って言ってましたが。
「ホラー」って言葉が定着するのは、やっぱり１３金あたりじゃないでしょうか。
それまではオカルト要素のない恐怖映画ってあまりなかったような気がします。
っていうか、あることはあったんだけど、あまりヒットとかしなかったんですね。まあホラー語ると熱くなりますが。
で、「ザ・ショック」のお話。
この作品もやはりオカルト要素がかなり強い作品でございます。
物語の中心となるのは三人家族。
夫と妻と子供ね。
主人公は妻のほうです。
彼らは郊外の豪華な邸宅に引っ越してまいります。
で、この家が怪しい家だったわけですな。だんだん妻の様子が変になってきまして、やがて夫との間にトラブルが発生しまして、そして彼女は精神的に壊れてしまうわけなんですが、本当に怖いのはそこから先でございます。
えっとね、ネタバレになっちゃうといけないから書かないですが、当時「恐怖映画の必殺ダイジェストシーン集」みたいなテレビ特番なんか、けっこうありまして。
この映画がとりあげられるとしたら、必ずといっていいほどオンエアされる有名なシーンがあるんですね。
このシーンだけにはびっくりしました。
ぎえええええって感じのシーンがありました。
そのシーン見たさにこの映画見たに近い。
でもねえ。残念ながら本当に怖いシーンって、そこだけでございました。
もうちょい工夫したらもっと面白くなったような気がするんだけどなあ。
パパの採点。１００点満点中。６５点。
悪くはないです。本当に面白くないわけではないんですが、もう本当に「有名な場面」だけしか印象に残っていない不遇な作品。

言い換えればそれってホラー映画史に残る名場面なんだけど。
でもそれだけってやっぱりキツいですわな。ちょっと残念な作品ではあります。

# 殺意の香り

１９８３年アメリカ映画
監督　ロバート・ベントン
主演　ロイ・シャイダー、メリル・ストリープ、ジェシカ・タンディ

五十音順の作品をご紹介しております。今日も「さ」。
「殺意の香り」のご紹介。
主演はロイ・シャイダーさま。共演、メリル・ストリープさま。
８３年の作品ですので、ストリープさまめっちゃきれいです。
なんだけど。うむむ。悲しいくらい印象に残っていない作品なんですわ。
絶対に見てるんですよ。
映画館で見ました。パンフレットも買いました。
だけど。むむむ。悲しいくらい印象に残っていない。
この映画見た当時って、ロイ・シャイダーさまめっちゃ好きだったんですわ。
なのに。むむむ。悲しいくらい…もうええか。
シャイダーさまは精神医でございます。
彼の患者の一人が謎の死を遂げまして、その死の原因をシャイダーさまが探っていくわけでございます。
その中で現れるのがストリープさま。うん。
シャイダーさまかっこいいし、ストリープさまきれいだし。
でも印象に残っていないのは、やっぱり物語の運びとかがイマイチよくなくて、若干モタモタして、んで謎解きのクライマックスが盛り上がりに欠けて、んで犯人の設定がけっこう普通だったってパターンだったからです。
サスペンスものってけっこう見る人なんですが、「ええええ？」みたいな犯人でないと、時間が経つと忘れてしまいます。
シャロン・ストーンの「硝子の塔」なんかも犯人覚えてないし。
エッチシーンは覚えてるんだけど。
ブルース・ウイリスの「薔薇の素顔」なんかは、犯人はうろ覚えだけど、クライマックスのドンデン返しのシーンはけっこう覚えていたりしますし。
同時期に見たデ・パルマの「ボディ・ダブル」なんか、見なおしたりしたわけじゃないけど、物語のあらすじまでちゃんと覚えてますもん。
うん。そうか。やっぱり強烈なシーンは印象に残ってるんや。ってことはこの作品は…
ってことにしといてくださいませ。
パパの採点。１００点満点中５０点。
そりゃねえ。覚えてないんだから評価しようありませんやな。
で、悲しいことにそういう作品だもんで、もう一回見ようとか思わないんですね。

映画みたあとは記憶が鮮明なうちにちゃんとあらすじや感想、記録しとかないとあきませんね。

# ザ・ビートルズ イエローサブマリン

１９６８年イギリス映画
監督　ジョージ・ダニング
声の出演　ジョン・クライブ、ジェフリー・ヒューズ、ピーター・バトン、ポール・アンジェラス
五十音順の作品をご紹介しております。今日も「さ」。
「ザ・ビートルズ・イエローサブマリン」。
むかしね、フィルムコンサートってのがありまして。
今でもフィルムコンサートってあるのかなあ。
けっこうな値段したことだけ覚えてるんだけど。
そのフィルムコンサートは、ビートルズのフィルムコンサートでございまして、「レット・イット・ビー」と「ビートルズがやってくる　ヤア・ヤア・ヤア」と、この「イエロー・サブマリン」だったと記憶しております。
当時、ビートルズ関連で見ることができた映像ってのは、上記の三作品と「ヘルプ」だけだったように記憶しております。
えっとね、この作品ってビートルズものの傑作アニメーションだって評価されておりますが、よく考えたら「どないなん？」って感じですよね。
アニメだからビートルズが出演しているわけでもなく、声の出演をしているわけでもなく。
ビートルズの音楽をベースにしたアニメーションです。
まあ描かれる登場人物はビートルズの四人なんですが。
ビートルズの四人が、イエローサブマリン号に乗って深海を旅するわけですな。
彼らの行き先は、悪党の攻撃を受けている深海の楽園でございます。
うん。確かにビートルズなんだけど。
フィルムコンサートでアニメ見せられてもなあって感想をもちましたです。
映画を見たのは中学生くらいのときだったですね。
当時はビートルズの四人が吹き替え担当してるって思い込んで見ておりましたが。
後になって「ちゃうやん」って思ったことをすごくよく覚えております。
パパの採点。１００点満点中７０点。
確かにビートルズのサウンドトラックは素晴らしいです。
素晴らしいんだけど。ビートルズって意味ではね、他にも素晴らしい作品がめっちゃありますんで、どうなんかなあって感じですわな。
ほんま申し訳ない評価ですが。

# サムライ

１９６７年フランス映画
監督　ジャン・ピエール・メルヴィル
主演　アラン・ドロン、ナタリー・ドロン、フランソワ・ペリエ

五十音順の作品をご紹介しております。今日も「さ」。
「サムライ」です。
この映画ね、フランス映画やし、スタッフキャストみんなフランス人やし。
だから、「なんやかんや」みたいなフランス語の原題があって、それをお調子者の映画配給会社の人が「サムライ」みたいなタイトルつけたんだってずっと思っておりました。
映画見たとき「この映画のどこがどうサムライやねん」って思ったことをよく覚えております。
で、今回調べてみたら、原題「ＬＥ　ＳＡＭＯＵＲＡＩ」やって。
びっくりやわ。
ドロンさまは一匹狼の殺し屋でございます。
彼はある殺しの仕事で、一人の女に顔を見られてしまうわけですな。
しかしその女はドロンさまをかばう供述をするわけでございます。
彼女の証言に不審を抱く警察当局。警察はドロンさまをマークします。
そんな殺し屋に新しい仕事がくるわけですな。
それはドロンさまを目撃し、彼をかばう証言をした女を殺す依頼でございました…
フィルム・ノワールっていうんですよね、このへんの作品。
けっこう張りつめた感じの作品だったってことは覚えているんですが、なにぶんけっこう前に見た作品なんで、細部まで覚えていないのが残念でございます。
しかしこの時期のアラン・ドロンさまってめっちゃくちゃかっこよかったです。
パパの採点。１００点満点中７０点。
フランス映画ってねえ、けっこう苦手でございます。
昔はすっごく好きでよく見てたんですが、ある時期を境にパッタリ見なくなってしまいました。
どうしてなんでしょうか。あのもっちゃりした言葉が性に合わないんでしょうか。
喰わず嫌いかもなんで、また挑戦してみないといかんなあって思っております。

# ザ・ヤクザ（書き下ろし）

１９７３年アメリカ映画
監督　シドニー・ポラック
主演　高倉　健、ロバート・ミッチャム、岡田英二、岸　恵子

五十音順に作品をご紹介しております。
元ブログのデータが消えてしまっておりまして、この頁については書き下ろしになります。
１９７３年、奇しくも「仁義なき戦い」公開の年に製作された「アメリカ映画のヤクザ映画」。
っていうか、ヤクザ映画ではなく、任侠映画になるでしょうか。
「仁義なき戦い」までのヤクザ映画って、義理人情に厚い主人公が世話になったカタギさんがえらいめにあっているのを見ていられなくなって、悪事を働くヤクザの一家に長ドス持って着流し着て殴り込みにいくという、まあ多少の筋立ての違いはあったとしてもこういう感じの作品がほとんどだったわけですな。
殴り込みのときにはちゃんと仁義をきってから喧嘩しまっせ、みたいな。その仁義も義理人情もなくなっちゃって、ドンパチやるのが東映実録路線なわけでございます。
「任侠映画」のある意味終焉にふさわしい、完璧なまでの「任侠映画の型」をもった作品でございます。
主人公はミッチャムさま。彼は戦時中、日本にいた元軍人。
彼の友人は日本の企業とトラブルを起こしてまして、その話がこじれちゃって息子が拉致されたりしております。
で、戦時中日本にいたミッチャムさま、その友人の頼みで再び日本に行くことになっちゃうわけですね。
ミッチャムさま、日本にいるときにある女性、岸さまと良い関係になってたわけですが、戦地に出て音信不通になっているその女性の旦那さん、高倉さまが実はヤクザもんで、ある日高倉さま、復員してきまして。
でも義理人情に厚いその男は自分のいない間、家族を守ってくれたミッチャムさまに恩義を感じて、身をひく、みたいな話があったわけです。
ミッチャムさま、今回の事件の収拾に高倉さまの力をあてにして日本にやってきたわけですが、予想に反して高倉さま、カタギになっておりまして。
しかし義理人情に厚い高倉さま、ミッチャムさまのために一肌ぬぐことになるわけですな。
ここからけっこうああだこうだありますが、結局最後はお馴染みの「殴り込み」シーン。
「任侠映画」、ハリウッド資本で有終の美が飾れたのではないかなって思わせてくれる幕切れでございました。
あと、殴り込みのあとのラストシーンがけっこう印象に残っております。
ヤクザの人がつけるケジメに「指を詰める」ってのがありますが、うん。
そういう系のヤクザ世界的風習を美化した系のラストではあったんだけど。

いいんだか悪いんだかよくわからない、不思議な感覚にさせてくれるラストでございました。
パパの採点。１００点満点中７０点。
この作品を見た当時は「ヤクザ映画」も「任侠映画」もよく見ていない時期だったので、こういう義理人情の世界は逆に新鮮だったですね。
後に国際的大スターになる高倉さまの世界進出第一作目。
そういう意味では、もう少し評価されてもいいんじゃないかなって作品ではございます。

# さらば愛しき女よ（書き下ろし）

１９７５年アメリカ映画
監督　ディック・リチャーズ
主演　ロバート・ミッチャム、シャーロット・ランプリング、ジョン・アイアランド

この頁も書き下ろし。
ロバート・ミッチャムさま主演のハードボイルド映画でございます。
すごくロマンティックなタイトルですが、内容はそんなにロマンティックな感じではなかったですね。
原作も読みましたが、こちらもロマンティックな感じじゃなかったなぁ。
原作のタイトルが「Farewell My Lovely」だから仕方ないんだけど。
この作品は映画のポスターを見て、ごっついええ感じやんって思って見ました。
シャーロット・ランプリングさまと、その後ろにたたずむロバート・ミッチャムさま＝私立探偵フィリップ・マーロウ。
となると、ランプリングさまとミッチャムさまの間に恋愛感情的なものがあって、ミッチャムさまが「さらば愛しき人よ」って思うんだろうなあって勝手に推測してましたが。
そんな雰囲気はなく、ひたすらけだるく、ひたすらハードボイルドに物語は進行していきます。
私立探偵のマーロウ＝ミッチャムさま、刑務所を出所したばかりだという男から、自分の恋人を探して欲しいとの依頼をうけるわけですな。
調査を始めたミッチャムさまですが、なんか行く先行く先で死体と出会う。どう考えてもかなりヤバそうな事件なわけでございますね。
で、捜査の中でミッチャムさまが出会うのが、街の実力者の若妻、ランプリングさまなのでした。
作品タイトルから考えて、このランプリングさまが物語のキイになるんだろうなって思ってたら、やっぱりそうだったってえかなりわかりやすいお話です。
まあ推理を楽しむ作品ではないだろうからこれでもいいんだろうけど。
パパの採点。１００点満点中６５点。
１９４０年代の雰囲気を忠実に再現しているそうです。そのせいではないのでしょうが、ええ感じでけだるい感が満載。
ただ、こういうハードボイルド系の世界観が苦手な人にはけっこうつらい作品かもしれません。
かくいう私もやや苦手な世界ではあると申し上げておきましょう。

# サランドラ（書き下ろし）

１９７７年アメリカ映画
監督　ウェス・クレイブン
主演　スーザン・レイニア、ロバート・ヒューストン、ヴァージニア・ヴィンセント

えっと。「書き下ろし」の頁についてのご説明。
この本の元となっているブログは、２００７年ごろに連載されていたものでございます。
で、この本は２０１３年あたりに公開。だもんで、かなり時差がございます。
そりゃあ６年も時間があいたらね、別人が書いたものくらいに内容に差があるんじゃなかろうかって思いますが。だもんで、ここへの公開時にはけっこう内容を書き直したりしているわけですな。
２００７年の内容とか、今読んでみたら、恥ずかしかったり、感心したりですね。「俺ってこんなにすごい文章書いてたんや」とか、「こいつ、生意気なこと書いてる」とか。
シリーズものの記述とか、６年たったらかなり修正を加えないといけなくなったりしてますね。
さて今日の作品は「サランドラ」。公開当時は「ジョギリショックがやってくるぅ」みたいなコピーが使われておりました。
ジョギリってのはなんかギザギザになっている剣みたいな刃物のこと。ただし、作品中にはジョギリはでてきません。
全米〇〇州で公開禁止、みたいなコピーもついていた作品ですが、それは１９７０年代の全米公開当時の話。
日本公開は１９８４年なんで、なんでこんなにどうってことない作品が公開禁止になるんやろ、って思っておりました。
そらこの時期の７年って、技術とか映画の面白さとかって劇的に進化していた時期ですもんね。
おそらく何らかの事情で公開されていなかった作品を、予定されてたタイトル変えて激しいコピーつけて公開したんでしょうね。
えっと。内容です。
キャンピングカーで旅行しいる仲良し家族がおりまして、まあ怪しい土地にたどりつくわけですな。
お約束ですが、そこで車が故障すると。
助けを呼びに行った男たちは帰ってこない。
で、お約束のサイコさんが登場して、えらいことになるって作品。
サイコさん、今回はファミリーでご登場です。サイコさんっていうよりは食人ファミリーっていうか。
監督はウェス・クレイブン監督です。これにもちょっとだまされました。クレイブン監督だったらそれなりに面白いやろって先入観で見てしまった作品でございまして。
１９７７年の作品ってことは、「エルム街の悪夢」のはるか前の作品。監督デビューして二作目

の映画でございました。
うん、大傑作の７年も前のデビュー当時の作品はね、別人の作品ですわな。
パパの採点。１００点満点中６５点。
作品が終わりそうになって、「いやいや、まだ続きがあるやろ。これで終わりのはずがないがな」って疑って、席を立つのが遅れた作品。
確かホラー映画の三本立てのその日の最終上映の回で、お客さんって私一人だったように記憶しています。
それなのに会場に明かりがつくまで席を立たなかったもんで、そのときの映画館のおっちゃんに悪いことしちゃったなって思ったりして。
映画関係者の皆様、映画ファンにこういうことを思わせないような作品を作っていただきたいものでございます。

# サンゲリア(書き下ろし)

１９７９年イタリア映画
監督　ルチオ・フルチ
主演　イアン・マカロック、ティサ・ファロー、リチャード・ジョンソン

書き下ろし頁です。
マカロニウェスタンやらコメディやらサスペンスやらを撮っておられた、やや職人的なところがあったルチオ・フルチ監督の、その後の監督人生を決定づけた作品でございます。
この作品はロードショー公開時に映画館で見ました。ジョージ・Ａ・ロメロ監督の「ゾンビ」公開の少し後で、今では考えられないですが、一般の大作を上映するような普通の映画館での上映でした。
一隻の船がアメリカに漂着します。警官が船を調べていたら、全身腐乱したあからさまなゾンビさんが登場。
ゾンビさんは撃たれて姿を消しますが、警官が一人犠牲になっちゃいます。
船の持ち主の娘、ファローさまと、新聞記者のマカロックさまの二人は、行方不明のファローさまのお父さんを探しに、島に行くってぇ夫婦の船に乗って父が赴いた南海の島へ行くことになります。
まあこの展開で普通に事が運ぶわけがない。
そう、その島は疫病で蘇ったゾンビさんたちが歩き回る、死者の島だったのでございました。
この作品では蘇った死者を「サング」ってよんでおりまして、で、サンゲリアね。
この作品の「サング」、けっこうグロいです。
グロいっていうか何というか、「ゾンビ」に比べて、かなり腐敗が進んでいる感じ。
「うげっ」って感じです。そのおつもりでご覧になられたほうがいいかも。
なんでもこの作品、イタリアで公開された際は「ゾンビ２」ってタイトルだったようです。明らかに柳の下のドジョウ狙い。
「ゾンビ」のイタリアでの興行権をもっていたダリオ・アルジェント監督がクレームをつけたところ、監督として格上のフルチさま、「そもそもゾンビって言葉はビードゥー教で使われている言葉で、アルジェント監督が権利を主張できる性質の言葉ではない」って論法でクレームを一蹴したそうです。
パパの採点。１００点満点中７５点。
フルチ監督にとってはターニングポイントになった作品ではあるのでしょうが、やはり二番煎じ的な印象はぬぐえません。
ただ、結末のどんより感はけっこう好きでございます。
あ、あと、作品の最大の見せ場は作品終盤の「眼球串刺し」のショックシーン。
見てて目が痛ぁくなっちゃったです。

# 三銃士（１９７３）（書き下ろし）

１９７３年アメリカ映画
監督　リチャード・レスター
主演　マイケル・ヨーク、リチャード・チェンバレン、フランク・フィンレイ、オリヴァー・リード、ラクエル・ウェルチ、フェイ・ダナウェイ、チャールトン・ヘストン、クリストファー・リー

何度も映画化されております、アレクサンドル・デュマ原作の「三銃士」。このレスター監督版での映画化では、あまりに大作になりすぎちゃったために、原作を前半部分と後半部分に分けて二本の映画にしてしまったようです。
この「三銃士」はもちろん作品の前半部分。田舎から出てきたダルタニアン＝ヨークさまが近衛銃士になるまでの活躍を描きます。
銃士になることを夢見てパリに出てきた青年ダルタニアン。
田舎者ゆえ、数々の失敗をしでかし、あれやこれやで近衛銃士のアトス＝リードさま、ポルトス＝フィンレイさま、アラミス＝チェンバレンさまの三人と決闘することになってしまいます。
さあ決闘や、ってタイミングで、三銃士の宿敵、リシュリュー枢機卿＝ヘストンさまの親衛隊が現れて、三銃士対親衛隊の様相に。
この大チャンバラに三銃士側に加勢したダルタニヤン、銃士たちと行動をともにするようになります…
とにかく何度も映画化されている作品。
原作に忠実な映画化が多いので、どの作品紹介も似たような感じになっちゃいます。
ただ、出演者の豪華さって意味ではこの作品が最高かもしれません。
チャールトン・ヘストンさまにフェイ・ダナウェイさまにクリストファー・リーさまが揃って悪役で、そんな三人が悪事の相談とかするわけですから、けっこう豪華。
ラクエル・ウェルチさまの無駄にでかい感満載のお乳も見物でございますな。
パパの採点。１００点満点中７５点。
作品としてはこのあとの「四銃士」のほうが面白いです。
だもんで、ちょっと点数低め。
よく考えたら、三銃士だけで４本～５本見てますね。
キャストの豪華さでは本作がダントツですが、チャンバラの面白さではハイアムズ監督の「ヤング・ブラッド」が、設定の奇想天外さでは「三銃士　王妃の首飾りとダヴィンチの飛行船」のほうが勝ってるように思います。

# 四銃士（書き下ろし）

１９７４年アメリカ映画
監督　リチャード・レスター
主演　マイケル・ヨーク、リチャード・チェンバレン、フランク・フィンレイ、オリヴァー・リード、ラクエル・ウェルチ、フェイ・ダナウェイ、チャールトン・ヘストン、クリストファー・リー

製作年度だけ書き換えて、監督キャストコピーしちゃった。
前頁で書きましたが、そもそもこの作品は長い一本の映画を二本の映画に分割した感じ。
だもんで、映画的面白さでは「三銃士」は「四銃士」にはとてもかなわない。
そらそうです。物語後半より前半のほうが面白かったら問題です。
まあたまに前半のほうが面白い映画もありますが。
前作で晴れて銃士隊に加入したダルタニヤン＝ヨークさま。三銃士ってのは国王・王妃に忠誠を尽くす、近衛銃士でございます。
三銃士に敵対するのは、権力奪取をもくろむリシュリュー枢機卿＝ヘストンさま。
リシュリューは配下のミレディ＝ダナウェイさまとかロシフォール＝リーさまだとかを使って、陰謀を企みます。
前作では「国王とか王妃の失脚」だったのですが、今回はちょっと悪事のスケールがアップしまして、「暗殺」だとかを企てるわけですな。
果たして銃士たちは国王・王妃を守ることができるのでしょうか。
パパの採点。１００点満点中７５点。
おやおや。作品としては「四銃士」のほうが面白いって書いたのに、「三銃士」と同じ点数ですかい？ってご指摘があるかと思いますが。
実は、この映画を見た当時、めっちゃお気に入りやった役者さんが作品中で殺されちゃうんす。
その場面以降、ブルーになっちゃってあまり面白く感じなかったです。ぶっちゃけ。
ちょっと残念なクライマックスでございました。

# 京極夏彦・怪／赤面えびす

２０００年ＢＳＷＯＷＷＯＷ作品
監督　酒井信行
主演　田辺誠一、佐野史郎、遠山京織子、火野正平

「隠神だぬき」のときにもご説明したかと思いますが、この作品は厳密に言いますれば、映画ではございません。
ＢＳＷＯＷＷＯＷのオリジナルドラマでございます。
田辺さま主演の「怪」シリーズで映画として公開されたのは、第一作の「七人みさき」のみでございます。
でもねえ、京極先生の作品、大好きなんで、どうしても紹介したかったし。
で、強引に紹介しちゃいます。
っていってもこの作品はちょっと印象が薄いですね。
作品ごとの傾向としては、作品そのものが強烈だった「七人みさき」、原作のひねりが効いていてトリッキーだった「隠神だぬき」、で、この作品があって、アクションが一番面白かった「福神ながし」へとつながります。
この作品って、「怪」シリーズの中でもちょっと地味な印象が残っております。
ちなみに原作の「巷説百物語」でのおすすめは「小豆洗い」「帷子ガ辻」「舞首」、あと「芝右衛門狸」（隠神だぬきの原作っす。タイトル間違ってるかも）。
あらすじとかかなり怪しいです。
ボロが出るといけないので書かないでおきますが。ごめんなさい。
作品を見ておりまして「おやっ」って思ったのは、火野正平さんがご出演されておられることでしょうか。
「怪」シリーズは、京極さんの妖怪小説と、「必殺」の強引なコラボがみどころのひとつでありまして。
で、火野さんって「必殺」のころは情報屋役ばっかりで、ほとんど殺し屋の役されてなかったんじゃないかって思うのですが。
さあさ、今回は殺し屋役されるのでしょうかねえ～　ＤＶＤでご確認くださいませ。
パパの採点。１００点満点中６５点。
京極さんの原作にしてはポイント低いです。ごめんなさい。
ちょっとねえ…確実に見てるのに、あんまり印象に残っていないってのが弱いです。
「七人みさき」も「隠神だぬき」も、ワルのイメージかなり似ているのにそれぞれに印象に残ってるんですよね。
なんでこれだけこんなに印象が薄いのかちょっと不思議。
短期間に集中してみたせいかなあ。

# テキサス

１９６６年アメリカ映画
監督　マイケル・ゴードン
主演　ディーン・マーティン、アラン・ドロン、ローズマリー・フォーサイス

えっと、最近の若い映画ファンの皆様ってあまりご存知ないかもしれませんが、アラン・ドロンさまって、一時はもう、絶大なる人気を誇っていたわけですね。
今では考えられないかもしれませんが。
この人、フランスの役者さんです。
んだもんで、そのころはめっちゃ普通にフランス映画がロードショーされておりました。
っていっても、アラン・ドロンさまやジャン・ポール・ベルモンドさまの主演作品か、ゴダール監督やクレマン監督の作品くらいしかロードショーされてなかったですが。
私が小学校高学年当時の「ロードショー」「スクリーン」誌のスター人気投票は、一位ブルース・リーさま、二位アラン・ドロンさま、三位ジェームス・ディーンさまってのが決まりの結果でした。
この「テキサス」は、そんなドロンさまがアメリカに進出して撮った作品。
当時は「アラン・ドロンさまのコメディ作品は当たらない」とか、「アラン・ドロンさまはアメリカ映画に出るとイマイチ」って評価だったんですが…
どない思われます？
舞台は開拓時代の西部でございます。
なんせテキサスでございますし。
めっちゃ運のない貴族がドロンさま。
無実の罪で追われる身でございます。流浪の身の彼に目をつけたのがマーティンさま。
彼は西部開拓村の、いつかは一旗あげようと夢見る労働者。
マーティンさまはドロンさまの射撃の腕に目をつけて雇います。
しかしドロンさま、よくないことを呼び込む達人だったわけでございますなあ。
あれよあれよといううちに、インディアンの襲撃をうけることになります。
どないなんねんってハラハラしながら見ていたら、そこはやっぱりアメリカンコメディでございます。
けっこう巧くおとしてくれておりますです。
パパの採点。１００点満点中７０点。
まあ、言うほど面白くないわけではないんですが、かといって抱腹絶倒ってところまでもいきません。
「うんうん、面白かったねえ」って感じでしょうか。
アラン・ドロンさまって雰囲気はいいんだけど、向き不向きで考えると、キャラ的には明らかにコメディには向いてないんじゃないかと思います。

不幸顔してますしね。

# 京極夏彦・怪／福神ながし

２０００年ＢＳＷＯＷＷＯＷ作品
監督　酒井信行
主演　田辺誠一、遠山景織子、佐野史郎、近藤正臣、火野正平、谷　啓、京極夏彦、荒俣　宏

ＢＳＷＯＷＷＯＷ製作による、田辺誠一さま版「怪」の最終作品でございます。
これとは別に、同じ「巷説百物語」を原作とした作品として、アニメのものと、渡部篤郎さまが「御行の又市」を演じておられるシリーズもあります。
シリーズ最終作品にふさわしく、けっこう豪勢な作品として仕上がっております。
仕事人グループのほうではレギュラーの田辺さま・遠山さま・佐野さまに加え、第一話の小木茂光さま、第二話の谷　啓さま、第三話の火野正平さまが登場。
それだけではなく、京極作品究極のキャラ、「黒衣の男」が登場でございます。
本作映像化の時点では、「黒衣の男」が大活躍する映画「姑獲鳥の夏」はまだ映像化されておりませんでしたので、「黒衣の男」初映像化って感じでけっこう話題になったりしました。
今回の仕掛けの標的になるのは、悪徳商人でございます。
「福の神」が入っているといわれる小箱をめぐっての商人同士の争いの悪行が、又市一派の活躍によって裁かれます。
途中、妖怪のクリーチャーが登場いたしますが、この妖怪たちは、同時期に映像化された「さくや妖怪伝」に登場したクリーチャーの使いまわしだそうです。
パパの採点。１００点満点中８５点。
この作品を見た時期って、京極さんの「塗仏の宴」を読んでいた時期だったと記憶しております。
なんかクライマックスの盛り上がりかたって、すごく共通しているような印象があるんですが。
作品エンディングで、「福神の箱」の正体が明かされます。
これを書いちゃあいけないだろうと思いますので、あえて書きませんが、けっこうびっくりしてしまいました。
なんじゃこりゃって思いました。
京極さんファン的にはヒネリが効いた面白い設定でしたが。まあこのエンディングに関してはＤＶＤなどをご確認くださいませ。

# 死刑台のエレベーター

１９５７年フランス映画
監督　ルイ・マル
主演　モーリス・ロネ、ジャンヌ・モロー、リノ・バンチュラ

フランスのヌーヴェル・ヴァーグのごく初期の作品。
っていいながらヌーヴェル・ヴァーグってなんやねん、みたいな勉強不足の映画ファンですが。
とりあえずフランス映画の新しい流れって理解していましたが、間違ってないでしょうか。
でも私って世代的に、知っているフランス映画ってほとんどヌーヴェル・ヴァーグ以降なんで、どこがどう「ヌーヴェル」（ちなみにヌーヴェルって「新しい」って意味でござんす）なのかよくわかっておりません。
ルイ・マル監督の衝撃のデビュー作。
ただ、私がこの作品を見た時点では、この作品は「映画史に残る傑作」としての不動の評価を勝ち得ておりましたので、「この作品は名作なんだ」って言われて見た系統の作品。
ってことは「名作なんだ」って確定した評価を刷り込まれてから見たってわけで。
こういう映画の見かたってあんまりよくないでしょうけど。
本当は、スニークプレビューみたいな、その作品に関する一切の情報がない状況で見るってのが一番いい映画の楽しみかたなんだろうと思いますけど、なかなかそういう見かたできませんもんね。
ロネさまは会社に雇われている医師。
モローさまはその会社の社長夫人でございます。
二人は完全にデキておりまして、二人の愛を邪魔する社長を殺してしまおうと殺人計画を練るわけですね。
もう、アリバイなんか完璧な殺人計画でございます。
で、その計画を実行しまして、社長を殺したその日、犯行直後にロネさまが乗ったエレベーターが電源を切られてしまったせいで停止してしまいます。
そんなことを知らないモローさまは、ロネさまのアリバイを作るわけですね。
で、犯行が行われてかなり時間がたつのにランデブー場所にロネさまが現れない。
一方、エレベーターから脱出しようと必死のロネさま。
不安でたまらないモローさま。
彼らの完全犯罪は、彼らが予想もしなかったことから崩れていくわけでございます。
モノクロの画像がとっても緊迫した感じでめっちゃええ感じです。
ラストは「さすが名作」ってうならせてくれるような、映画史に残る名ラスト。
けっこう大好きな終わり方でございますです。
パパの採点。１００点満点中８８点。
この映画の音楽を担当したのが、ジャズ界の巨匠「マイルス・デイヴィスさま」。

彼は楽譜とか全くなしに、映画を見ながらトランペットを即興で吹いたとか。
んでこのクオリティ。やっぱりマイルスさまって天才だったんですなあ。

# ドーン・オブ・ザ・デッド

２００４年アメリカ映画
監督　ザック・スナイダー
主演　サラ・ポーリー、ヴィング・レイムズ、ジェイク・ウェバー、トム・サヴィーニ、スコット・ラインガー、ケン・フォーレ

やっぱりホラー好きです。
何年か前やけど、ＤＶＤドライブつきのパソコン買って、好きなＤＶＤ見れる環境になって最初に見た映画って、それまで見逃していたこの作品でした。
ジョージ・Ａ・ロメロ監督の伝説の傑作ホラー、「ゾンビ」のリメイク作品でございます。
リメイクっていうか、「猿の惑星」じゃないけど、リ・イマジネーションって感じ。
リメイクっていうと、やっぱり「サイコ」とか｢シャル・ウイ・ダンス｣みたいに、前作を細部まで踏襲したみたいな感じで作られた作品をリメイクと呼びたいような。
あらすじも、旧作のあらすじそのまんまコピーして貼り付けしたくなるようなのが「リメイク」ってイメージでございます。
ところがこの作品、設定だけが同じで物語の展開とか全然違ったりします。
かなりの部分で別ものって考えたほうがよさそうです。
前作では「宇宙から地球に降り注いだ謎の宇宙線」って設定が死者復活の秘密だったんですが、本作では「ウイルス感染」によって死者が歩き出すって設定です。
とにかく、今回のゾンビは走ります。
しかもダッシュとかするし。真剣に走りながら車を追いかけたりします。
ゾンビっていうと、「むぉぉぉぉ～」って感じでうにょおおおっと歩きながら追いかけてくるイメージだったんですが、今回は走ってきますので、緊迫感はかなりアップしています。
で、動きが動物みたいに速い。反則です。
病院で看護師をしているポーリーさま。
ある日彼女と夫のベッドルームに現れたのは隣に住む少女。
少女、いきなり血まみれ。
しかも口のところとか裂けてたりして。
驚く夫は少女に首筋をかみつかれて絶命。
かと思うと、すぐに立ち上がって妻に襲いかかります。
どういうこっちゃねん。
車で逃げるポーリーさまですが、ゾンビが増殖しつつある町から脱出しようとする者に車を襲われ、車は使い物にならなくなってしまいます。
そこで出会ったのが警官と若い夫婦とサラリーマン風の男。
看護師を加えた五人は、町のショッピングセンターに忍び込み、そこに立てこもろうとします。
そこでセンターを根城にしていた警備員グループとすったもんだの末に合流し、共同生活を始め

ますが…
パパの採点。１００点満点中８５点。
作品中に、「ゾンビ」主演のスコット・ラインガーさま、ケン・フォーレさま、あと悪役を演じていたトム・サヴィーニさまが特別出演。
どこで出ているかチェックしてみてくださいませ。
三人ともけっこうわかりやすい登場のしかたをしております。

# キューブ

１９９７年カナダ映画
監督　ヴィンチェンゾ・ナタリ
主演　モーリス・ディーン・ウィント、ニコール・デボアー

カナダの新星、ヴィンチェンゾ・ナタリ監督が紡ぎだした、全く新しい形のホラーサスペンス。
なんか「世にも奇妙な物語」の不条理系エピソードにこんなのあったと思いますが。
しかし普通なら短編で終わってしまいそうな設定を力技で長編映画にしてしまったかのような、ナタリ監督のパワーには脱帽してしまいます。
数人の男女が四角い部屋の中で目を覚まします。
数人って書きましたが、実際にこの空間に閉じ込められたのが何人かちょっとわからない描きかたしております。
最初の男は作品冒頭、目覚めた部屋の隣の、これまた「四角い部屋」に入ったところを「隣の部屋の仕掛け」にはまって殺されてしまいます。
このシーン、いきなりけっこうえげつないです。
で、そのあとさっきの「数人の男女」が順次目を覚ましていくわけですな。
この男女は「最初の男」が殺されてしまった様子を見ていたようです。
その「四角い部屋」には天地前後左右に、それぞれつながった６つの部屋があって、その部屋のうちのいくつかに罠が仕掛けてあるって構造になっているらしい。
仕掛けを見抜く鍵は、部屋と部屋の抜け穴に書かれた数字の羅列のみ。
で、登場人物たちはそれぞれに力をあわせて罠を見破り、「外」に出る方法を模索するのですが…
まったくわけがわからない話でございまして、この「なぜ彼らはこの部屋に運ばれなければならなかったのか」のについての説明部分がほとんど描かれません。
ってことは登場人物にとってもその部分は謎のままでございまして、それがためにそれぞれに疑心暗鬼になり、登場人物同士がお互いを牽制しあう、って描写もありまして。
なんかとってもややこしくて不思議な世界でございました。
パパの採点。１００点満点中７５点。
アイデアの勝利ですね。
登場人物たちにとっての「なぜ」の部分を説明することを放棄したゆえの不思議なイガイガ感。
「こうなってもたもんはしかたない。で、おまえらどないすんねん」みたいな放り出され感覚が微妙に面白かったです。

# スクリーム３

２０００年アメリカ映画
監督　ウエス・クレイブン
主演　ネーブ・キャンベル、デヴィッド・アークエット、コートニー・コックス

さすがの面白さの、ウエス・クレイブン監督によるシリーズ第三作。
「スクリーム」シリーズってねえ、映画への愛情にあふれているから本当に大好き。
本作ではランス・ヘンリクセンさまなんかの大物が登場しておりますし、そればかりかあっと驚くキャリー・フィッシャーさまなんかも「女優キャリー・フィッシャーさまとスター・ウォーズの役を争った、元女優のメイクさん」なんて複雑な役を演じておられます。
現実に起こった二度にわたる「ウッズボロー事件」を描いた映画の「スタブ」。
作品は大ヒットを重ね、今では第三作が製作されております。
しかし、その撮影現場でまたまた連続殺人事件が発生。
実際の事件の当事者で、映画のアドバイザーとして撮影現場にいた元保安官の青年＝アークエットさまと、事件の取材手記で一躍有名キャスターになった保安官の元カノは、事件解決のために山奥で電話カウンセラーとして暮らしていたシドニー＝キャンベルさまに協力を要請します。
実はシドニーは彼らからの連絡の直前に「犯人」からの電話を受けておりまして、「どこにいても犯人からは逃げることなんかできない」ってんで、犯人と対峙する決意で山から降りてくるわけです。
そんな彼らに提示されるのは、第二作で殺されちゃった恐怖映画評論家みたいな友人からのビデオレター。
彼は自分が殺されてしまうって可能性を予見しておりまして、生前にビデオを残していたわけで。
「君たちがこのビデオを見ているってことは僕は死んでいるわけだ。そして僕が死んだあとに事件が起こったいるということは、事件を物語に例えるとパート３なんだ。第三作は三部作の完結編。第三作ではこれまでの全ての前提が崩れ、同時に主人公の出生の秘密が明らかになる…」
なんてふざけたことを言いますが…
本当にその通りに事件が進行していくあたりがこのシリーズの面白いところでございます。
パパの採点。１００点満点中８０点。
すごくよくできたシリーズです。
けっこう大好き。満喫してしまいました。

# キルビル

２００３年アメリカ映画
監督　クエンティン・タランティーノ
主演　ユマ・サーマン、デヴィッド・キャラダイン、ルーシー・リュー、ダリル・ハンナ、千葉真一、栗山千明

クエンティン・タランティーノ監督が、自らの趣味っていうか、とにかくご自身の大好きな世界を大好きな手法で描いた作品。
って感じで作られたっぽい作品。
ええ感じで時代劇とかマカロニウエスタン（ウエスタンではないですよ。誰が何と言ってもマカロニウエスタンです）の伝統的手法を駆使した、エンターテイメント作品に仕上がっております。
ただ、そこはやはりタランティーノさま。
流れる血の量は半端ではありません。
でもねえ、かの名監督、サム・ペキンパーの映画にしてみたところで、流れる血の量は半端ではなかったですしね。
挙式中にかつての仲間に襲われて瀕死の重傷を負った「組織」の殺し屋サーマンさま。
彼女は長い昏睡状態から目覚め、かつての自分のボス・「ビル」と、自分を襲った四人の殺し屋たちに復讐しようとするわけですな。
最初の殺し屋を大格闘の末に始末したサーマンさま。
そこから「目覚めた」ときの回想シーンになって、日本人の謎の「寿司屋にして刀鍛冶」（なんとここで登場するのはサニ千葉さまでございます）に刀をつくってもらって、スゴ腕のボディガード(美形なんだけど残酷系の役ばっかりまわってくる現代の不遇美人女優、栗山千明さまです）を従えた「元殺し屋で今はヤクザの姐さん」、ルーシー・リューさまと対決することになります。
リューさまに殺される他の組の組長さんが國村隼さま。
リューのボディガードに北村一輝さんとか田中要次さまがおられたような気がするんですが。
クレジットとか確認したわけじゃありませんので、違ってたらごめんなさい。
パパの採点。１００点満点中７０点。
面白かったんだけど。
この作品とは別に、「キルビル２」ってあるでしょ。
この作品、「キルビル」で完結した物語の続編だとばかり思っておりました。
ちゃうんですね。そもそも主人公のサーマンさまが復讐すべき四人の殺し屋のうち、二人までをやっつけるのがこの「キルビル」みたいで。
なぁんやって思ってしまいました。
そこらへんが減点ポイントですね。嫌いじゃない世界なんだけど。

DVDになってやっと「キルビル ボリューム1」とかになったけど、DVDも最初のうちは「キルビル」だったしね。
最初から「キルビルエピソード１」みたいなタイトルにしてほしかったかな。
映画見終わって完結しなかったって、ちょっと裏切られたみたいな気がしました。

# バイオハザード２・アポカリプス

２００４年アメリカ・カナダ・イギリス合作
監督　アレクサンダー・ウィット
主演　ミラ・ジョヴォヴィッチ、シエンナ・ギロリー、オデッド・フェール

ミラ・ジョヴォヴィッチさまが主演する、人気コンピューターゲームの映画化作品の第二弾。
前作ではホットパンツで暴れまわってくれたジョヴォヴィッチさまですが、今回は片方だけミニのホットパンツでした。
前作ではねえ、ゾンビくんみたいにジョヴォヴィッチさまのふとももで首の骨折られて絶命したいいいいって思いましたが、今回はそんなふうには思わなかったです。
どういうことなんやろ。
物語は前作の終了直前からはじまります。
前作のラストでは、街がゾンビくんに占領されちゃったっぽい終わり方しましたが、実は必ずしもそうではなくて、やられた人もいるんだけど、生き残っている人もそれなりにいたわけですな。
ゾンビウィルスを製造していた大企業「アンブレラ」社は、そのスキャンダルを地域ごと葬ろうとしております。
で、街を封鎖してそこに核爆弾を投下し、それを近くの原発の事故だってことにしてしまおうとしております。
このウィルスってのは、そもそも生体の死んでしまった細胞に作用しまして、その細胞を生き返らせるってものだったわけですな。
つまり、不随になった身体を生き返らせるみたいな、そういうウィルスだったわけでございまして。
そいつがなんと死体に作用してしまったってのが今回の事件だったわけでございます。
さて。物語の展開。
ウィルスを開発した科学者の娘がゾンビ地域に閉じ込められてしまいまして、で、科学者、なりふりかまわずそこに取り残されたジョヴィヴィッチさまに協力を要請するわけです。
ゾンビ地域に取り残されたジョヴォヴィッチさま。
同じように出口を封鎖されてしまって閉じ込められた女性警官ギロリーさまと力をあわせて科学者の娘を救出した上での脱出をはかります。
どうやらジョヴォヴィッチさまは前作ラストで捕らえられた「アンブレラ」社に細胞活性化ウィルスを投与されてしまっていたようで、なんかとんでもないスーパーパワーをもった女戦士になっちゃって。
で、彼女と同じようにウィルスを投与されて殺人サイボーグとなったかつての恋人と戦うことになってしまうわけでございます。
パパの採点。１００点満点中８０点。

よく知らなかったんですが、「ジョヴォヴィッチ」って名前、やっぱりロシアの人やろなあって思って調べてみたら、やっぱりこの人、ウクライナのキエフ出身の女優さんでした。
ちなみに、ロシアの人って父姓ってのがありまして、ヴィッチってのは「〇〇さんの娘」、スキーってのは「〇〇さんの息子」って意味があるそうです。
だからジョヴォヴィッチさんは、ジョヴォさんの娘ってことになるわけで。
ストラヴィンスキーさんはストラヴィンさんの息子って意味らしいです。
なんと勉強になるコラムでしょうか。
ロシア演劇理論やっててよかった。
ちなみにちなみに、ロシアの現代演劇の始祖はスタニスラフスキー。
スタニスラフさんの息子さんだったんでしょうな。この人。

# オーシャンズ１２

２００４年アメリカ映画
監督　スティーブン・ソダーバーグ
主演　ジョージ・クルーニー、ブラッド・ピット、マット・デイモン、キャサリン・ゼタ・ジョーンズ、アンディ・ガルシア、ジュリア・ロバーツ

超豪華キャストで描く痛快サスペンスでございます。
このシリーズを見るといつも思うんですが、とにかくとんでもない豪華キャストですね。
上に書いたキャストの面々、全員主役級です。
この映画に出演したスターさんって、ほとんど「クルーニーの友達」だからってノリで集まったようです。
それだけに出演者の皆さん、映画づくりをすごく楽しんでおられるようで。
そんな空気が伝わってくる作品です。
前作でカジノの大ボス・ガルシアさまから大金をせしめたオーシャン＝クルーニーさま一味。
世界各国にちらばった彼らのもとに、ガルシアさまの手の者の魔手がせまります。
ガルシアさま、クルーニーさま一味のことをかなり詳細に調べ上げたようで。
命を助けるかわりに、盗んだ金に利子をつけて返せと迫ります。
追い込まれたオーシャン一味、今度はヨーロッパで盗みを働くことになります。
ヨーロッパの盗みの元締めに紹介された仕事を実行しようとした一味ですが、お宝は盗まれたあと。
ヨーロッパの伝説の怪盗からの挑戦状のおまけつきでございます。
さてさて、オーシャン一派は伝説の怪盗を出し抜くことができるのでしょうか。
そしてカジノのボス、ガルシアさまの魔手から逃れることができるのしょうか。
前作と比べますと、マット・デイモンさまの俳優的ランクが格段にあがってきておりまして、彼の扱いがすんげえよくなっているような気がします。
パパの採点。１００点満点中９０点。
本作で、ジュリア・ロバーツさまが正式に犯罪チーム入りでございます。
彼女はクルーニーさまの奥さん役なわけですが、物語途中でやむを得ない事情が発生しまして、けっこう「とんでもない」役柄を演じるはめになります。
そこらあたりの場面で、ノンクレジットでこれまた「とんでもない」大物俳優が登場。
めちゃくちゃびっくりしました。
誰の友達関係で出演したんでしょう。
やっぱりメインキャストの面々がすごく楽しそうだったから出演したくなったのでしょうか。
私の記憶によると、クルーニーさまやデイモンさまとこの大スターっておそらく出演映画での接点はなさそうなんで、ジュリア・ロバーツさまとかブラッド・ピットさまあたりの線からつながったのかな。

あ、それと、この作品に続く第三作ではアル・パチーノさまが大ワルとして登場でございます。

# 花田少年史・幽霊と秘密のトンネル

２００６年「花田少年史」製作委員会作品
監督　水田伸生
主演　須賀健太、篠原涼子、安藤　希、西村雅彦、杉本哲太、北村一輝

一色まこと様の人気コミックの実写映画化。
名子役・須賀健太さま主演の冒険ファンタジーコメディ（になるのかなあ）。
っていうか、この作品に関してはジャンルとか判断つきませんです。
交通事故にあって、なんと「霊」が見えるようになってしまったごんたくれ少年の須賀クン。
近所に住むばあちゃん（もたいまさこさま）に、死んだあとの犬の世話を頼まれたりするわけですな。
そんな彼の目の前に頻繁に現れるようになったのは、謎の「ねえちゃん」（安藤さま）と、自ら自分の本当の父だと名乗る男（北村さま）。
どうやら北村さまは、若いころ母篠原さまとなんかあった様子。
それだけではなく、安藤さまと北村さまはなにやら深い因縁がありそうで。
須賀さまの父は元漁師のタクシードライバー。
漁師時代に、事故で親友杉本さまを死なせてしまったことが心の傷となって海を捨てた男でございます。
西村さまは残された杉本さまの妻や息子に、細々としたフォローを行い続けていたという男です。
やがて須賀さまは「ねーちゃん」の霊、安藤さまに連れられて父と母の過去を覗く旅に出かけます。
少年がそこで知った真実とは…
安藤　希ちゃん、あいかわらずきれい。
本当、顔が整いすぎていて逆に普通の役がまわってこないという実にかわいそうな若手女優さんです。
「顔」とか「さくや妖怪伝」とか、なんかそんな系統のホラーっぽい作品でしかお目にかかれないのが残念です。
パパの採点。１００点満点中９５点。
作品の途中の運動会の場面。
号泣しちゃいました。
最近ねえ、涙腺が弱くなってきたみたいで。あきまへん。
「ＮＡＮＡ」とか「花田少年史」とかで号泣ですからね。
どういうことやろ。これで「十万人が涙したラブストーリー」とか見たらどうなるんでしょう。
近いうちに「四日間の奇跡」とか「ジョゼ虎」とかで試してみようかなあ。
「冬ソナ」なんかみたらどうなるんでしょうか。ちょっと興味あったりするけど。

# 宇宙戦争

２００５年アメリカ映画
監督　スティーブン・スピルバーグ
主演　トム・クルーズ、ダコタ・ファミング、ティム・ロビンス

スティーブン・スピルバーグ監督、トム・クルーズさま主演で映画化されたＳＦ大作。
空前のスケールとＳＦＸ。
けっこうお腹いっぱいになった系の作品でございました。
何かの本で読みましたが、スピルバーグさまはこの作品ではじめて宇宙人を敵として描いたそうです。
そうなんや。知らんかった。
主人公のクルーズさま。妻と離婚しまして、一人で暮らしています。
妻との間には小学生くらいの娘と、高校生くらいの息子がそれぞれ一人。
子供との面談日に突然の大事件が起きるわけです。
それが宇宙人の襲来なわけですね。
舗装された道路がいきなり割れて、地中からとんでもなくでかい大型のクモみたいなロボットが次々と現れます。
これらロボットは太古から地中に埋められており、エイリアンたちは雷とともに地上に降り、そのロボットに乗り込んで暴れだすわけですね。
ロボットには人間を一瞬にして灰にしてしまう強力な火気が搭載されておりまして、街はまたたく間に壊滅状態となります。
エイリアンたちがやってきた落雷のせいで、自動車や電気製品はすべてショートして使いものにならなくなっております。
クルーズさまは娘と息子を、ボストンに住む妻のもとに送り届けようとするわけですな。
果たして彼らの運命やいかに。
宇宙人の造形もロボットもデザインも、ちょっと大時代的。
もうちょっとあっと驚くデザインで決めてほしかったのになあって思います。
トム・クルーズさまが演じていたのが「町ではたらく兄ちゃん」なだけに、エイリアンに関する情報とかがとにかく断片的で、ちょっとイライラしましたし、クライマックスもちょっと説明がとってつけたような感があって興ざめでございました。
パパの採点。１００点満点中７０点。
こういう、いかにもいかにもなハリウッド大作なんですが、投じた費用にみあうだけの感動が得られるかというと必ずしもそうではないってのがちょっと難しいところですよね。
もう少し面白いのかなって思っておりましたが、後半がイマイチ盛り上がらなかったです。
前半頑張っていたわりに、後半がなんだかストンって終わった印象が残りました。
ちょっと構成的にもりあがりにくい原作だったのでしょうか。

# サウンド・オブ・サイレンス

２００１年アメリカ映画
監督　ゲイリー・フレダー
主演　マイケル・ダグラス、ショーン・ビーン、ブリタニー・マーフィ

原作はアンドリュー・クラヴァンさまの「秘密の友人」。
映画の原題は「Ｄｏｎ‘ｔ　ｓａｙ　ａ　ｗｏｒｄ」。
それでなんで「サウンド・オブ・サイレンス」なのかがちょっとわかりませんですが。
この作品、何かの事情で地上波テレビオンエアが一回流れまして、それを妙に覚えております。
マイケル・ダグラスさま主演のサスペンス作品。
作品冒頭。ビーンさまらグループが銀行強盗を働きます。
銀行の金はすでに本部に送金されたあと。
しかし一味の狙いは別のものだったわけですね。
彼らは貸金庫を襲い、宝石を奪って逃走。
しかしそこで仲間割れ。
これが物語全体の伏線となる事件。
数年後。
ダグラスさまは精神外科医でございます。
妻と子供がおります。
妻はスキーか何かで骨折しておりまして、動くに動けない状況。
そんな中で娘が何者かに誘拐されてしまいます。犯人グループの狙いは身代金などではなく、ダグラスさまを狙い通りに動かすことでございます。
実はダグラスさま、事件直前に病院で新しい担当患者を任されておりまして、この担当少女患者が何か重要な秘密を知っているらしい。
ダグラスさまは彼女の心の闇を解きほどき、犯人グループが欲しい情報を手に入れなければ娘が殺されてしまうという状況に追い込まれてしまったわけです。
しかしダグラスさま、そこは頭がキレる精神外科医ですなあ。
病院に仕掛けられている盗聴器の存在を疑い、必要な情報が娘を取り返すより先に知られるのを恐れて彼女を病院の外に連れ出します。
少女の様子から、情報を手に入れる自信をもったダグラスさま、犯人グループに対して新しいルールでの取引を申し出ますが…
マイケル・ダグラスさま相変わらず巧いですよね。
ぐいぐい引き込まれてしまいました。
しかしこの人、ワル顔と善人顔の境界みたいな顔しておりますので、途中でいきなり悪人になるんじゃないかと思ってちょっと心配してしまいました。
パパの採点。１００点満点中８５点。

予想していた以上に面白い作品だったんでびっくりでございます。
脚本とかもかなりしっかり書かれておりまして、すごく楽しめました。

# ハイド・アンド・シーク　暗闇のかくれんぼ

２００５年アメリカ映画
監督　ジョン・ポルソン
主演　ロバート・デ・ニーロ、ダコタ・ファニング、ファムケ・ヤンセン

ロバート・デ・ニーロさまとダコタ・ファニングさま主演によるサスペンス。
めっちゃくちゃ期待して見た映画ですが。
「ですが」って書くところがこの作品の全てでございます。
申しわけありませんが。「ですが」の理由はあとで書きますです。
デ・ニーロさまは心理学者でございます。
彼の妻が突然謎の自殺。
彼は幼い娘を連れ、田舎暮らしをはじめることになります。
実は娘は母親を亡くしたショックで、かなり不安定になっておりまして、デ・ニーロさまが「心理学者的」判断から引越しを決めたわけで。
引っ越してまもなく、娘に「チャーリー」って友人ができます。
しかしその友人はなんだかいわくありげでございます。
次第に奇妙な行動をとりはじめる娘。
最初、デ・ニーロさまは「チャーリー」は娘が妄想の中でつくりあげた人格だと思っていたわけですが、どうやらそうではないらしい。
というのも、デ・ニーロさまの周囲には、娘をなくしたというあからさまに怪しい夫婦とか、どこか行動がおかしい保安官だとかがおりまして。
次第にデ・ニーロさまは「そんな怪しい隣人の誰かがチャーリーなのではないか」と思いはじめるわけでございます。
やがてチャーリーはとんでもない凶行をおかします。
そして娘の身にとんでもない危険がふりかかることになってしまいます…
物語中盤まではかなりええ感じで進んでいきました。
ＤＶＤのコピーに「ラスト１５分の衝撃的展開」なんて書いておりましたが…
「書いておりましたが」って書くってことは、「書いておりましたが」って書かれるような展開だったってことで。
これくらいでいいでしょうかね。さらに詳しくは後述。
パパの採点。１００点満点中６５点。
昔話ですが。私が生まれて初めて書いた小説、ホラーだったんです。
で、ある文学賞に応募しましたが、その小説、見事に落選しましてなあ。
そのときのその賞の選考委員のＫ山Ｔ夫先生の総評、今でもはっきり覚えております。
私が書いた作品と同じオチの作品、最終選考に残った作品の中にも、複数あったようです。
「今後、この手は『禁じ手』としていただきたいです」

私、それ以降はそのタイプのオチの作品、書いておりません。
でね、この作品のオチ…
景Ｙ民Ｏ先生が言われた、『禁じ手』のオチなんですね。
やっぱねえ。この手は使ってはいけないと思います。
確かに意外で驚愕のオチではあるんですが、それだけにこのオチはすでに「陳腐なオチ」になってしまっていると思います。

# サイレン

２００６年「サイレン」製作委員会作品
監督　堤　真一
主演　市川由衣、阿部　寛、森本レオ、嶋田久作、田中直樹

ドラマ界屈指の名ディレクター、堤　真一様が仕掛ける戦慄のホラー作品。
ってことなんですが。
でたっ。「なんですが」でございます。
あきませんわ。「意外な犯人」の構造、前回の「ハイド・アンド・シーク」と全くいっしょじゃないですか。
「だめだこりゃ」でございます。
市川さま、病気がちな弟のために、父・森本さまといっしょに離島に引っ越してくるわけですね。
でもこの島の住人、明らかに「変」。
親子を見る視線がおかしいわけですわ。
なんか気持ちわるいなあって思う市川さま。
島の青年医師が田中さま。
市川さまの弟の様子を常に気にかけている様子。
看病でお疲れの市川のことも心配してくれております。
父・森本さまは、子供の病気の治療が半分、自分の仕事っていうか、執筆系の仕事のための調査が半分、って感じでこの島にやってきたみたいな感じ。
この島には陰惨な過去がありまして。
十数年前、この島で島民のほとんどが行方不明になるって事件があったわけです。
みんな、ついさっきまで普通に生活していたみたいな痕跡を残して、みんな消えてしまったわけですね。
そのときの生き残りが、島に訪れていたフリーライターの阿部さまでございます。
彼は「サイレンが鳴ったら家から出てはいけない」って言い続けていたようで。
で、市川さまはそんな阿部さまのメモを偶然見つけてしまうわけですね。
そんな事情で、市川さま、この島の「サイレン」の伝説を知ってしまいます。
そして夜。唐突に、島にサイレンが鳴り響くぅ、みたいなあ。
やっぱり堤監督って巧いですね。途中まで物語がトントンと進んで、まったく退屈しなかったです。
「あのオチ」のところまでは。
パパの採点。１００点満点中６０点。
たまたまなんですが、映画を見た順番が悪かったです。この映画ね、前回ご紹介した「ハイド・アンド・シーク」を見た翌日に見ました。

オチを見て「またかいな」って思ってしまいました。
もうええやろって感じです。
昨日ご説明した通り、この作品も「禁断のオチ」を使っております。
ほんま、もうええって、って感じです。
そこまでのプロセスというか、描き方、怖がらせかた、作品的な積み重ね、どれだけ素晴らしいものであってもね、オチがこれだったら全部ブチ壊し。
ってくらいこのオチ使ったらあかんと思います。
ホラーでこのオチはねえ…　推理小説で、探偵自身が犯人だったとか、犯人は超能力者だったとか、画期的な新発明の武器を使って犯罪が行われたとか、それくらい使ってはいけないオチですね。
このオチ。今だからわかるけど。

# 名探偵登場

１９７６年アメリカ映画
監督　ロバート・ムーア
主演　アイリーン・ブレナン、トールマン・カポティ、ジェームズ・ココ、ピーター・フォーク、アレック・ギネス、デビッド・ニーブン、ピーター・セラーズ

オールスターキャストで描く、探偵映画のパロディ作品。
探偵映画っていいますと、なんかめっちゃオールスターになってしまいます。
こういう風潮さえもパロディにしちゃったって感じの作品でございます。
探偵役はほとんどポアロのジェームズ・ココさま、チャーリー・チャンのピーター・セラーズさま、チャールズ夫妻のデビッド・ニーブンさまとマギー・スミスさま、サム・スペードのピーター・フォークさま、ミス・マープルのエルザ・ランチェスターさま。
彼らが一同に集められ、「これから起こるであろう殺人事件の犯人を推理せよ」ってなるわけです。
話の展開なんか「そして誰もいなくなった」やし。
これだけの探偵が揃っていながら、やっぱり殺人事件は起こってしまいますし。
で、名探偵たちが推理合戦を繰り広げることになるわけですが…
えっとねえ、強烈なキャラを集めすぎちゃいましたね。
推理合戦ってからには、誰かの推理がまずあって、その推理は間違ってるんだって別の人が指摘して…って展開にならざるを得ないわけで。
一人の推理が正しくて、「おお、その通り」って全員が言っても面白くもなんともないでしょ。
となると、見ている人は、誰の推理が正しくて誰の推理が正しくないのかってことを考えないとあかんわけで。
ってなりますと、すっごく考えながら映画を見ないといけなくなるわけで。
で、こういう作品ともなりますと、「探偵の推理って、ひょっとしてみんな外れてるんじゃないやろか」って選択肢もありですので、すごくややこしくなったりして。
けっこう悩みながら見てしまいました。
パパの採点。１００点満点中６５点。
あまりにもわかりにくい結末で１０点減点。
っていうか、この作品の結末って、いまだにわかっておりません。
ちょっと難しく作りすぎたんじゃないかなって思います。やっぱり普通の推理もののほうが楽しめるかなあ。

# 名探偵再登場

１９７８年アメリカ映画
監督　ロバート・ムーア
主演　ピーター・フォーク、アン・マーグレット、アイリーン・ブレナン

「名探偵登場」のスタッフが再度集結。
今回はピーター・フォークさまを主演に据えて、ハードボイルド私立探偵の世界を描きます。
ですから、前作のように名探偵がたくさんでてきて推理合戦を繰り広げるとかの内容ではおまへん。
悪しからず。
ってわざわざ書くのには理由がありまして。
実は私、前作みたいにようさんの名探偵がまた登場するもんだって思ってめっちゃ楽しみにしていた作品でございまして。
そのころはまだ第一作の「名探偵登場」は見れておりませんでした。
このころってビデオなかったですからね。
第一作をまだ見てないけど、テレビのオンエアがあったからってんで、第二弾から先に見るなんて普通でしたし。
内容を見て、なんで?って思った記憶があります。
主人公は私立探偵のフォークさま。
儲かってはいないけど、ややこしい事件に振り回される探偵でございます。
そこに大事件が起こるわけですな。
フォークさまの相棒が殺されてしまいまして、その相棒の奥方の証言で、フォークさまが犯人にされてしまうわけでございます。
で、当然彼は真犯人探しに乗り出すわけですが、どうやらこの一件には「マルタの鷹」みたいにすんげえ高額の骨董品がからんでいるようでありまして。
で、手がかりのカフェに行きましたら、かつての恋人が現れて、その恋人の夫の国外逃亡に力を貸して欲しいと頼まれたりして。
いやいや、これって「カサブランカ」やし。
「カサブランカ」ってボガードやけど推理小説ちゃうし。
探偵ちゃうし。
ま、ええか。そんなこんなで、例によって物語がしっちゃかめっちゃになって、でも事件はなんとなく解決されて大団円。
これまた「面白いのか面白くないのかよくわからない」謎の作品となってしまったわけでございます。
パパの採点。１００点満点中７０点。
一番笑えたのは「カサブランカ」ネタでした。

「カサブランカ」のリックは探偵とちゃうけど。
っていうか、この作品は「カサブランカ」を見たあと、「マルタの鷹」を見る前に見ましたからねえ。
ちなみにボガードの「三つ数えろ」はまだ見ておりません。
そんなんですからねえ。サム・スペードネタはわかりません。
ここらへんの映画を見てからこの作品を見たら大笑いできたんだろうけど。ちょっと残念です。

# 青の炎

２００２年「青の炎」製作委員会作品
監督　蜷川幸雄
主演　二宮和也、松浦亜矢、秋吉久美子、山本寛斎、中村梅雀

原作は「黒い家」「ＩＳＯＲＡ」で注目を集めました貴志祐介さまでございます。
この先生、他にも「天使の囀り」だとか「クリムゾンの迷宮」だとか、傑作が多数。
記憶によりますと、貴志さんがホラー作家から「推理小説も書けるホラー作家」に転進したのがこの作品くらいだったと思います。
っていうか、ある程度以上のレベルのホラー作家って、間違いなく推理小説も書けると思うんですね。
自分が書くからわかるんですが、使う発想のカテゴリーって、推理ものとホラーってけっこう似てるっていうか。
私などが言うとおこがましいですが。
えっとね、説得力のあるホラーを書こうと思うと、それなりにその「恐怖の根拠」ってものを説明しなきゃならないわけで、その説明の論理を組み立てる作業って、推理小説のものとすごく似ているような気がするんですよ。
実際に、赤川次郎先生とか吉村達也先生、宮部みゆき先生とか京極夏彦大先生なんか、ホラーは大得意です。
っていうか、貴志さんの作家としてのプロセスってすごくうらやましいです。
こういうプロセスでデビューしたいなあ。って、そもそも作品書けよって言われそうですが。
高校生・二宮さま。
彼の家に突然、酒乱の男が居候としてころがり込みます。男は母（秋吉さま）の元カレでございます。
男は母や妹（松浦さま）にやらしいことをしようとしたりしまして、二宮さま、いつしかその男に殺意を抱くようになります。
やがて彼は、「完全犯罪」を実現しようと様々な実験を繰り返すようになります。
彼の殺人計画は成功するのでしょうか。
って書くってことは、もちろん殺人計画は成功しないわけでありますが、殺人計画の詳細とか、実行の手順とか、それに伴う主人公の心理描写とか、なかなか丁寧に描かれておりました。
パパの採点。１００点満点中８５点。
監督の蜷川さまは言うまでもなく、日本演劇界の重鎮でございます。
蜷川さまって、最近、若い才能を育てることをかなり意識しておられるようです。
藤原竜也さまなんかは、今では蜷川演劇の要みたいな感じです。
その蜷川さま、本作の主演の二宮さまのことを絶賛していたそうでございます。
二宮さまの「身毒丸」とか見てみたいですね。

でも二宮さまって「ＡＲＡＳＨＩ」で忙しそうだから、さすがに舞台は実現しないかもしれません。

# ＭＩ３

２００６年アメリカ映画
監督　Ｊ・Ｊ・エイブラハムズ
主演　トム・クルーズ、ヴィング・レイムズ、ローレンス・フィシュバーン

「ミッション・インポッシブル」シリーズの第三弾。
天才エージェントのイーサン・ハント＝クルーズさまの大活躍を描くシリーズです。
今回はクルーズさま、現役を引退しております。
彼は今では後輩エージェントの育成を勤める立場となっております。
恋人あり。もう結婚カウントダウン。
よろしいやないですか。お幸せにって言ってあげられないのが申し訳ないところですが。
そんななか、クルーズさまが育て上げた女性エージェントが敵につかまってしまいます。
スパイ組織のＩＭＦは、即座にクルーズさまをリーダーとする救出チームを組織、彼女を救出します。
「例によって君もしくは君のチームのメンバーが敵に捕らえられ、もし殺されても、当局は一切関知しないのでそのつもりで」って言ってたＩＭＦですが、そのエージェントがつかんでいた情報がすんげえ重要なものだったわけで、だもんで救出でございます。
しかし敵もただものではない。
彼女の脳に小型爆弾を仕込んでおりまして、脱出すれば爆弾が爆発することになっていたわけですな。
で、彼女は亡くなってしまいます。
教え子を失った教官クルーズさま。
彼はＩＭＦの威信を背負って、彼女が持っていた情報の詳細と、そして彼女を拉致して爆弾を仕掛けた張本人を拘束しようと動きます。
もう、完璧な計画でワルの身柄を確保したクルーズさま。
しかしそれがとんでもないドラマの幕開けでございまして。
アメリカに着いて早々、護送中の車が完全武装の一団からの襲撃を受けまして、まんまと逃げられてしまうわけですな。
犯人の護送ルートは当然ＩＭＦのかなりポジションの高い人間しか知ることはできないわけでして、クルーズさまはＩＭＦ内部に裏切り者がいるのではと疑います。
そうこうしているうちに、ワルボスを逮捕したことでクルーズは目をつけられ、なんと婚約者が拉致されてしまうわけですね。
クルーズさま、ワルボスが欲しがっていた「中国政府が保管しているデータ」を盗み出すことになりますが…
パパの採点。１００点満点中８５点。
いやあ、めっちゃくちゃ面白かったです。

クライマックスからラストの流れるような展開も見事。
クルーズさまのアクションも素晴らしいし、競演のレイムズさま、フィッシュバーンさまも素晴らしいです。
素晴らしいできばえの作品でございました。

# フライトプラン

２００６年アメリカ映画
監督　ロベルト・シュベンケ
主演　ジョディ・フォスター、ショーン・ビーン

ジョディ・フォスターさまって、監督以上に映画を仕切ってしまうそうですね。
まあ彼女は監督もこなしてしまう才女でございますから、しかたないところでしょうが。
出てきたころは少女だったのに、いつの間にか荒くれ男どもにレイプされる年齢になり（告発の行方）、ＦＢＩの新人捜査官（羊たちの沈黙）になれる年齢になったんだなあって思っていたらもうママさん（パニックルーム、フライトプラン）でございます。
時のたつのは早い。
ちなみに私はフォスターちゃんとほぼ同年代でございます。
厳密に言うとフォスターさまのいっこ下。
ってことは、トム・クルーズさまとかブラッド・ピットさまより年上なんだ。ジョディ・フォスターさまって。
突然の事故で夫を失った未亡人がフォスターさま。
彼女は夫の仕事の関係で暮らしていたロシアから、子供を連れてアメリカに戻ろうとします。
実は彼女は飛行機の設計のほうの仕事をしているキャリアウーマンでございまして、たまたまなんですが、自分が設計に携わっていた飛行機でアメリカに帰ることになるわけでございます。
飛行機は無事離陸。
フォスターさま、疲れでついうとうと。
起きてびっくり。いっしょに乗っていたはずの娘がおりません。
客室乗務員に聞いてみても、そんな子供さんは最初から乗っていませんって言われてしまいます。
搭乗記録にも娘の名前はない。
周囲の乗客も娘のことなんか見ていないと言う。
最後には、遺体安置所からの連絡で、「娘さんはご主人といっしょに亡くなったと記録にある」なんて言われてしまいます。
いったいどういうことなんよおって話ですが。
さあここから物語は急転の大波乱ムービーに大転回。
めっちゃくちゃ楽しく見ることができました。
さすがジョディ・フォスターさま。
だてに私と同世代じゃあありませんなあ。
私の採点。１００点満点中９０点。
面白かったです。
作品途中で、「実はフォスターさまは心に病を持っていて、子供がいたっていうのは彼女の妄

想で…」って落とすんじゃなかろうかってめっちゃ心配しましたが、そういうふうに見ている側に思わせることさえ計算に入れた演出だったようでございまして。
なんかすごく心地よくだまされたって感想をもちましてございます。
素直に高評価の作品でございます。

# パッチギ！

２００４年シネカノン・「パッチギ！」製作委員会作品
監督　井筒和幸
主演　塩谷　瞬、高岡蒼佑、沢尻エリカ、楊原京子、オダギリジョー、前田　吟、小出恵介

バラエティやラジオで辛口コメンテーターとして知られる井筒和幸監督の代表傑作でございます。
「ゲロッパ！」もすごく面白かったし。井筒監督ってすごく面白い映画撮る人やなあって思いました。
「パッチギ！」は「ゲロッパ！」よりもさらにスケールアップ。
めっちゃ感動できる、泣ける名作にしあがっております。
泣いちゃいました。
クライマックスで主人公がラジオ生放送で「イムジン河」を歌う場面。
もう、泣けて泣けて。いやあ、ええ映画見せてもらいました。
舞台は１９６８年の京都。
主人公は塩谷さま。
京都の高校に通うフツーの高校生。
グループサウンズに憧れてマッシュルームカットにするようなお調子者。
彼らの高校のすぐ近くに朝鮮高校がありまして、二つの高校はしょっちゅうモメゴトを起こしております。
そんな折、塩谷さまは先生に命じられて二校のサッカー親善試合の申し込みのため、朝鮮高校に行くのですが、そこで一人の少女に恋をしてしまいます。
それがモメゴトの源でもある朝鮮側の番長（高岡さま）の妹（沢尻さま）だったわけですな。
沢尻さまはブラスバンドでフルートを吹く少女。
ブラスバンドで演奏していた「イムジン河」をフォークギターで練習し、彼女に近づこうとする塩谷さまですが…
あまりにも作品が充実しているので、ネタバレせずに内容とかが書ききれないのが悔しいところ。
この作品が本当に素晴らしいのはここからでして。
分断された南北朝鮮半島の統一のシンボルともいえる「イムジン河」のメロディーですが、それが作品広後半では「日本と朝鮮半島との国の壁」の象徴としても使われます。
本当に素晴らしい作品です。
パパの採点。１００点満点中９５点。
友人に在日韓国人の人がいます。めっちゃかわいい女の子。
その子とちょこっと話す機会がありましたが。
彼女は韓国姓を名乗っておりました。

彼女の仕事のこととか心配して、「日本名で仕事とかはしないの？」って聞きました。
彼女は言いました。「民族の歴史のこととか考えて、私は母国の名前を名乗っています」そのときの彼女、本当にまぶしかったです。
実はその子のこと、好きだったんですけど。
日本人はね、太平洋戦争のこと、忘れようとした戦後を送ってきたと思うんですね。
でも、朝鮮半島にとっても「戦争」はまだ終わっていません。
南北分断が続いている限り、半島の戦争は終わらない。
そう思います。一日でも早く、半島の統一が成し遂げられますように。

# ランド・オブ・ザ・デッド

２００５年アメリカ映画
監督　ジョージ・Ａ・ロメロ
主演　サイモン・ベイカー、デニス・ホッパー、アーシア・アルジェント

「ナイト・オブ・ザ・リビングデッド」「ゾンビ」「死霊のえじき」のジョージ・Ａ・ロメロ監督が、２０年ぶりにとりあげた「ゾンビワールド」。
うん。なかなかがんばってくれています。
例によって何の説明もないまま、世界は「ゾンビ」に支配されております。
生存者たちは、川に囲まれた中洲みたいな場所に人間居住区を作り、周囲を高圧電流フェンスと武装兵士で守って暮らしております。
街の中心部にはセキュリティ万全の「富裕階級のためのコミュニティ」みたいなものが作られております。
ベイカーさまはこのコミュニティの「物資調達軍」のリーダー。
物資調達だけでも軍隊並みの装備をしてたりするんですね、やっぱり。
富裕階級のボスがホッパーさまです。アルジェントさまは下町の娘。
この街では下層階級の者とか犯罪者などはゾンビに食われる見世物にされてたりしまして、彼女はそんな見世物であわやゾンビに食べられそうになっているところをベイカーさまに助けられます。
ベイカーさまは街を捨てて別の場所に住もうと考えていたりします。
ある日、彼の部下が富裕階級に対する反乱をおこしまして、武装トラックを強奪して街を出るわけですね。
ベイカーさま、そのトラックを奪還する命令をうけます。
数名の仲間と、監視役の「ホッパーさま直属の軍隊」のメンバーを連れて街を出るベイカーさま。
しかし、その街には「知性をもった新種」に率いられ、統率されたゾンビの群れが迫っているのでありました…
「学習能力をもったゾンビ」は、「死霊のえじき」で登場しましたが、今回の「知性をもったゾンビ」はさらに進化しておりまして、リーダーシップまでもっております。
こうなるとゾンビって強い。
果たして人類に明るい未来はあるのでしょうか。
パパの採点。１００点満点中７０点。
ワルボスを演じているデニス・ホッパーさまは、ロメロさまが２０年ぶりにゾンビ映画を撮るってことをききつけ、自ら出演を志願したそうです。
「イージーライダー」で世に躍り出た元祖トンガリディレクター＆アクターのホッパーさま、ロメロ監督の仕事を高く評価されていたようですね。

ヒロインを演じているアーシア・アルジェントさまは、「サスペリア」「フェノミナ」のダリオ・アルジェント監督の愛娘。
こういうキャスティングも憎い。
あ、そうそう、かの名作「ゾンビ」で特殊メイクを担当し、自ら悪役を演じたトム・サヴィーニさまも出演されております。
なんかいいですね。こういうキャスティング。

# シン・シティ

２００５年アメリカ映画
監督　ロバート・ロドリゲス
主演　ブルース・ウィリス、ミッキー・ローク、クライブ・オーウェン、ジェシカ・アルバ、イライジャ・ウッド、ジョシュ・ハートネット、パワーズ・ブース、ルドガー・ハウアー

めっちゃ豪華キャストのハードボイルドアクションでございます。
原作はフランク・ミラーのコミックス。
こいつを原作に忠実に映画化したって感じ。
コミックスの雰囲気を出すために、基本モノクロでパートカラーで描かれます。
撮影風景の映像つきのＤＶＤでしたが、この作品、ほとんどＣＧ合成で背景をあとで写しこむって手法で撮影されたようでございます。
役者さんはほとんどスクリーン前で演技していたみたい。
あまりにも美しく、それこそ「絵に描いたような」荒廃した街をバックに、男くさい役者さんたちおお暴れです。
物語は三つのエピソードからできておりまして、①ミッキー・ロークさま主演・醜い孤独な大男が、一夜をともにしてその晩殺されてしまった娼婦のために、彼女を殺した男を探して復讐するってエピソード。
②クライブ・オーウェンさま主演・整形して世間から隠れて暮らす元殺し屋が、娼婦たちの自治区を守るためにならず者グループと戦うことになるエピソード。
③ブルース・ウィリスさま主演・変態少女誘拐殺人鬼を逮捕した刑事が無実の罪で投獄され、刑事がその事件で救った少女を執拗につけねらう犯人を始末するエピソード。
この三つのハードボイルドバイオレンスの世界が描かれます。
「愛する女のために命をかける」みたいなハードな世界が繰り広げられます。
登場人物、みんな素直にかっこええ。
役者さんたちもみんなすごく気持ちよかったんじゃないでしょうか。
悪役で登場のパワーズ・ブースさまとかルドガー・ハウアーさまとかマイケル・マドセンさまとか、めっちゃびっくりしました。
マドセンさまはタランティーノ一派のレギュラーみたいな感じですが、それにしても悪役も豪華キャストですなあ。
イライジャ・ウッドさまが出てきたのもびっくりしましたが。
ミッキー・ロークさま、特殊メイクで面影ないし。
原作イメージを大事にした結果こうなったようですが、普通に出ていただきたかったって気もします。
パパの採点。１００点満点中８５点。
この作品、そもそものパイロット版として冒頭のハートネットさまのエピソードが撮られたそう

です。
で、そのパイロット版を見て、何人もの役者さんがたが名乗りをあげたそうで。
主演のひとりのウィリスさまも立候補組だったそうです。なんかウィリスさま好感度あがってしまいました。
ヒロインのジェシカ・アルバさまは「ダーク・エンジェル」のヒロインですよね。
なんかめっちゃエロかわいい。「ダーク・エンジェル」シリーズ見ようかなあ。

# バットマン・ビギンズ

２００５年アメリカ映画
監督　クリストファー・ノーラン
主演　クリスチャン・ベール、マイケル・ケイン、リーアム・ニースン、渡部　謙、ゲイリー・オールドマン、ルトガー・ハウアー、モーガン・フリーマン

「バットマン」の登場秘話を描いた作品でございまして、最近映画化された作品（「バットマン」「バットマン・リターンズ」「バットマン・フォーエバー」「バットマン＆ロビン・ミスターフリーズの逆襲」）で度々描かれておりました、父母が殺されるエピソードから始まりまして、ブルース・ウェイン（ベールさま）がバットマンとして生まれかわるまでを丁寧に描いております。
ただ、これまでの作品とは別の世界観でつくられております。
少年時代に、大富豪の父母を街で殺されたベールさま。
彼は世界じゅうを放浪する旅を続け、ついには「荒廃した社会をテロによって破壊～再構成する秘密結社」のアジトにころがり込みます。
アジトのリーダーは渡辺さま。
ベールさまの教育係がニースンさまでございます。
ニースンさまに鍛え上げられたベールさま、彼ら組織の次の標的が、「父が一生をかけて作り上げた街・ゴッサムシティ」であることを知り、組織を離脱。
そして自らの手でゴッサムの浄化をはかろうと、父の会社の「秘密兵器開発部」みたいなところで保管されていた秘密兵器を使い、バットマンとして街のワルを退治することになります。
しかし、やがて組織の魔手がひたひたとせまってくるわけでございますです。
作品クライマックスで「ジョーカー」がカードだけで登場。
前バットマンシリーズ四部作では、ウェインの両親を殺したのって、ジョーカーでしたよね。
ってことは…　つながってないやん。
ってことは別の次元の話なんや。ってこういう気づきかたしました。
パパの採点。１００点満点中８０点。
世界のケン・ワタナベさま、なかなかの存在感でございます。
ちょっとニースンさまに喰われ気味でしたが。
それよりびっくりしたのがルドガー・ハウアーさまでございます。「ブレードランナー」とか「ヒッチャー」のころはめっちゃかっこええ感じやったのに。年とられましたなあ。
ちょっと前にご紹介した「シン・シティ」にも出ておられましたが。
なんかねえ、すっかり恰幅がよくなってしまって、今ではクルト・ユルゲンスさまが演じていたような役柄が似合うようになってしまいました。
年をとるって怖いなあ。

# フラガール

２００６年シネカノン・「フラガール」製作委員会作品
監督　李　相日
主演　松雪泰子、蒼井　優、豊川悦司、山崎静代、岸辺一徳、富司純子

日本中にフラダンスブームを巻き起こした、けっこうウルウル系の青春ムービーでございます。
この作品で蒼井優ちゃん、大ブレイク。
同時に女優「シズちゃん」も開眼させてしまった恐るべき作品でございます。
舞台は昭和４０年代。
日本という国の主要エネルギーが「石炭」から｢石油｣へ、劇的に転換していこうとしていた時期です。
常磐ハワイアンセンターのオープン時の秘話だから、いわき市のお話。
「炭鉱」は産業として目に見えて斜陽化しております。
しかし鉱山で働いていた人には、その炭鉱近隣で「炭鉱町」を作って生活していたわけで。
かれら炭鉱にたずさわる人々は、「閉山」「人員削減」「解雇」みたいな言葉にびくびくしながら生活しているわけです。
そんななか、会社の重役たちは、少しでも地元での雇用を確保しようと、レジャー施設「常磐ハワイアンセンター」を立ち上げ、そこを炭鉱町の人々の働き口としようと考えます。
センターの目玉は、地元の娘たちによる「フラダンスショー」。
そんな、まあ「えらいさんの思いつき」みたいな計画が、関係者たちの血のにじむような努力の結果、形になり、オープンを迎え、やがて事業として成功していくまでを描いた、まあある意味青春チャレンジサクセスムービー系の映画でございます。
常磐ってどこよ、みたいなノリでこの大事業へ参加することになったダンス教師役の松雪さま、めっちゃくちゃすばらしいです。
そしてそれ以上に輝いているのが、「友人に誘われてなんとなくフラダンスチームに応募して、気がついたらリーダーになっていた」って女の子を演ずる蒼井さま。
この演技だったらその年の新人賞総なめもうなずけるところです。
富士純子さまも予想以上に素晴らしかったです。
私は世代的に「緋牡丹お竜」の藤純子様を見ておりませんが、さすがにそろそろ見ないといけないかなあって思ってしまいます。
頑張っている女優陣に対して、男優さんがたはみなさんちょっと元気ないですね。
トヨエツ様あたり、もうちょっと頑張ってくれてるかな、とか思ってみてましたが。
パパの採点。１００点満点中８５点。
ちょっと個人的な話。
私は大学卒業してからの一年間、劇団で小学校巡演公演班のメンバーとして旅回りしておりました。

そのころの苦労とか、「フラガール」班が旅回りする場面を見て思い出してしまいました。
でもね、今、会社の社員旅行とかで、観光旅館なんかで見る「舞踊ショー」の人たちとかね、よく考えたらドサ回りやっていたころの私と同じような努力・苦労をしているんだろうなあって思ったりして。
来年からちゃんと見てあげようっと。

# ジョゼと虎と魚たち

２００３年アスミック・エース作品
監督　犬童一心
主演　妻夫木　聡、池脇千鶴、上野樹里、新屋英子、江口徳子

仲良しさんで、イラストとか音楽とかやってる人がおりましてなあ。
その人が、友人から推薦されて見たいって言ってた作品がこの「ジョゼ虎」。
けっこういい作品だって言われてたみたいで、その言葉聞いてましたんで、気になってた作品でございます。
かなり前にその話聞いたんですが、ようやく見ました。
うん。まあね、頑張ってはいるんだけど、「悪くはないかなあ」って感じでございました。
とってもリアルに撮っておられます。
田辺聖子様の原作小説がおそらくこんな淡々とした感じだったんだろうなあ。
読んだわけではありませんが。
劇団でね、「リアル」と「くそリアル」の違いってものを注意されたことがありましてね。
「リアルに演技しなさい」って注意されて、すんごくリアルに演じたら、「それはクソリアルっていうんだ、リアルすぎると観客にはわからない」って言われました。
それの意味って、ずっとわからなかったんですが、こういう作品に触れると、なんとなくわかるような気がします。
すごくリアルに作られています。
びっくりするくらいリアル。
それだけにね、ドラマ的な盛り上がりに欠けた作品のように感じました。
大学生・妻夫木さま。
彼は大学に通うかたわら、マージャン店でバイトしたりしております。
ある日、店長に頼まれてワンチャンの早朝散歩をしていたとき、彼は大きな乳母車を押すおばあさん（新屋さま）に出会います。
乳母車に乗っていたのは赤ちゃんではなく、足の不自由な少女、ジョゼ（池脇さま）。
彼には狙っているカノジョ（上野さま）がいてるわけですが、彼の気持ちはだんだんとジョゼに傾いていくわけでございますな。
どこか世を拗ねたような、そして何かを悟ったような話し方をするジョゼ。
やがて彼はジョゼのためにいろいろと動くようになりまして、「なんとなく気になる」存在から「恋愛感情をもった」存在に変わっていくわけでございます。
そして妻夫木さまは上野さまと別れてしまいまして、ジョゼ＝池脇さまといっしょに暮らすことになるわけですが…
出会いも別れもめっちゃリアルに描かれます。
やっぱりね、出会いとか別れとか、あまり劇的なもんじゃないんですよ。

なんか、なんとなく、「あ、もう終わったんやなあ」みたいなものが別れなんであって。
そんなクソリアルさがめっちゃリアル。
それがリアルなんでしょうが、映像にしちゃうとあんまり面白くない世界ですね。残念ですが。
パパの採点。１００点満点中８０点。
思わぬ収穫が、作品前半で登場した、妻夫木さまのセクフレを演じた江口徳子(江口のりこ)さま。
めっちゃくちゃ巧い女優さんです。
いきなりファンになってしまいました。これだけナチュラルに、いまどきの「エッチありの関係で男性とつきあうことができる関西弁の女子大生」を演じることができる女優さんがいるなんて知らなかったです。
すげえ衝撃的な出会いっていいますか。
東京乾電池の役者さんみたいです。ちょっと追いかけたいかも。

# ディセント

２００５年アメリカ映画
監督　ニール・マーシャル
主演　シャウナ・マクドナルド、ナタリー・メンドーサ、アレックス・レイド、サスキア・モルダー、マイアナ・バーニング

ＤＶＤジャケットに「一人で見るには、怖すぎる」ってコピーがありまして、そのコピーに惹かれてついレンタルしてしまいました。
一人で見たけど、「怖すぎる」なんてことはなかった、普通のホラー映画でございました。
主人公のマクドナルドさまは、仲間たちといっしょに「激流下り」だとか「洞窟探検」だとかを楽しむ、まあいわば「危険を楽しむ系グループ」に所属する女性でございます。
仲間たちと楽しんだ帰り、彼女は交通事故にあいまして、夫と子供を失います。
そして数年後。
彼女を元気づけようと、デインジャーシーカーグループが集結。
前人未到の洞窟に探検に行こうって話になります。
もっともそれはマップも完備されている「安全な洞窟探検」だってことで出発したわけですが。
探検の途中、いきなりの落盤。
彼女たちは帰路を絶たれてしまうわけですね。出口を求めて洞窟内を歩きまわるグループ。
苔が光っているのを出口の光だと勘違いしたメンバーの一人が岩の裂け目に落ち、骨折してしまったりします。
それでも力をあわせて出口を探す彼女たちですが、いきなり現れる「地底人」。
骨折して走れないメンバーがいきなり犠牲になってしまいます。
仲間を逃がすためにピッケルで戦っていたグループのリーダー（メンドーサさま）、心配して引き返してきた「主人公の親友（レイドさま）」をピッケルで刺してしまいます。
えらいこっちゃ。
逃げ回るうちにメンバーははぐれてしまいまして、マクドナルドさまは瀕死の親友を見つけてしまいまして。
彼女の口から「リーダーを信用するな、私は彼女にやられた」なんて聞いてしまったりして。
もうこうなったら人間関係ドロドロでございます。
出口はないわ、地底人は襲ってくるわ、仲間は信用できないわ。
こうなったらメンバー誰も生き延びることのできる要素なんてないわけでございまして。
途中から「全滅やろなあ」って思いながら見ておりましたが…　果たして何人が生き延びるのでしょうか。
パパの採点。１００点満点中６０点。
うん、地底人を出す必要あったのでしょうか。
仲間同士の疑心暗鬼を描くなら、地底人いらなかったですね。

で、地底人の恐怖を描くなら、ここまでドロドロの仲間割れは必要ない。
っていうか、仲間割れの描写はむしろ不自然で、邪魔です。
サバイバルなんだから、仲間同士でドロドロやっている暇なんて本当にないって言うか。
常識的に考えたらね、助かってからドロドロするもんでしょ。
ちょっと人間描写うまくいってなかったですね。
洞窟探検グループだから、当然肌の露出とかほとんどないし。
ホットパンツムチムチとかだったらもう少し不純な気持ちでの興味が持続したかもしれまへんが。

# ポセイドン

２００６年アメリカ映画
監督　ウォルフガング・ペーターゼン
主演　カート・ラッセル、ジョシュ・ルーカス

１９７２年に製作されたパニック・アクションの元祖、「ポセイドン・アドベンチャー」のリメイク作品。
年末の豪華パーティーをしながらクルーズを楽しんでいる豪華客船「ポセイドン号」。
突然発生した津波をもろに受けまして、転覆してしまいます。
しかもお約束。天地逆にひっくり返ってしまいます。
気密構造になっているから、パーティールームから動かないほうがいいと主張する船長。
しかし船長の指示をふりきって、数名のグループが、「船の設計上の底」、すなわち「海面からつき出た船底」すなわち「上」に登り、脱出をはかろうとします。
このグループがラッセルさまらのグループですね。
やがてパーティールームの窓が水圧で破れ、部屋は水没。
生存者はラッセルさまらグループだけになってしまうわけですね。
グループは犠牲者を出しながらも上へ上へ、生存をかけて登っていきます。
最終的にはスクリュー口からの脱出をはかるわけですが、果たして彼らは生き残ることができるのでしょうか。
１９７２年版でちょっと文句のあった箇所が、やはりかなり大幅に修正されておりまして、めっちゃくちゃ説得力のある作品に仕上がっておりました。
前作ではね、転覆した船がまっさかさまの状態で長く安定して浮いているわけなかろうって思っていましたが、ほんま、そのとおりでございまして、今回は「この状況はあまり長くは続かないだろうから、一刻も早く船から脱出しなければならない」って危機感もありまして。
事実、途中で船がガクンって沈んだり、船首が上がったり船尾が上がったり、実に細かく不安定な状況になってくれまして。
こんなだと、実に「今にも沈みそう」感が高まってまいりまして。ええ感じで緊迫してしまいましたです。
パパの採点。１００点満点中７５点。
主要キャストの配置ミスですね。
えっとね、ちょっとネタバレになるんですが、こういうパニック・アクションものの主要キャストの中に子供がいたらね、普通その子供って助かるでしょ。
ってことは「前作では脱出グループのほとんどが助かったけど、今回はそうじゃないかもしれない」ってことはないでしょうし。
けっきょく生存者はほとんど私の予想通りでございました。
やれやれ。

深読みしすぎでしょうか。

# コラテラル

２００４年アメリカ映画
監督　マイケル・マン
主演　トム・クルーズ、ジェイミー・フォックス、ジェイダ・ビンケット・スミス

トム・クルーズさまが初めて本格的な悪役にチャレンジした作品でございます。
けっこう面白いサスペンス映画でございました。
クルーズさまは殺し屋でございます。
ある組織から仕事を請け負いまして、一晩で五人を暗殺することになります。
クルーズさまは、仕事の下見であるビルを訪れ、その帰りにフォックスさまが運転するタクシーを使うわけですな。
その地域の交通事情に精通したフォックスさまの仕事ぶりに関心をもったクルーズさま、フォックスさまを高額の報酬で一晩雇うと言い出します。
相手を普通のビジネスマンだと思ってその仕事を請けたフォックスさまですが、最初の立ち寄り先でマンションから撃たれた男が落ちてきて仰天。
彼はここでクルーズさまが殺し屋であることに気づくわけですな。
フォックスさまの逃亡・通報を恐れたクルーズさまは、「仕事」の現場にフォックスさまを連れていったり、彼に手錠をはめて仕事に行ったりと苦心惨憺。
それでもフォックスさまはクルーズさまの殺しを止めようとあの手この手を使います。
やがてフォックスさまは、クルーズさまのターゲットのひとりが「クルーズさまを乗せる直前に自分のタクシーの乗せた客の女性検事」であることを知ります。
この女性検事に好意をもっていたフォックスさま、検事の勤務するビルに向かい、彼女の命を暗殺者から救おうとしますが…
トム・クルーズさまってやっぱり巧い俳優さんですよね。
こういう役も違和感なくこなします。
けっこうすごいです。
作品後半、まるでターミネーターのような執念深さで女性検事とフォックスさまを追うクルーズさま。
ほとんどホラーみたいなシチュエーションを軽々とこなしておられます。
なかなかの名演技でございます。こういう演技も問題なくこなせるんだってことで、改めてクルーズさまの懐の深さに関心してしまいました。
パパの採点。１００点満点中８５点。
タクシードライバーを演じているジェイミー・フォックスさまは、この作品とこの後に製作された「ＲＡＹ／レイ」でアカデミー助演男優賞と主演男優賞にダブルノミネート。
クルーズさまがいくらいい演技をしても、それを受け止めるフォックスさまの存在がいなければクルーズさまも輝かないわけでありまして。

この素晴らしい二人の幸せな出会いがこの作品で輝いたってことになりますでしょうか。

# ＪＳＡ

２０００年韓国映画
監督　パク・チャヌク
主演　ソン・ガンホ、イ・ビョンホン、イ・ヨンエ、キム・テウ

めっちゃくちゃええ感じの作品でございます。
朝鮮半島南北分断の象徴である３８度線。
そこはＪＳＡ（共同警備区域）と呼ばれておりまして。
お互いが相手を監視し、警戒しあうこの場所の北朝鮮側監視場で、二名の北朝鮮兵士が射殺されるという事件が起こります。
この事件で当事者となった韓国側の兵士と、北朝鮮側兵士の生き残り将校との間で、証言が食い違っておりまして。
国連が派遣した中立国スイスの女性将校がこの事件の真相究明に乗り出すわけですが、事件の鍵を握ると思われていた韓国側重要証人が自殺未遂を起こしたりします。
やがて事件の裏に隠されたとんでもない事実が明らかになっていきますが…
ここらあたりのエピソードで物語が始まって３０分くらいでしょうか。
このへんからは韓国側兵士（イ・ビョンホンさまでございます）の回想シーンとなります。
途中、回想シーンがインサートされまして、（女性調査官の知らない）事件直前までの経緯が一気に描かれますので、映画を見ている側としてはとてもわかりやすく物語展開を理解することができます。
っていうか、ものすごくよく考えられた作品構造でございまして。
作品前半はそれこそ全く事情がわからないので、女性調査官の視線で事件を追うわけですね。
しかし回想シーンがインサートされたあとでは、事件を起こした兵士の心情で映画を見てしまいますから、なんだか女性調査官がすごく嫌な奴、みたいな感じ方をしてしまいます。
まあそれがこの作品の構造的な仕掛けであるわけなんですが。
そして残された「事件発生の瞬間の謎」が解き明かされるわけでございますね。
推理サスペンスとしても抜群の仕上がりでございます。
韓国映画って本当にすごいなあって素直にびっくり。
「シュリ」とか「シルミド」とか。ここらへんの作品が描いている世界はね、日本人には逆立ちしても描くことのできない世界でありまして。
素直に高得点評価でございます。
パパの採点。１００点満点中９０点。
ソン・ガンホさまがめちゃくちゃいいですね。
この人の出演作品、もっともっと見てみたいなって思います。
ええ感じで気になる役者さんでございます。
イ・ビョンホンさまはちょっと中途半端な感じ。

惜しいです。それでもこれだけの作品を作ることができたってことで、韓国映画万歳ってことになりますでしょうか。

# ＭＡＫＯＴＯ／マコト

２００５年「ＭＡＫＯＴＯ」製作委員会作品
監督　君塚良一
主演　東山紀之、哀川　翔、和久井映見、室井　滋、別所哲也、武田鉄矢、ベッキー、佐野史郎

もうねえ、かなりええ感じのファンタジー系作品。
っていうか、「一歩間違えたらホラーでっせ」系の作品でございます。
でも見終わった感覚は「ええ映画見せてもろたがな」って感じになるから、この系統の作品って不思議です。
主人公のマコト＝東山さまは司法解剖を行う監察医でございます。
同僚は室井　滋さまだとかベッキーさまとか。
東山さまには不思議な力がありましてね。
この世に未練を残して死んだ人の霊が見えてしまうって力。
でも残念なことに、声とかは聞くことはできなくて、ただ姿が見えるだけなわけですね。
彼の友人で警察官の哀川さまは、彼のその不思議な力を捜査に活用していたりします。
つまり、発見された死体の周辺に「未練を残して死んだ霊」がいなければとりあえず成仏しているわけだから事件性はありまへんと、まあそういうことですな。
未練を残して死んだのなら「事件か事故かまではわからない」が、調べてみましょうと、まあそんな感じのルールで捜査に活用しているわけですね。
そんな東山さまは亡くなった妻がおります。
妻・和久井さまは、数年前に交通事故で亡くなっておりますが、彼女の霊は東山さまの部屋にずっといる様子なので、どうやら現世に未練が残っているようです。
数々の事件にかかわりあいにあるうちに、東山さまの前で、ときどきではありますが、霊が実体を取り戻して生きている者に語りかけるような事例がでてきたりなんかします。
虐待死が疑われた幼児だとか、フタマタ恋愛の果てに浮気相手に殺された女子大生だとか。
そんなことが繰り返される中で、東山さまは妻の事故について、そしてその裏に隠された真実を知ろうと再び調べ始めるわけですが…
幼い女の子の霊が出てくる場面、もう号泣してしまいましたがな。
反則ですわな、ああいう場面。
しかしその場面、悲しいかな物語のかなり前半部分でございまして。
そこから先は、ちょっとしんどかったかもしれません。
めっちゃいい場面が作品前半にきてしまいましたらね、そこから先はどうしてもその場面以上に感動的な場面を待ってしまう、みたいな。
後半にも大感動シーンをもってきていただきたかったですね。
パパの採点。１００点満点中８５点。
作品のラストで河口恭吾さまの「夢の真ん中」が流れましてねえ。

涙ボロボロでございます。
この映画を見たときって、ちょうど親しくしている友人が転勤した直後でございましてなあ。
「さよならを繰り返してぼくらは出会いの意味を知る」ってフレーズ、聞いただけでめっちゃ泣きましたが、最近聴きなおしてみましたら、あんまり泣けなかったです。
やっぱり映画って、特殊な気持ちにさせてくれるんでしょうね。

# ディパーテッド

２００７年アメリカ映画
監督　マーティン・スコセッシ
主演　レオナルド・ディカプリオ、マット・デイモン、ジャック・ニコルソン、マーク・ウォールバーグ、マーティン・シーン、アレック・ボールドウィン

マーティン・スコセッシ監督による、香港映画「インファナル・アフェア」のリメイク。
なかなかいい感じに仕上がっておりました。
マフィアの手先として警察学校に入学したデイモンさま。
警察学校から卒業と同時にマフィアへの潜入捜査を命じられたディカプリオさま。
それぞれの組織から、全く逆の使命をうけた二人の若者が、お互いの素性を探りあい、なおかつ組織の情報を探って連絡し…みたいな、めっちゃ緊迫した構造のサスペンスドラマでございます。
オリジナル版の「インファナル・アフェア」では、ディカプリオさまの役柄をトニー・レオンさまが、デイモンさまの役柄をアンディ・ラウさまが演じておりました。
物語の展開は基本的には「インファナル・アフェア」とほとんど同じでございました。
ハラハラドキドキするポイントもほぼ同じ場所でしたね。
携帯電話やパソコンが普及して、オリジナル版よりちょこっとハイテク風な設定がされているかなって場面もあるにはありましたが、それによって物語が大きく動くってこともなく、やはり前作の大筋に沿って物語が展開していく感じです。
ちょっと意外だったのは、作品全体の雰囲気でしょうか。
これまで日本映画とか中国映画のハリウッド版リメイクっていいますと、ちょっと、というかかなり明るい雰囲気の作品になっていたことが多かったと思いますが、この作品はちょっと違いましたね。
明らかにハリウッド版のほうがどんよりと暗いムードになっておりました。
流血なんかも多く、ちょっとしつこい感じ。
もう少し明るい雰囲気の作品だとうれしかったんだけど。
しかたないですかね。スコセッシ監督って前からダークなムードの人間ドラマっぽい作品撮る人でしたし。
しかし私的にはもう少し明るいラストを用意していただきたかったですね。
パパの採点。１００点満点中８０点。
すでに見た映画のリメイクの場合、どうしても前作との比較になってしまいますので、けっこう楽しめた作品でもポイントか辛めになってしまいます。
「インファナル・アフェア」見ていなかったらもう少しポイントが高かったかもしれません。

# ショーシャンクの空に

１９９４年アメリカ映画
監督　フランク・ダラボン
主演　ティム・ロビンス、モーガン・フリーマン、ウィリアム・サドラー

スティーブン・キング原作の傑作人間ドラマの映像化でございます。
原作小説は「刑務所のリタ・ヘイワース」。
言うまでもまくスティーブン・キングさまはホラー小説で名をあげた作家でございます。
しかしながらこの作品はホラー要素なし。
無実の罪で「ショーシャンク刑務所」に収監された元銀行員ロビンスさま。
彼は持っている知識と技能を駆使し、看守たちの信用を得ていきます。
彼らの申告書類を作成し、所長の「福祉事業の名を借りたサイドビジネス」の裏帳簿作成などに手を貸すわけですな。
やがて彼は刑務所内の図書館の運営を任されることになります。
刑務所仲間からも認められます。
しかしこの刑務所の所長が一筋縄ではいかない男でございまして。
自分にとって都合の悪い行動をとりそうな囚人を平気で殺したりする男でございます。
ロビンスさまが服役している間にですねえ、彼の無実を証明することのできる囚人がショーシャンクにやってくるわけですが、この男が殺されてしまうわけですね。
そしてある日、ロビンスさまはある行動を起こすことになるわけですが…
最近の映画評論だとか、レンタルビデオ屋さんなんかの「お勧め映画コーナー」でいつも見かける作品でございます。
きっとすっげえいい作品なんだろうって思ってレンタルしました。
しかしなあ。うん。
私って、こういうパターン多いんですが、めっちゃ期待しすぎて映画を見たりしたら、ちょっと肩すかし食らったみたいな感じになったりしまして。
悪くはないんですが。
もうちょっと盛り上がって欲しかったです。
パパの採点。１００点満点中７０点。
とにかくモーガン・フリーマンさまが素晴らしいです。
ロビンスさまに協力しながら、静かに彼を見守る強烈な存在感です。
ティム・ロビンスさまも素晴らしいですね。
しかしなあ。もうちょっと盛り上がりが…もうええですか。

# パイレーツ・オブ・カリビアン／デッドマンズ・チェスト

２００６年アメリカ映画
監督　ゴア・ヴァーヴィンスキー
主演　ジョニー・デップ、オーランド・ブルーム、キーラ・ナイトレイ

ディズニーランドの大人気アトラクションからスピンオフした冒険ファンタジームービーの第二弾でございます。
やっぱり天下のディズニー映画でございますね。めっちゃ面白く仕上がっておりました。
今回は前回の続き。
前作で海賊ジャック・スパロワ（デップさま）を脱走させた罪で投獄されてしまったナイトレイさま。
彼の婚約者ブルームさまは「デップさまのもつコンパス」を奪ってもってくればナイトレイさまを開放するといわれます。
デップさまのコンパスを狙っているのは東インド会社のえらいさん。
ブルームさまはデップさまを探すことになるわけですな。
一方のデップさま。
彼は伝説の幽霊海賊デイヴィ・ジョーンズと契約をして自らの船を手に入れたわけなんですが、その幽霊海賊が契約を果たせとの使いを送ってくるわけでございます。
契約を果たさない場合は、その海賊の仲間（っていうより、こっちが海賊の正体っぽいんだけど）の巨大タコに襲われるってことになってしまう。
こいつはかなわんってことで、デップさまは陸地に逃げるわけでございます。
そこまでの間にブルームさまの父で死んだはずの海賊が、呪いをかけられ、幽霊となってジョーンズの船に乗っていることがわかったりだとか、ブルームさまがジョーンズに捕まったりとか、ナイトレイさまが牢屋を抜け出してブルームさまの後を追ったりだとか、もう本当に目が離せないって勢いで物語が細かく展開してまいります。
パパの採点。１００点満点中９０点。
デイヴィ・ジョーンズの造形がめっちゃよくできております。
特殊メイク大好きの私としましては、もうこれだけで高得点でございます。
タイトルになっている「デッドマンズチェスト」ってどういう意味でしょう。
作品冒頭で、かの「宝島」（とか、唐十郎さんの戯曲「それからのジョン・シルバー」なんか）で歌われた「死人の箱にゃ、十五人、それからラムが一瓶と…」ってフレーズが出てきたんですが、「死人の箱」って訳でいいのでしょうか。
ちょっと勉強不足ではっきり書くことができないですが。もうしわけございません。

# どろろ

２００７年映画「どろろ」製作委員会作品
監督　塩田明彦
主演　妻夫木　聡、柴咲コウ、原田芳雄、瑛太、杉本哲太、土屋アンナ、原田美枝子、中井貴一

故・手塚治虫先生の傑作伝奇時代劇漫画「どろろ」の映画化でございます。
物語が物語なんで、映画化はやはりＳＦＸがここまで進歩するまで難しかったようですね。
時は乱世。
武将・中井さまが妖魔と契約します。
妻・原田美枝子さまが宿している赤ちゃんの体のパーツ（目とか耳とか心臓とかって意味です）を代償として提供するので、天下を獲らせてほしいと、そういう契約でございます。
彼が契約した妖魔は４８匹とか、なんかそれくらいの数字。
やがて目も手も足もない赤ちゃんが生まれてきまして、その赤ちゃんは人知れず川に流されます。
その赤ちゃんを拾って育てたのが原田芳雄さま。
原田さまは自由に動く義手義足を作るという、不思議の術を使う医師でございまして、彼は赤ちゃんに刀を仕込んだ義手だとか人口臓器とか義眼とかを作り、百鬼丸＝妻夫木さまと名づけて育てます。
やがてたくましく成長した百鬼丸は、自らの体を取り戻すため、生みの父が契約した妖魔を一匹ずつ退治していくわけでございます。
百鬼丸の旅の途中で知り合った小泥棒がどろろ＝柴咲さま。
どろろは百鬼丸の腕に仕込まれた「妖魔を斬る名刀」を狙って百鬼丸と行動をともにすることになります。
やがて二人の間に友情というか愛情というか、そういう感情が生まれはじめて…って物語。
パパの採点。１００点満点中７５点。
キャスティング発表の段階でかなり嫌な予感しておりましたが、やはりその予感は的中でございます。
えっとねえ、どう書いたらいいでしょう。
私が高校生のとき、「鞍馬天狗」ってドラマがありました。
主演は草刈さまで、杉作役が伊藤つかさちゃん。
この作品、けっこう酷評されたんですな。
何故かってえと、つかさちゃんが女の子っぽすぎたから。
っていうか、この作品に関しては杉作は実は女の子だったって設定にしていたわけなんです。
その昔の、美空ひばりさまが演じた杉作は男の子って設定だったですが。
男の子の杉作を女の子役のひばりさんが演ずるってとことが面白かったわけで、その杉作がそもそも女の子で、女の子役さんが演じるのは面白くもなんともない。

この作品もそういう構造でして、原作漫画では準主役の「どろろ」が実は女の子だったってえのが作品中盤のサプライズであって、その「どろろ」を女の子にしか見えない柴咲さまが演ずるのは面白くもなんともないわけなんです。
妻夫木さま・柴咲さまっていう旬の二人の競演って話題性はあったんですが、作品そのもののサプライズはまるでなかったです。
このあと紹介することになる「ヒノキオ」とかの中盤サプライズのほうがよっぽどびっくりしました。
「どろろ」の配役、有名すぎたんでしょうか。

# ２８日後...

２００２年アメリカ映画
監督　ダニー・ボイル
主演　キリアン・マーフィー

「トレインスポッティング」のダニー・ボイル監督が描くめっちゃくちゃダークな未来世界。
カテゴリーとしてはゾンビものの殺人ウイルスものになりますでしょうか。
ある施設で猿を使ったウイルス実験が繰り返されていたと思いなせえ。
そこに命がけで侵入した動物愛護団体がいたとしなせえ。
動物愛護団体の皆さん、すごくピュアだから、「お猿さんかわいそう」みたいなノリで動物たちを開放したりします。
しかししかし、そのお猿さんたちの中には、人類を一ヶ月以内に滅亡させるほどの力をもったウイルスに感染した個体がおったわけですな。
まずお猿さん、動物愛護団体の女の人を噛む。
ウイルスは唾液や血を媒体として感染します。
しかし我々が知っている「体液感染」よりもはるかに感染力は強い。
まあ感染した血が傷口とか粘膜に触れただけで感染しちゃうって思っていただければいいかと思います。
潜伏期間はめっちゃ短くて、一分とか二分で発症してしまいます。
発症したらそれだけでゾンビみたいに非感染者を襲って噛みついたりします。
で、その事件から２８日後。
主人公マーフィーは無人の病院で目を覚まします。
街には誰もいない。荒廃した市街地をあてもなく歩きまわる主人公。
と、人影発見。あまりにも状況がわけわからんので人影を追いますわな、普通。
で、教会みたいなところに迷い込む。
そこにおったのはお約束でございまして、大量の「感染者」だったわけでございます。
主人公、わけわからんなりに逃げる逃げる。
そこで彼は完全武装した「生存者」に出会うわけでございまして、彼らと行動をともにしながら、生き延びる道を模索することになるわけです。
今回もゾンビ（っていうか感染者なんですが、カテゴリーとしてはゾンビですな）さん、走ります。
めっちゃ走る。
最近、ゾンビが走るってのは流行みたいな感じですね。
やっぱりイゴイゴノタノタくるより、ぐおおおおっとかいいながら走ってこられるほうが数倍怖いです。
なんかめっちゃ夢に見そうなゾンビダッシュ再びって感じでございます。

パパの採点。１００点満点中７０点。
この作品、作品全体の雰囲気が「ゾンビ」っていうよりもマシスン原作の「地球最後の男・オメガマン」みたいな感じでした。
どこがどうってわけでもないんですが、冒頭立ち上がりのムードがなんとなくそういうイメージでございました。
なんかブルーになってしまいます。
「噛まれたらすぐに感染する」って設定、なかなかスリリングで面白かったですが、その設定、もうすこしふくらませたらもっと面白くなったんじゃないかなってのはちょっと生意気な感想でございます。

# Ｘメンファイナルデシジョン

２００６年アメリカ映画
監督　ブレット・ラトナー
主演　ヒュー・ジャックマン、ハル・ベリー、ファムケ・ヤンセン、イアン・マッケラン、パトリック・スチュワート

ブライアン・シンガー監督の大ヒットシリーズ第三作。
ファイナルってことですが、この作品以降の物語が描かれるかどうかは今後の展開を見守らないといけないでしょうね。
って書きかたするにはそれなりに理由がございまして、なんかめっちゃ意味深な終わりかたしちゃったので。
とりあえずシリーズは現在、最初の作品「Ｘメン」に至る経緯を描いてはりますが。
前作クライマックスで仲間を救うために犠牲になってしまったヤンセンさま。
人間との共存を目指すミュータントグループのＸメンのメンバー、彼女を失ったショックから立ち直れないでいます。
一方、人間グループは「ミュータントのあらゆるパワーを無力化することのできるミュータント（ややこしい）」の力を使い、ミュータントを人間化させる薬を開発します。
当然、これに反発するのはミュータントによる人間世界の支配をたくらむマッケランさま一派。
彼らは「その薬」の力の源でもあるミュータントを亡きものにしようと企むわけでございます。
そのころ、前作で死んだと思われていたヤンセンさまが復活します。
どうやら彼女、親人間・反人間のそれぞれのミュータントグループのリーダー（スチュワートさまとマッケランさま）の力をはるかにしのぐ能力の持ち主であったことが明かされます。
彼女がＸメンとして活動できていたのは、スチュワートさまが彼女の中に「善の人格」を育てあげ、その「善の人格」によって「彼女の本当の力」を抑えこんでいたのだってことが明らかになるわけですね。
「Ｘメン」としての彼女が犠牲になってしまったことによって、彼女はさながら「破壊神」のようなミュータントとして生まれ変わり、あろうことかマッケランさま一派に加わります。
果たしてＸメンたちはマッケランさまたちの野望を打ち砕くことができるのでしょうか。
もう、ここまでくると「もうええから徹底的におやりなさい」って感じです。
ＳＦＸも大がかり。物語の運びも半端な激しさではありません。
クライマックスも、めっちゃ力が入っておりましたし、素直に楽しんでしまいました。
パパの採点。１００点満点中８５点。
パトリック・スチュワートさまもイアン・マッケランさまも相変わらずいいですね。
こういう名優さんがたが出てくると、画面が引き締まって見えます。
とりあえず「ファイナル」ってことですが、次回作、製作されるようでしたら是非拝見したいと思います。

なんか…続くと思うんだけどなあ。

# 涙そうそう

２００６年「涙そうそう」製作委員会作品
監督　土井裕泰
主演　妻夫木　聡、長澤まさみ、小泉今日子、塚本高史

なんか妻夫木クンって一時期めっちゃ映画出てました。
最近ご紹介した作品だけでも、「どろろ」に「ジョゼと虎と魚たち」に「ローレライ」。
んでこの作品。
たまたま彼の主演作品ばっかり見ちゃっただけなのかもしれませんが。
最近ちょっとペースダウンしてるのでしょうか。
そんな大活躍若手俳優の妻夫木さまが主演する感動の一作。
競演はこれまた映画版「セカチュウ」でブレイクし、今や主演女優の風格がでてきたの長澤まさみさまでございます。
まあこのキャスティングで話題にならないわけがないのであって。
たいそう話題になった作品でございますね。
でもなあ。ちょっとなあ。この「でもなあ」については下で詳しく書きます。
母ひとり子ひとりの小泉今日子さま親子。子供は男の子ね。
彼にある日、妹ができます。
母親が再婚するわけですな。「父と妹ができた」わけではなく、妹ができる。
結婚してすぐ、新しい父は娘を置いて姿を消します。ほどなく母は病気で他界。
「妹のことを頼むね」と言った母の言葉を守り、兄は血のつながらない妹を守りながら暮らしていきます。
やがて二人は成長しまして、兄・妻夫木さま、妹・長澤さまとなる。
沖縄の離島で祖母と暮らしていた長澤さま、高校進学のために兄が暮らす沖縄本島に引っ越してきます。
兄は沖縄本島で一人働きながら妹と祖母にずっと送金を続けていたわけですね。
兄と妹は共同生活をはじめます。
妻夫木さま、めっちゃええお兄ちゃん。
妹が心配でしかたない。
長澤さまもめっちゃいい妹。
おにいちゃんのことが大好き。
やがて妹は、大学進学を機に兄のために兄から離れて暮らすことを考えはじめます。
そして季節はずれの台風が沖縄を直撃した夜、悲劇が起こってしまうのでございます。
いぐわあああ。
で、「涙そうそう」流れる、みたいな。
パパの採点。１００点満点中７５点。

えっと。上の「でもなあ」の理由でございますが。森山良子さまの「涙そうそう」って歌は、森山さまが若くして亡くなったお兄さんのことを歌った曲でございましたでしょ。
ってことはね、タイトルが「涙そうそう」だったら、クライマックスで「涙そうそう」が流れないわけがないわけであって、そうなると…って考えすぎてしまって、やっぱり予想通りに物語が展開しちゃったから「あ〜あ、残念」って感じです。
でも泣けちゃった。
いつも思うんですが、私ってほんま安物の観客ですなあ。
悲しい系の映画だったらとりあえず感動して泣いちゃってモトとるタイプですから。

# ヒノキオ

２００５年「ＨＩＮＯＫＩＯ」ＦＩＬＭ　ＶＥＮＴＵＲＥＲ作品
監督　秋山貴彦
主演　中村雅俊、本郷奏多、多部未華子、堀北真希、原　沙知絵、牧瀬里穂、原田美枝子

けっこう泣きました。
予告見て、この映画はやばいなあって思っておりましたが、やはり。
でも、予想していたほどは泣かなかったです。
ってことはどういうことなんやろ。やっぱり映画の予告編って、本編よりよくできていること多いですもんね。
主人公は本郷奏多さま。
彼は母とともに事故にあいまして、心と体に深い傷を負ってしまいます。
母・原田さまは亡くなってしまいまして、父は中村さまでございます。
ロボット研究者の中村さまはひきこもりの息子のためにロボットを作ります。
で、本郷さまが操縦するロボットを学校に通わせるわけでございます。
つまり、ロボットが本人の目となり耳となって学校生活を送ることになるわけですな。
本体の軽量化のため、ロボットの骨格にヒノキが使われておりまして、友人にヒノキオってあだ名をつけられます。
クラスにはガキ大将みたいな子がおります。
最初はいじめてたりしたんだけど、「お前、仲間に入りたいのか。ついてこい」みたいな感じで、ヒノキオはそのグループに入れてもらえることになります。
そのグループのリーダーが多部さま。
私、当時多部さまのこと知らなかったです。
物語の中盤で、実はこの子は女の子だったんだってことがわかるまで、「えらいかわいい顔した男の子やなあ」って思いながら見ておりました。
本郷さまにとって気になる存在、となりのクラスのマドンナみたいな子が堀北さま。
このキャスティングにもびっくりです。
ＤＶＤの特典映像に、主要キャストのインタビューとかがありましたが、堀北さまご本人も「この年になって小学生役をやるとは思わなかった」と言っておられました。
しかしねえ、まあやっぱり、多部さまのことが女の子だったってわかってからは、本郷さまの気持ちは多部さまのほうに傾いていきまして。
しかしクラスでは、ヒノキオと多部さまが仲良くなっていくことをやっかむクラスメート（やっぱり女の子なんですな、これが）がおりまして、彼女は「ヒノキオは軍事用に開発されたロボットなんだ」ってことをクラスのみんなに言ってしまって…
さあさどうなる。
パパの採点。１００点満点中８５点。

けっこうよくできておりましたし、けっこう泣いてしまいましたです。
ほとんどセリフはないんだけど、細やかな感情を見事に表現してみせた本郷さま、あと、男っぽいんだけどすごく繊細な気持ちを持っている少女を演じあげた多部さまの二人の若い俳優さんが作品をめっちゃ面白くしております。
とりあえずこの二人がいなかったらこんなに面白くなっていなかったかもしれません。

# 鉄人２８号

２００５年「鉄人２８号」製作委員会作品
監督　冨樫　森
主演　池松壮亮、蒼井　優、中村嘉津夫、阿部　寛、香川照之

横山光輝さま原作の伝説的ロボットアニメ、ここへきてなんとなんとの実写映画化。
幼いころ父を亡くした少年正太郎＝池松さま。
ある日、東京に謎の巨大ロボット・ブラックオックスが出現します。
ロボットは街を破壊。
そんなとき、謎の老人中村さまが池松さまの前に登場。
池松さまの父と祖父が研究していた巨大ロボット「鉄人２８号」の存在を知らされます。
で、池松さま、鉄人２８号を操縦する能力があるのは、そのロボット開発者（阿部さま）の息子である君だけだ、とか言われてしまうわけですね。
わけわからんままブラックオックスと戦う池松さま。
リモコン操作に不慣れなため、鉄人はコテンパンにやられてしまいます。
ブラックオックス対策として海外から呼び寄せられた若き天才科学者が蒼井さま。
起動不能となった鉄人をメンテナンスし、さまざまな新機能を加えてブラックオックスとの再戦に備えます。
池松さまは池松さまで、蒼井さまが作った操縦トレーニングマシンで猛特訓。
ブラックオックスを設計したのはこれまた天才科学者の香川さま。
果たして大ロボットバトルの勝者は鉄人なのか、ブラックオックスなのか。
蒼井　優さまがけっこうがんばってくれています。
まあ「フラガール」の名演には及ばないものの、けっこう透明感あふれるいつもの演技。
いいですね。主人公の正太郎少年を演ずる池松さまもけっこう頑張っています。
これからが楽しみな役者さんでございます。
鉄人２８号のアニメは私が物ごころつく少し前だったように思います。
まるっきり記憶ないんで。
それでも「ビルの町にガオー」っていう主題歌はけっこう知っております。
作品ラストでこの主題曲が流れたときはけっこう感動してしまいました。
パパの採点。１００点満点中８５点。
こういうネタ、あまり書きたくなんですが。
少年愛のことをショタといいますが、このショタってのはこの原作漫画の「正太郎」からきているって何かの本で読んだのですが。
なんか半ズボンはいてハイソックスはいている少年のことなんかが好きな人のこと。
本当なんでしょうか。このへんのこと、詳しい方お教えください。
あと、「やおい」ってどういう意味で、語源ってなんなんでしょう。このへんの話、めっちゃ疎

くて。

# テキサス・チェーンソー

２００３年アメリカ映画
監督　マーカス・ニスベル
主演　ジェシカ・ビール、ジョナサン・タッカー、エリカ・ニーアセン

トビー・フーパー監督の傑作「悪魔のいけにえ」の執念のリメイク作品。
とりあえず「執念のリメイク」って言葉があてはまるような内容でございます。
全米で大ヒットを記録したそうでございますが、うむむ。
「悪魔のいけにえ」を初めて見たときの衝撃と比べたらやっぱりたいしたことなかったです。
それなりにがんばってはいましたが。
目が肥えた「今」やっぱりだからたいしたことないって感じるのかなって思ってたんですが、この冬、初見の「ソウ」見たとき「すげえ面白い」って素直に楽しめたので、若いころに見た映画か否かってのはあまり関係なんではないかと思います。
そういう意味では、やはり原作の「悪魔のいけにえ」を超えることはできなかった作品だろうと思います。
舞台はテキサス州。
あたりまえですな。
ロックバンドの「レーナード・スキナード」のライブに向かう五人組。
彼らは道路をフラフラ歩いていたとてつもなく危ない雰囲気を漂わせた女を車に乗せてしまいます。
あまりにも危ない感じなんでどこかの警察に送り届けようと、食肉工場の前を通ります。
いきなり女は「そこには行かないで」みたいに大暴れしまして、あげくの果てに持っていた拳銃で頭を打ち抜いて自殺してしまいます。
えらいこっちゃ。
一行は車にマリファナとか乗せておりまして、慌ててヤバイものを処分し、保安官を呼びます。
ところが保安官はいっこうに姿を見せません。
五人組のうち、二人は再び保安官を呼ぶために途中見かけた「怪しい」家に向かいます。
残った三人の前にやってきたのは「映画ファン」にはわかるめっちゃ「怪しい」保安官。
これがとんでもない悪夢の始まりでございます。
連続殺人鬼「レザーフェイス」の作業風景とか、「レザーフェイス」がちょこちょこインサートされまして、見ている分にはわかりやすかったですが、スリル・サスペンスって意味ではこの描写はいらなかったんじゃないかなって思います。
パパの採点。１００点満点中７０点。
新鋭マーカス・ニスベル監督、トビー・フーパーのぶっ飛んだ勢いはさすがに踏襲できませんでしたね。
「悪魔のいけにえ」は予告編見ただけで夜眠れないくらいに怖かった記憶がありますが。

雰囲気はけっこういい感じだったんですが、前作の「得体の知れないとんでもなさ」はなかったです。
仕方ありませんか。
リメイクって時点で「得たいが知れちゃって」るわけだし。

# ウルトラ・ヴァイオレット

２００６年アメリカ映画
監督　カート・ウィマー
主演　ミラ・ジョヴォヴィッチ

「バイオハザード」シリーズで今や最強の女って称号が似合うミラ・ジョヴォヴィッチさま主演のＳＦアクション。
またまたやってくれちゃっております。
やっぱりジョヴォヴィッチちゃんええなあ。
物語の舞台は近未来。
２１世紀末でございます。
地球上には謎のウイルスが蔓延しております。
このウイルス、ファージってえ名前のウイルスでございまして、このウイルスに感染してしまいましたらめっちゃ超人的な力と頭脳をもつことができます。
みんな感染したらええがなって話ですが、悲しいかな感染後の寿命が短くなってしまうわけですね。
しかしファージの持つ能力の高さに恐れを抱いた人間側は、ファージを根絶しようとして最終兵器を開発し実用化段階までこぎつけます。
一方のファージ側、その最終兵器を破壊しようとしておりまして、完全無欠の戦闘員を政府ビルに潜入させてその兵器を奪おうとするわけですな。
「兵器」運搬の指令を受けた者になりすまして兵器を奪取したのは、めっちゃ美人のねえちゃんヴァイオレット＝ジョヴォヴィッチさま。
ええがなええがな。
ヴァイオレットの装備がこれまたいけてまして、重力を制御して天井やビルの側面を歩き回れる装置だとか、異空間とつながっていて、何もない空間から武器を取り出したりする装置（まあ「四次元ポケット」みたいなイメージでしょうか）だとか。
ジョヴォヴィッチちゃん、運搬の途中で「ファージを壊滅させる最終武器」を見てあらびっくり。
人間側の最終兵器ってのは、幼い人間の少年だったのでした。
かくして「Ｘメンファイナルデシジョン」みたいに、ファージと人間との間で、この少年をめぐる駆け引きが繰り広げられることになりまして、ジョヴォヴィッチちゃんはその双方から少年を守って戦うことを強いられることになってしまうのでございました。
ジョヴォヴィッチちゃん、あいかわらずかわゆい。
今回は太もも露出はあまりありませんでしたが、意味もなくヘソだしスーツでおお暴れしてくださいます。
この衣装、ファンサービスなんでしょうか。

ちょっとサービスされた気分で、うれしかったです。
パパの採点。１００点満点中７０点。
武器の説明ではからずも「四次元ポケット」なんて書いてしまいましたが、この武器ってほんま「四次元ポケット」だし、もう一つの「重力を制御して天井とかも歩きまわれる装置」なんかも実は「どらえもん」であった道具ですよね。
原作者さん、どらえもん読んだんでしょうか。
っていうより、どらえもんツールが大真面目で近未来ＳＦの武器として登場する時代になったわけで。
ジャパニーズアニメ恐るべし。

# 亡国のイージス

２００５年「亡国のイージス」製作委員会作品
監督　阪本順治
主演　真田広之、中井貴一、佐藤浩市、寺尾　聰、勝地　涼

福井敏晴様の傑作小説の映画化でございます。
タイトルの「イージス」ってのは、作品の舞台になる最新鋭艦「イージス艦」のイージスと、劇中に登場する若い自衛官が書いた論文「亡国のイージス（盾って意味です）」のダブルミーニング。
映像化不可能っていわれていた巨編ですが、海上自衛隊の全面協力で迫力の映画化でございます。
自衛隊の最新鋭の防空システムを搭載した護衛艦イージス。
その艦にテロリストが潜入したとの情報が入ります。
犯人グループはどうやら北朝鮮の工作員らしい。
艦には演習の視察って名目で、えらいさん（中井貴一さまら）が大挙して乗り込んでおりました。
そんな中、艦長が何者かに殺害されます。
犯人と目される男・勝地さまは機関室に立てこもっております。
若手自衛官の教育係たる士官の真田さまは、勝地さまの説得のために単身機関室へ。
彼から聞かされた話は、実は中井さまらこそが北朝鮮の工作員で、彼らはイージスの指揮権を奪い、クーデターを企んでいるということでした。
勝地さまは突入してきた中井さまらグループに捕らえられます。
その直後に艦長代行の寺尾さまからの一部幹部乗員を残しての離船命令。
中井さま・寺尾さまの行動に不信感を抱き、勝地さまを信じた真田さまは、離船のためのボートから単身イージス艦に戻り、勝地さまと行動をともにします。
果たして彼らはクーデターを阻止することができるのでしょうか。
原作が非常によく書けている冒険推理小説ですので、映画のほうもとても面白く仕上がっております。
キャストも芸達者を揃え、なかなか重厚な作品に仕上がっております。
特にいい味をだしていたのが、自衛隊の諜報部門の主要スタッフを演じていた佐藤浩市さま。
この人、本当に巧いですね。どんな作品でもかなりの存在感を出しておられます。
寺尾さま・中井さまも素晴らしい。キャスティングの勝利ともいえる素晴らしい作品でございます。
パパの採点。１００点満点中９０点。
ここんとこ９０点超えの作品がなかなか出てこなかったので、ちょっとうれしいですね。
真田広之さまがアクション映画をやらなくなってかなり久しいような気がしますが、どうしてど

うして。
相変わらずの身体のキレでございます。
いざとなると普通以上にアクションができる役者さんですので、どんな系統の作品でも安心して見ることができます。
本当に今の日本映画を背負って立つ役者さんです。

# ボーン・スプレマシー

２００４年アメリカ映画
監督　ポール・グリーングラス
主演　マット・デイモン、ブライアン・コックス、ジョアン・アレン

記憶をなくした元ＣＩＡ工作員ジェイソン・ボーンの孤独な戦いを描いた「ボーン・アイデンティティ」の続編でございます。
相変わらず頑張っておりますマット・デイモンさま。
今回の作品は前作と比べますと主人公のボーン君、めっくちゃひどい目にあいます。
それでも頑張るジェイソン君です。
この作品でジェイソン・ボーン君のキャラクターがけっこう定まってきたように感じます。
でも申し訳ないですが、前作よりもひどい目にあっているのに、そのリベンジがけっこう人間性あったりして。
っていうか、自分の目の前にたちはだかる敵を、問答無用でやっつけるんじゃなくて、すごく慎重にいろいろな事を調べあげて味方なのか敵なのかを判断する丁寧な元殺し屋でございます。
前作のラストで完全に自分の存在を抹消して姿を消したジェイソン＝デイモンさま（っていうか、彼のめっちゃたくさんある名前のうちの一つがジェイソン・ボーンだったはずなんですが）。
彼はその後、名前を変えながら転々と各地を逃げ回っていたようです。
しかし何者かが彼を襲撃。彼の最愛の女性が命を落としてしまいます。
ジェイソンはＣＩＡの元上司を疑い、アメリカに戻ります。
そのころＣＩＡではけっこう大事件が起こっておりまして。
長年にわたる潜入捜査の末にやっとこぎつけたおとり取引。
しかしその現場を何者かに急襲され、張り込んでいた捜査員はみんな射殺されてしまいます。
現場に残されていたのはボーンの指紋。
ＣＩＡはその威信にかけてボーンを逮捕しようとします。
かくして、愛する者を殺した犯人を捜そうとしてＣＩＡを探るジェイソンと、ＣＩＡと、そして謎の組織である犯人たちの三つ巴の戦いが繰り広げられることになります。
パパの採点。１００点満点中８５点。
マット・デイモンさまがめっちゃくちゃいいです。
デイモンさまって最近すっごく勢いを感じますね。このまま頑張っていただきたいと思います。

# ポワゾン

２００１年アメリカ映画
監督　マイケル・クリストファー
主演　アントニオ・バンデラス、アンジェリーナ・ジョリー

アントニオ・バンデラスさまとアンジェリーナ・ジョリーさまの共演による、エロティックサスペンス。
っていいながらあんまりエロティックな場面なかったですが。
バンデラスさまは富豪でございます。
コーヒーの輸出で大金持ちになった男。
彼は金目当てで自分に近づく女に辟易しておりまして、普通の労働者であると偽って新聞の交際欄に投稿します。
で、ある平凡っぽい女性と結婚しようってことになりまして、彼女と会うことにするわけですが、彼の目の前に現れたのは文通のときに送られてきた写真の平凡な容姿の女性ではなく、めっちゃ美人でめっちゃ色っぽい女性でございました。
あららびっくり。
彼女は「自分の容姿や体に惹かれて近づいてくる男性は信用できない」みたいなことを言うわけでございますな。
そんな彼女のことがすっかり気に入って、彼女を妻として迎えるバンデラスさま。
ジョリーさま、けっこう贅沢三昧の暮らしっぷりでございます。
バンデラスさま、そんなジョリーさまにすっかりほれ込んでしまいまして、自分名義の財産を妻も使えるように手続きをしたりなんかして。
やがて二人の前に現れたのは、私立探偵。
文通相手と結婚するといってキューバに向かったっきり音信不通になってしまった妹を心配した姉が、無事を確認させるために派遣させたようでございます。
もうこのへんで「女」の正体に気がつけばいいのに、世間知らずのバンデラスさま、予想通りに全財産をジョリーさまに持ち逃げされてしまいます。
で、彼は「元妻」を探すことになるわけですが…
アントニオ・バンデラスさま、けっこう巧いですね。
こういうええ感じでダメダメな男をやらせても上手くまとめあげる力のある役者さんなんだってわかりました。
アクションとかワイルドな男をやらせたらええ感じってイメージしかなかったので、ちょっとびっくりしてしまいました。
アクションなしのアンジェリーナ・ジョリーさまもこのとき初めて見たような気がします。
こっちはまあそれなり。雰囲気だけで役を作っちゃったような印象が残りました。
パパの採点。１００点満点中７０点。

悪くはない作品でしたが、ちょっと先が読めてしまいましたね。
もう少し破滅的でなおかつ奇想天外なクライマックスを期待しましたが、案外普通っぽいラストでございました。
ちょいと結末に難ありでしたね。バンデラスさまとジョリーさまの騙し騙されのどんでん返しの連発を期待したのですが。

# トリック２

２００６年東宝・テレビ朝日作品
監督　堤　幸彦
主演　仲間由紀恵、阿部　寛、生瀬勝久、片平なぎさ、野際陽子

仲間さま演ずる売れないマジシャンと阿部さま演ずる物理学者が、超常現象に挑むテレビシリーズ映画版の第二作。
今回の敵役は、「二時間ドラマの女王」片平なぎささまでございます。
物理学者の阿部さまは、ある島で暮らしている青年（平岡祐太さま）から依頼を受けます。
行方不明になった幼なじみの捜索。
どうやら少女は、超能力で島を支配してる自称霊能者・片平さまに連れ去られたらしいのです。
阿部さまは例によってマジシャン・仲間さまを連れて島に向かうわけですな。
そこで仲間さまと片平さまの対決となるわけでございます。
相変わらず画面のあちこちでいろいろと遊んでくれております堤監督。
今回は片平さまが手袋をはずす描写で、「スチュワーデス物語」で片平さま自身が演じた役のパロディが出てきたり、お笑いの「ゆうとぴあ」が出てきたり。
若い人って、「スチュワーデス物語」ネタとか「ゆうとぴあ」ネタとかわかるのでしょうか。
ちょっと心配になったりしました。
肝心のトリックはちょっとショボかったです。
テレビシリーズとか映画版の第一作のほうがスケールが大きくて好きでした。
あまり凝ったトリックとかはなしで、どちらかというと登場人物の人間関係をやや複雑にして、そっちの謎解きっていうかタネ明かしみたいなあたりで仕掛けの弱さをカバーしたというか、ドラマを引っぱったというか、そういう印象を受けてしまいました。
パパの採点。１００点満点中６５点。
野際陽子さまとか、生瀬勝久さまとかがほとんどドラマの本筋にからんでこなかったのも気になりましたね。
スケジュール合わなかったのでしょうか。
阿部　寛さまがめっちゃいい味だしておられます。
この人、シリアスもコミカルもこなせる、すごく良い役者さんですよね。
コミカルな演技のほうが個人的には好きなんですが。

# ＧＯＮＩＮ

１９９５年ぶんか社作品
監督　石井　隆
主演　佐藤浩市、本木雅弘、根津甚八、椎名桔平、竹中直人、ビートたけし
石井監督のえらいバイオレンスな作品でございます。
レンタルＤＶＤとかは確かＲ指定かＰＧ１５指定がかかっていたと思います。
めっちゃえげつない印象だけが残っております。
借金・リストラ・エトセトラ。
いろいろな事情で世間からはみだしてしまった五人の男たち。
彼らは佐藤をリーダーとしまして、暴力団の金を強奪する計画を立て、作戦は見事に成功、大金を手にします。
しかし、もちろんそんなことをしてお咎めなしってわけにはいかないわけでございまして、五人は組の「始末屋」に命を狙われることになってしまいます。
果たして何人が逃げ切れるのでございましょうか。
めちゃくちゃダークな気分になってしまう場面がかなりありましてですね、場面にしたら全部で３シーンくらいなんですが。
その３シーンのおかげでめっちゃダークで「おえっ」とくる作品って印象が消えません。
バイオレンス映画ですから、「おえっ」とくる演出を見て暗い気持ちになるのはある意味正解でございます。
そういう意味ではとんでもない作品なのかもしれませんが、演出があまりにも強烈すぎまして、二回三回とは見ようと思わない作品でございます。
パパの採点。１００点満点中８０点。
本木様がとにかくいいですね。
この作品のあたりで「若手演技派」ってイメージが定着しました。
あとのメンバーはねえ。うん。
ちょっと濃いですが文句なしの演技派揃いですので、作品そのものはとても安心してみていられます。
特に強烈なのはたけしさまでしょうか。
もう画面に立っているだけで危なくて怖いです。
すごくいい役者さんですよね。監督としても世界レベルだし。この才能、うらやましいなあって思います。

# 陰陽師

２００１年「陰陽師」製作委員会作品
監督　滝田洋二郎
主演　野村萬斎、伊藤英明、今井絵里子、小泉今日子、真田広之

夢枕　獏さまの大人気小説の映画化。
主人公の安倍晴明を演ずるのは、満を持して登場の野村萬斎さまでございます。
時は平安期。
朝廷の様々な意思決定をサポートする陰陽師（って解釈でいいのでしょうか。陰陽師の説明するだけでけっこうスペース使いそうです）。
様々な術を使い、太陽や月、星などの自然の動きから事の吉凶を判断する男たちでございます。
主人公の晴明＝野村さまはこの陰陽師。
あるとき、この陰陽師の一人＝真田さまが反乱をおかすわけですな。
平安の世を滅ぼす勢いの大反乱でございます。
果たして晴明はこの反乱を止めることができるのでしょうか。
「陰陽師」は映画化に先だちまして、ＮＨＫでドラマ化されております。
そのときの主演は稲垣吾郎さま。
稲垣クンのイメージがちょいと強かったせいか、映画前半は野村萬斎さま独特のアクのようなものが気になりましたが、後半は素晴らしいＳＦＸにすっかり引き込まれてしまいました。
パパの採点。１００点満点中７５点。
思っていたより面白かったです。
野村萬斎さまも伊藤英明さまも想像していたより役柄とあっておりました。
何より真田広之さまの存在感が素晴らしかったです。
クライマックスのアクションシーンも「さすが元トップアクションスター」って思うようなノリ。
いつ見てもかっこええですな、真田さまって。
腹たちますが、しゃあない。

# 陰陽師Ⅱ

２００３年「陰陽師Ⅱ」製作委員会作品
監督　滝田洋二郎
主演　野村萬斎、伊藤英明、今井絵里子、深田恭子、中井貴一、市原隼人

野村萬斎さま主演によります「陰陽師」シリーズの第二弾。
映画版も二作目になりましたら、ほとんどテレビドラマ版のイメージがとれてまいりまして、独自の世界が定着してきたような感じです。
今回の悪役は中井貴一さまでございます。
ただ、今回は前作の真田さまのように自らが悪霊っぽく変身して戦うのではなく、平安の世に「鬼」を復活させようと企てる男でございます。
んだもんで、クライマックスは陰陽師＝晴明＝野村さまが秘術の限りを尽くして「鬼の復活」を阻止することになります。
けっこう古事記あたりの神話世界がモチーフになっておりまして、スケールが大きくなって楽しめたように思います。
コラムを書いておりましてここにきて気づいたんですが、映画版の「陰陽師」ってなんか違和感あるなって思っていたのは、晴明と源の年齢関係だってことに気づきました。
ドラマのほうはね、晴明が稲垣さまで源が杉本哲太さまだったんです。
この二人は明らかに杉本さんのほうが年上で、原作もそんなイメージだったんですわ。
若いのに妙に全てをわかったようなのが安倍晴明のイメージでございまして。
今回は晴明が野村さまで源が伊藤英明さま。
源のほうが若いイメージでございまして。
そのへんの年齢設定がイメージと違ったんでちょっと入り込みにくかったのかなあって、今頃気づいたりしました。
パパの採点。１００点満点中７５点。
市原隼人さま、この作品に出演しておられたのですね。
けっこう大事な役どころでございまして、見ていてびっくりしてしまいました。
あと、前作「陰陽師」の真田さまのときも感じましたが、真田さまとか中井さまとか、演技がしっかりした大物役者さんが悪役をすると、画面が本当に締まった感じがします。
「どろろ」なんかもすごく重厚な印象が残ったのも、悪役の中井さまの功績が大きかったかもしれません。
この「陰陽師」シリーズでの悪役組、真田さまと中井さまは、さきごろご紹介しました「亡国のイージス」で競演しておられました。
そういえばドラマ版で悪役を演じておられた寺尾　聰さまも「イージス」に出演しておられましたね。
だからどうしたって話ですが、そういう意味では「陰陽師」ってすごく渋い役者さんを起用して

いたことになりますね。

# ダヴィンチ・コード

２００６年アメリカ映画
監督　ロン・ハワード
主演　トム・ハンクス、オドレイ・トトゥ、ジャン・レノ、イアン・マッケラン

誰もが知っている名画に秘められたダ・ヴィンチの暗号。
全世界でベストセラーとなった小説を、「バックドラフト」のロン・ハワード監督が描きます。
主人公のハンクスさまは、「先人の智恵」としての暗号の解読を専門の研究分野とする大学教授でございます。
講演会でフランスを訪れていた彼は、ルーブル美術館の館長と会う約束をしておりましたが、館長は彼と会う直前に何者かに殺されてしまいます。
館長はダ・ヴィンチの絵の形で亡くなっております。
警察は館長と会う約束をしていたハンクスさまを疑います。
そこに現れたのは美術館の調査員で、館長の孫娘のトトゥさま。
館長が殺された理由はダ・ヴィンチが暗号として残した「キリストの秘密」にあることを知り、その謎を解明し、ハンクスさまの潔白を証明するために二人は警察の手から逃げることになります。
一方、館長を殺した謎の集団ってのもおりまして、二人はその集団と警察、両方の手から逃げながら、ダ・ヴィンチのややこしい秘密を解き明かさねばならないってことになります。
ハンクスさまが頼ったのは、かつて大学で議論を戦わせたダ・ヴィンチ研究の大家・マッケランさま。
果たして彼らはその壮大な暗号を解き明かすことができるのでしょうか。
見ていてなんか頭が痛くなるほどの情報の嵐。
そんな中で適切に必要な情報だけをとりだすことができるハンクスさま・マッケランさまコンビってけっこうすごい。
そもそも暗号ってどうやって解読するんか全然わからへんやんかって話ですが。
私はですねえ、「解かれることを前提としている」、パズル雑誌の暗号でもひいひいいいながら、それでも解けたり解けなかったりでございます。
どうやら私は暗号解読には向いてないようで。
パパの採点。１００点満点中８０点。
イアン・マッケランさまがやたらいいですね。
やっぱりこの人巧いです。
「Ｘメン」ではへんてこな兜をかぶって「ちょっと変なじいちゃん」ってイメージだったのですが。
シェイクスピア役者の面目躍如ってところでしょうか。

# 父親たちの星条旗

２００６年アメリカ映画
監督　クリント・イーストウッド
主演　ライアン・フィリップ、アダム・ビーチ

太平洋戦争の勝敗を決めたといわれるほど影響力のあった一枚の写真。
それが太平洋戦争の硫黄島（厳密には硫黄島上陸のための要衝・擂り鉢山）に星条旗を掲げる米兵たちの写真でございます。
映画はその写真が撮られた瞬間を軸にしまして、写真が撮られるまで・写真が撮られてから硫黄島占領まで・硫黄島占領から終戦まで・そして戦後を、写真に撮られた人物を中心に時間を巧みに前後させながら描きます。
これが時系列に沿っての描写だとここまで見ごたえのある作品にはならなかっただろうし、特定の登場人物に的を絞りすぎても面白くならなかっただろうと思います。
旗を掲げた六人の兵士のうち、硫黄島から生還した三人の兵士の「硫黄島以降」と「戦後」を、つかず離れずの視点で描いたところが勝因だろうと思います。
太平洋に浮かぶ火山島・硫黄島。
フィリップさまやビーチさまらの部隊はこの島の攻撃部隊に配属されます。
島での戦いは実に熾烈。
多大な犠牲を払いながらも彼らは島上陸の最重要拠点、擂り鉢山を制圧します。
フィリップさま、ビーチさまらは山の頂上に星条旗を掲げる役目を命じられ、その姿が写真に収められます。
しかしその写真が撮られた裏には様々な事情があったわけですな。
やがて彼らは戦地から離れ、硫黄島制圧のシンボル・戦争の英雄としてまつりあげられ、国民たちの戦意高揚と戦争国債の販売のために各地を行脚することになります。
「自分たちは英雄なんかじゃない、本当の英雄は島で死んだ戦友たちだ」そういう思いでアメリカ国内を回る「英雄」たち。
やがてその集金行脚に耐え切れなくなり、戦地に戻る者がでてきて、そして終戦を迎え、そして彼らそれぞれの「戦後」がはじまることになり…
イーストウッド監督は硫黄島の戦闘を冷静に描きます。
一貫してアメリカ側の視点から描かれてはおりますが、日本人として不快な描かれかたをしているわけではなかったです。
日本兵はただ単に敵で、殺されるためだけに存在するのではなく、死ぬときには苦しみ、母の名前を呼びながら死ぬという描き方。
その真摯な姿勢がこの作品に深みを与えてくれております。
パパの採点。１００点満点中９０点。
兵士たちは国のために戦ったのではなく、友のために戦ったのだという作品の主題なんですが、

ちょっと最後にとってつけたような印象がありました。
ちょっとだけ残念。
最後のメッセージだけは余計だったかもしれませんね。

# ００７カジノロワイヤル

２００６年アメリカ映画
監督　マーティン・キャンベル
主演　ダニエル・クレイグ

００７シリーズ、この作品でピアース・ブロスナンさまに続いての六代目ジェームズ・ボンド、ダニエル・クレイグさまが登場でございます。
本作はジェームズ・ボンドが「００７」となる前後のエピソード。
若き日のジェームズ・ボンドのエピソードってところでしょうか。
その割には上司「Ｍ」が女性ですが。
まあこのへんの話はあまり厳密な整合性はとらせようとはしていないんでしょうなあ。
そもそもジェームズ・ボンドもＭも代替わりしながら働いているってことにしようとしておられるのではないでしょうか。
今回の敵役はル・シッフルという男。
世界中のワルから金を預かり、兵器企業とかに株式の形で出資して配当金をワルに戻す、みたいなおっさんでございます。
我らがボンドさん、ある武器商人を追っておりまして、そこからシッフルにたどりつきます。
若きボンドさん、もうめちゃくちゃな手を使って（例えば上司「Ｍ」の自宅に忍び込み、彼女のパソコンから諜報部のメインコンピューターにアクセスして情報をとるとか…）調査を進めるわけでございますわな。
ボンドさん、シッフルが計画していた飛行機爆破（飛行機を爆破して株価を暴落させ、株の価格変動で儲けようとしていたわけですな）を未然に防ぎます。
シッフルは儲け損なってしまいまして、ワルから狙われることになります。
起死回生をはかったシッフル、賭け賭博で株での損失を取り返そうとします。
彼を失脚させて逮捕しようとしてるイギリスの警察（だったか国防省だったかスコットランドヤードだったか…）とボンドが手を組みまして、シッフルに賭け賭博で挑むわけでございます。
果たして勝負の行方は…
中盤はひたすら賭けトランプの勝負。
００７じゃなかったら面白いって思ったかもしれませんが、カード賭博での勝負を延々と描かれても、イマイチ「今度の００７は面白いぜえ」って思えません。
ちょっと設定が悪かったですね。
ダニエル・クレイグさまかわいそう。
もう少しカードの場面を短くしたほうがよかったんじゃないかと思いました。
パパの採点。１００点満点中６０点。
この「カジノロワイヤル」は一度、ジョン・ヒューストンさまら四人の監督の手で映画化されております。

前の作品はスパイコメディ映画でしたが。
そもそも００７シリーズのほとんどの映画化権をもっていた人が、たった一作だけ映画化権を手に入れることができなかったのが「カジノロワイヤル」でございまして、シリーズ２１作目にしてようやく映画化でございます。
でもフレミング原作は今の時代の００７には向かないのかもしれませんね。

# アンフェア・ザ・ムービー

２００７年東宝作品
監督　小林義則
主演　篠原涼子、椎名桔平、成宮寛貴、江口洋介、阿部サダヲ、濱田マリ、加藤雅也、寺島 進

そもそもは泰健日子さま原作の「推理小説」のテレビドラマ化、だったんですが、いつのまにかドラマキャラクターが独り歩きをはじめたパターンでございます。
２００６年に放送された「アンフェア」。
ドラマでは三つの事件が起こるのですが、最初の一つの事件だけが原作もの。
二つ目以降の事件と、その後製作されたスペシャルドラマ「アンフェア　コードブレーキング」と、北乃きいさま主演のスピンオフドラマ「アンフェア　ダブル・ミーニング～二重定義」「アンフェア　ダブル・ミーニング～ＹＥＳ　ＯＲ　ＮＯ」、さらに本作と映画化第二弾の「アンフェア　ＴＨＥ　ＡＮＳＷＥＲ」はオリジナルストーリーでございます。
篠原さまが演ずる刑事、雪平夏見は、バツイチ子持ちの刑事。
のんだくれでだらしなくて、身の回りのこととかあまり気にしない系のキャラです。
連続テレビドラマ版ではどっちかっていうと普通の刑事ドラマだったのですが、スペシャルドラマ「コードブレイキング」あたりから、「警察権力内部の不正を暴く」ってことがテーマになっていきまして、作品世界そのものがより重くなっちゃいました。
映画はスペシャルドラマ「コードブレイキング」の続きになります。
雪平＝篠原さまは、スペシャルドラマでかかわった「警察の上層部の不正に関する」事件の情報を追っております。
そんな彼女の命が狙われます。車に爆弾が仕掛けられたわけですな。
彼女の家の家政婦が死に、娘も怪我をして警察病院に運ばれます。
で、その病院が椎名さまをリーダーとするテロリストたちに占拠されてしまいます。
統率されたその行動はどこか軍隊っぽさを感じさせます。
ほとんどの来院者＝人質はすぐに開放されますが、テロリストたちは警察庁長官を人質に残し、警察上層部の一部の人間たちが不正に流用してため込んでいた裏金を身代金として要求します。
篠原さまは警察公安部の江口さまとともに病院に潜入、娘を救出しようとしますが…
人気ドラマの映画版だけに、かなり面白いです。
「アンフェア」って、シリーズとしての続きをあまり考えていないような「えええぇぇぇぇぇぇっ」的な展開があちこちにあって、楽しめます。
ただ、今回は「ひょっとしたらこうなんちゃうかな」って思っていた範囲を越えない意外性。
映画版第二弾のクライマックスにはびっくりしましたが。
ドラマシリーズ、スペシャルドラマ、映画第二弾もあわせてお楽しみいただきたい作品です。
パパの採点。１００点満点中８０点。
映画を見た当時はもう少し高評価だったのですが、映画版第二弾を見たあとでは少し採点が厳し

くなります。
これはしかたないところですかね。

# ソウ

２００４年アメリカ映画
監督　ジャームス・ワン
主演　リー・ワネル、ケアリー・エルウィス、ダニー・グローヴァー

悶絶ソリッドシチュエーションホラーシリーズ、「ソウ」の第一弾。
この作品の大成功によって監督ジェームス・ワンさまと脚本リー・ワネルさまは人気ホラー作家の仲間いりを果たしました。
はっきりいってすごい作品。
かなりグロい作品なので、そのグロい部分のイメージだけが先行して「グロホラー映画」みたいな語られかたをしがちではありますが、実はかなりよくできたサスペンスホラーでございます。
「ジグソウ」って名前の猟奇殺人鬼がおります。うむむ。殺人鬼ってカテゴリーに入れていいのだろうか。
この男、自分自身の正義に照らせ合わせてみて、「あかん」って判断した奴を捕まえて、その人にゲームを仕掛けるって奴です。
自殺未遂常習者とか、麻薬中毒者とか、放火犯とか。
ゲームの内容って、けっこう痛い。
部屋じゅうにワイヤーが張ってある部屋(ワイヤーに触れずに部屋から出ることなどまず不可能なくらいワイヤーが張っております)から、身体を切りながら脱出しなさいっていわれる自殺未遂常習者。
麻薬常習者は、寝ているのか死んでいるのかわからない、とにかくうごかないおっさんの胃袋にある鍵をとりだして、頭にはめられた装置を外さないと、装置が作動して顔面が切断されちゃうとか。
痛い。とにかく痛い。
で、メインとなるゲームが始まると。
物語のメインとなるゲームのプレイヤーは医者・エルウィスさまとカメラマン。
カメラマンを演ずるのは脚本をてがけたリー・ワネルさまです。
カメラマンっていってもパパラッチみたいな、スキャンダル写真を撮る系の人。
昏睡状態から二人が目覚めたら、汚い狭い部屋。二人とも壁に鎖でつながれています。
部屋の中央には、ピストル自殺したであろう死体。部屋には一発の弾丸、カセットテープ、テープレコーダー、あと、二本のノコギリ。
「ジグソウ」は時間までに相手を殺さないと死ぬことになる、みたいなメッセージを伝えてくるわけですな。
二人は「ジグソウ」の残した手がかりをもとに脱出を試みますが…
この二人とは別に、警官のグローヴァーさまはジグソウを追っております。
監禁された二人と警官グローヴァーさまが並行して描かれるわけですな。

ほんま、途中まで普通の、「ただグロいだけの残酷系映画」だったわけですが、クライマックス５分で「たぶんほったらかしにされて終わるだろうな」って思わされていた、張りめぐらされた全ての伏線の理由と全ての謎が明かされます。
この展開、ほんまにびっくりしました。
だもんで、こういう系の作品が苦手な方…
見始めちゃったらあきらめて、クライマックスまでご覧くだされ。
そこには驚愕の結末が待っています。
パパの採点。１００点満点中９５点。
うん。こういう作品に出会いたかったんだな、私は。
ラスト５分の快感をまた感じようと、私はこのあと、シリーズを見続けることになります。
ちなみに「ソウ」。のこぎりの「ソウ」、ジグソウの「ソウ」、そして一番意味があるのが動詞「見る」の過去形の「ソウ」。
そう、あなたは犯人を「見て」います。
傑作でございます。

# ザ・センチネル／陰謀の星条旗

２００６年アメリカ映画
監督　クラーク・ジョンソン
主演　マイケル・ダグラス、キーファー・サザーランド、キム・ベイシンガー

シリーズ「24」の大成功で今や大物のキーファー・サザーランドさま。この人って「24」以外では見ないよね、ってみんなが思っていたそんな時期に製作された作品。
主演はマイケル・ダグラスさまでございます。
ダグラスさまは腕利きのシークレットサービス。かつて大統領の命を、身を楯にして守ったという、伝説のシークレットサービスでございます。
だけど、大統領夫人ベイシンガーさまとできちゃってるっていう、最悪のシークレットサービスでもございます。
ダグラスさまの「後輩っぽい同僚」がサザーランドさま。
ある日、二人の同僚刑事が何者かによって殺され、サザーランドさまが捜査の指揮をとることになります。
ダグラスさまは大統領暗殺計画が進行している情報を入手。さらにその計画にシークレットサービスの人間が加担していることをつかみます。
当然、シークレットサービス内部では裏切り者を探しはじめますが、時を同じくしてダグラスさまのもとに、大統領夫人との密会の証拠写真が送りつけられてくるわけですな。
ダグラスさま、焦って単独で脅迫者と取引をしようとしますが、その行動がもとで内通者だと思われちゃうわけですな。
そんな中、大統領専用機が撃墜されます。大統領は乗っていなかったため無事でしたが、この件が決定的となり、ダグラスさまは裏切り者として追われることになってしまいます。
ダグラスさまを追うのはやっぱりサザーランドさま。
まんま「24」のジャックのノリで、いけないシークレットサービスを追い詰めていきます。
果たしてダグラスさまは真実にたどりつけるのでしょうか。
サザーランドさま、ほんまほとんどジャック・バウアーで笑ってしまいました。
かわいそうですが、イメージ固定しちゃいましたよね。
パパの採点。１００点満点中７０点。
大統領夫人に手をだした、女癖の悪いシークレットサービスが主人公なんて、ありえないですよね。
はっきりいって全然ダグラスさまに肩入れできなかったです。
残念ですな。
考えてみたらダグラスさま、サザーランドさまともに二世俳優さんで、ともにテレビドラマで人気を決定づけた人。
どちらもプロデューサーとしても手腕を発揮されておられます。

何かと共通点の多い二人でございます。

# 硫黄島からの手紙

２００６年アメリカ映画
監督　クリント・イーストウッド
主演　渡辺　謙、二宮和也、伊原剛志、加瀬　亮、中村獅童

クリント・イーストウッド監督による、戦争映画の傑作にして名作。
これまでも太平洋戦争を扱った映画って、けっこうあったと思いますが、どっちかっていうと、当事者一方に偏った作品が多かったです。
もしくは、日本とアメリカ、両方を描こうとして結局どちらも描ききれてない感じになっちゃうとか。
で、イーストウッド監督は、同じ硫黄島決戦を、アメリカ側から描いた作品と日本側から描いた作品、二作つくっちゃったわけですね。
これによってどちらの作品にも作品的な深さと奥行きがでてきたように感じられます。
当初、イーストウッド監督は、日本人監督にメガホンをとってもらうつもりだったようです。
でも最終的にご自身で撮られたと。ただ、これは正解だったと思いますね。
傑作の誕生ってことになったわけですし。
太平洋戦争の末期です。本土決戦の前哨戦となる硫黄島攻略。
それに先立って派遣されてきた将校が渡辺さま。彼は英語も堪能。アメリカの情勢にも精通しており、この戦争は勝てないとわかっております。
彼と同様、彼の右腕ともいえる士官が伊原さま。彼も同じく、自分たちの役目は米軍に戦って勝つことではなく、時間稼ぎでしかないことを理解しております。
やがて米軍が近づいてきます。
渡辺さまは兵士たちに、家族にあてた手紙を書くように言います。
兵士たちはそれぞれに家族にあてた手紙をしたため、やがて硫黄島決戦が始まることになります。
渡辺さま、伊原さまはじめ、加瀬さま・中村さま・そしてもちろん二宮さま、本当に素晴らしい。
特にガチガチの軍国下士官を演じた中村獅童さま、元憲兵の加瀬さまが素晴らしいです。
この二人、文字通りそれぞれの生きかた、それぞれの判断で生死をわけることになるのですが、これまたそれぞれ秀逸な末路でございます。
名演とともに二人の最後をお確かめいただきたいと思います。
パパの採点。１００点満点中９０点。
嵐のメンバーの中で、リムジンに乗ったことがあるのって、二宮さまだけだって、なんかの番組で聞いたことがあります。
そらハリウッド映画の主演俳優ですもんね。
リムジンに乗ってレッドカーペットは当たり前やろ。

そういう意味では、メンバーそれぞれ同じように活躍しているようには見えるけど、二宮さまって別格になるんでしょうね。

# デスノート・ザ・ラスト・ネーム

２００６年「デスノート・フィルム・パートナーズ」作品
監督　金子修介
主演　藤原竜也、松山ケンイチ、戸田恵梨香、片瀬那奈、藤村俊二、鹿賀丈史

デスノートシリーズ前後編の後編にあたる作品。
前作クライマックスで登場した戸田恵梨香さまが重要な役で登場。
私、戸田さま萌えなんでうれしいキャスティングです。
前編のおさらい。
犯罪者を裁ききることのできない現在の法に失望した青年が藤原さま。彼は死神から「デスノート」という一冊のノートを譲り受けます。
それは名前を書きこまれた者は死んでしまうというノート。
で、彼は法で裁くことのできないワルを、デスノートの力で次々と葬っていきます。
彼を神として崇める人々がいる一方、警察はこの一連の事件を連続殺人と位置づけ、犯人逮捕に動きだします。
ここで登場するのが世界的な天才名探偵、松山さまでございまして。
彼は極めて早い段階で藤原が犯人ではないかと疑いますが、そこは藤原も天才。なかなか尻尾をださない。
ついに藤原は警察の重鎮である父の力を借り、捜査本部に加わります。
ここまでが前編。
後編ではもう一人の死神が登場、戸田さまにその人の寿命が見えるという死神の目を授けます。
仲間ができた藤原さま、天才松山さまを相手に壮絶なだましあいの頭脳戦。
「デスノートを手放す」「デスノートの所有者が変わる」「また所有者が戻る」
みたいな、複雑な作戦をたて、松山さまの追求をかわそうとするこれまた天才の藤原さま。
最後に勝利するのはどちらの天才でしょうか。
デスノートをとりまくルールが複雑になりすぎて、かなりついていくのが大変でした。
図かなにかにして、じっくり考えたらひょっとしたらデスノートのルールってどっかで破綻するかもですが。
ここは深く考えないで娯楽として楽しむのが一番なんでしょうね。
パパの採点。１００点満点中７５点。
途中ルールが複雑になりすぎたのと、え、そんな結末選びますか？って主人公の心理が納得できなかったのとでちょっと減点かな。
主題歌は前作に引き続きレッド・ホット・チリペッパーズ。
これまた話題になりました。

# ソウ２

２００５年アメリカ映画
監督　ダーレン・リン・バウズマン
主演　ドニー・ウォルバーグ、ディナ・メイヤー、トビン・ベル、ショウニー・スミス

悶絶ソリッドシチュエーションホラーの第二弾。
今回、前作監督のジェームズ・ワンさま、脚本のリー・ワネルさまともに製作総指揮におさまり、ダーレン・リン・バウズマン監督がメガホンをとっておられます。
しかしエグさは全然衰えておりません。
今回のゲームは、毒ガスが充満した屋敷に監禁された８人の男女がプレイヤーでございます。
この中には、かつてジグソウ＝ベルさまのゲームの参加者にされてしまい、奇跡的にもゲームから生還したスミスさまが含まれております。
屋敷の中の毒ガスは遅効性で、屋敷のどこかに解毒剤が隠されていると。その解毒剤入りの注射器を制限時間以内に手に入れなさいってゲームでございます。
一方、警察。ジグソウを追い続ける刑事、ウォルバーグさまとメイヤーさま。
彼らはジグソウの使った凶器から、彼のアジトを特定するわけですな。
ＳＷＡＴとともにジグソウのアジトを急襲。びっくりするくらい簡単にジグソウは捕まります。
しかし新しいゲームはここから。
ジグソウのアジトにはテレビモニターがセットされておりまして、そこには監禁された男女が写しだされておりまして。
その８人の男女の中に、刑事ウォルバーグさまの息子がいたわけでございます。
さらにさらに、息子を除く７人の男女は、ウォルバーグさまが証拠を捏造して起訴したりした前科者ばかりだったわけでございます。
さあ大変。
ここらでゲームの構造が明らかになってまいります。ゲームの本当のプレイヤーはウォルバーグさまだったっわけでございまして。
ウォルバーグさま、ジグソウを尋問して何とか屋敷の場所を聞き出そうとしますが、「自分と話をすることがゲームのルールだ」などと言うわけですな。
ウォルバーグさま、ブチギレ。で、結果的にジグソウを屋敷に案内させることになりますが…
ここいらまでがネタバレせずに書ける限界でしょうかね。
今回も驚愕のラストが待ち受けております。
パパの採点。１００点満点中８０点。
ソウシリーズってすげえなぁ、って思ったのが素直な感想。
やられた感は１のほうが上でしたが、それでもなかなか。
こちらの予想を裏をかく、秀逸な罠が仕掛けられておりました。
ええ感じの第二弾でございます。

# 阿修羅城の瞳

２００５年「阿修羅城の瞳」製作委員会作品
監督　滝田洋二郎
主演　市川染五郎、宮沢りえ、樋口可南子、沢尻エリカ、内藤剛志、渡部篤郎

大学時代に演劇しておりました。
そのころお気に入りだった劇団が、大阪芸大系の劇団、新感線。
当時は京大系のそとばこまち（辰巳琢郎さんとか生瀬勝久さん、山西惇さんとかがおられた劇団です）、芸大系の南河内万歳一座と並び、かなりの人気劇団でございました。
現在では突出した人気を博している新感線でございますね。
そんな新感線演劇をそのまま映画化した、ってムードの作品がこの「阿修羅城の瞳」でございます。
もちろんそもそもは舞台の作品。
江戸時代。鬼と人が共生していた時代の物語。幕府の鬼討伐隊のえらいさんが市川さま。
鬼討伐隊のえらいさんにして歌舞伎役者。
うんうん、こういうとこらへんがいかにも演劇が原作って感じでございますね。
このへんのとこはあとで書きますが。
で、市川さまは盗賊団の女、宮沢さまと出会うわけですな。
お約束のように二人の間には恋が芽生え、急接近していくわけですが、宮沢さま、実は鬼だった。
鬼っていっても今は完全な鬼ではない。鬼の強力な力を持ってるんだけど、まだ覚醒していない段階、といいますか。
鬼の王、阿修羅の生まれ変わりだったわけですな。
彼女を阿修羅王として覚醒させようとするのが鬼の樋口さまと、鬼と手を組んで世界を手に入れようとする渡部さま。
宮沢さまが覚醒するためには人間を愛さなければならないわけで、樋口さま渡部さまの策略で、市川さま宮沢さま、まんまと恋におちる。
んで、阿修羅王の覚醒となりまして。
市川さま、彼女を止めようと阿修羅城へと向かうことになります…
原作はもちろん、新感線の座付作家、中島かずきさま。
だからというわけではないでしょうが、演劇的なキャラ設定とか、演劇的な展開とかがけっこう目につきます。
ただ、映画の設定のリアリティと、演劇のリアリティって、けっこう違うところがありまして。
そこらあたりのところが、映画を見ていて感じた違和感でございます。
鬼討伐隊のえらいさんにして歌舞伎役者ってのは、演劇の世界では許されても、映画の世界ではちょっと許しづらい設定といいましょうか。

うん。
パパの採点。１００点満点中６５点。
ちょっと点数控えめです。
「阿修羅城の瞳」の神髄は舞台にあり、みたいな意見も当然あると思うんですが、じゃあみんな舞台見に行ったらいいわけだし、そうなると映画版は必要ないじゃん、って感じになるんではなかろうかと。
映画評論サイトに書いてる人がおられましたが、舞台を見てからこの作品を見たら、より楽しめるとか。
いやいや、それやったらこの作品いらんのちゃいますか、って話にしかならなくて。
ちょっとうまく書きにくいですが。
悪くはないんだけど、新感線の舞台、大好きなだけに、ちょっと残念な感じがする作品でございました。

# エイリアンＶＳプレデター

２００４年アメリカ映画
監督　ポール・Ｗ・Ｓ・アンダーソン
主演　サナ・レイサン、ラウル・ボヴァ、ランス・ヘリクセン

人気シリーズのエイリアン。んでもひとつ人気シリーズのプレデター。
こいつらを戦わせたらどうよ、みたいな、発想先行型の作品でございますな。
柳の下にドジョウは何匹いてるか知りませんが、「エイリアン７」とか「プレデター５」とかなら、「ん～まあ今は見なくていいか。今度時間あるときに見よう」とか思うんですが、「エイリアンＶＳプレデター」とかいわれると、とりあえず見たくなっちゃう。
癌に身体を冒され、余命わずかな大企業社長の大富豪がヘリクセンさま。
彼はかねてから自分の名前で歴史に残るような偉業を残したいって思っておられるわけでございまして。
自らのネットワークで世界中に、そういうチャンスが来ないかって感じで網をはっておりまして。
んで、南極の地下にエネルギー反応をキャッチするわけでございます。
未知の遺跡か何かの大発見やろって喜んで、探検チームを組織します。
これに招聘されたのが探検家のレイサンさまとか、考古学者のボヴァさまとか。
あと、念のための傭兵軍団なんかも同行します。
一同、南極に到着。居住者全員が謎の失踪をとげたってぇ放棄された捕鯨基地に、ありえへんくらいきれいなまん丸に掘削されたトンネルがありまして。
まあ一同の目的は探検ですから、迷わず降りていくわけですな。
よしゃあいいのにヘリクセンさまも降ります。
で、そこに古代文明といっても良い、遺跡があったわけでありますが、なんか様子が変。
実はそこは戦闘宇宙人、プレデターの訓練施設か何かで、プレデターと戦わせるために、かのエイリアンが飼育されていたわけですな。
飼育っていいましても、どこぞの一角にきちんと管理されているわけでもなく、まあエイリアンですから、そこらじゅう勝手に動き回るわけで。
プレデターのほうは戦闘宇宙人ですから、まあエイリアンを倒してなんぼ、みたいな感じで。
探検隊、お約束通り、一人またひとりとエイリアンの犠牲になっていきます。
で、絶妙なタイミングで登場するのがプレデター。
どうやらそのプレデターは若者みたい。
で、エイリアンを倒すことで一人前として認められる、みたいな感じ。
ひょんなことからプレデターとエイリアンの戦いに遭遇し、ひょんなことからエイリアンをやっつけちゃったレイサンさま、若者のプレデターに戦士として認められ、行動を共にすることになりますが…

パパの採点。１００点満点中８０点。
かなり強引に作った設定のわりにはけっこううまくまとまっております。
「問答無用の大バトル」がありながら、「戦闘宇宙人のトレーニングセンターの遺跡でその相手としてエイリアンを飼育している」って設定がまあそれなりの説得力を発揮しまして、さほど違和感を感じずに物語が進んでいきました。
たまたまエイリアンを退治しちゃった隊員が、戦士として認められて以後、プレデターと行動をともにするってくだりもさほど気にならなかったです。
この設定の説得力がこの作品の全てですもんね。
素直に「参りました」って感じですかね。

# フレディＶＳジェイソン

２００３年アメリカ映画
監督　ロニー・ユー
主演　ロバート・イングランド、ケン・カーシンガー、モニカ・キーナ、ジェイソン・リッター

人気シリーズのフレディ。んでもひとつ人気シリーズのジェイソン。
こいつらを戦わせたらどうよ、みたいな、発想先行型の作品でございますな。
柳の下にドジョウは何匹いてるか知りませんが、「エルム街の悪夢１３」とか「１３日の金曜日２４」とかなら、「ん～まあ今は見なくていいか。今度時間あるときに見よう」とか思うんですが、「フレディＶＳジェイソン」とかいわれると、とりあえず見とかなあかんかなって思っちゃう。
って、前ページの文章コピーしちゃいました。
昨日のエイリアンＶＳプレデターと比べると、作品的クオリティの差は歴然です。
まあしゃあないか。ホラーやし。
そもそもこの夢の顔合わせ、１３金の配給権をもっていたパラマウントがシリーズに見切りをつけてニューラインに権利を売却したってんで可能になった企画でございあます。
だもんで、パラマウント目線的には、商品寿命が終わったキャラクターが別のキャラクターとコラボすることでちょこっと話題になって、へえ、よかったやん、みたいな感じでしょうね。
えっと。エルム街事件の十年後。
って始まるけど、いつでもええやん、って感じですね。ま、なんせ十年後でございます。
エルム街ってそういう事件が起こった街ですから、自然と住んでる人たちって事件に関しては口が重くなります。
そうこうしているうちに、事件そのものを知っている人が少なくなっていきまして、今では街の若い世代はフレディのこととか知らない。
フレディくん、人々の悪夢とか恐怖の気持ちとかをエネルギーにしているらしく、このままではやばいと感じたフレディくんです。
で、彼は現実の世界の殺人鬼、ジェイソンくんを操って街の人々の恐怖心を煽り、そのパワーで復活しようと考えたわけですね。
しかしそこはジェイソンくんです。フレディくんの支配下におさまっているわけがない。
フレディの夢の制御を断ち切って、自由奔放に殺戮活動をはじめます。
だんだん力を取り戻していったフレディくん、街の住人を殺そうとしたらええ感じでジェイソンがその獲物をかっさらっていきます。
んで、フレディとジェイソンの戦いとなるわけでございます。
ん～。フレディとジェイソンの対決。
ホラーになるはずもなく、作品の雰囲気としてはセルフパロディのお笑い系ホラーになってしまっています。

作り手側もそういうつもりで作ってはるようで、「ありえねぇ」場面の連続。
ホラーと思っては見ないで、ちょっとグロいコメディ見る感覚でご覧いただけたらと思います。
パパの採点。１００点満点中６５点。
とはいえ、こっちは一応ホラーファンで、ホラーを期待して見に行ってるわけなんで、そういう意味では空振りの作品ですね。
フレディ役のロバート・イングランドさま、本作をもってフレディ役を降りました。
シリーズものの最終期にはよくこういうことが起こりますね。
自分が演じたいフレディはもう演ずることはできないって感じなんかなぁ。
気持ちわかる気がします。

# ソウ３

２００６年アメリカ映画
監督　ダーレン・リン・バウズマン
脚本　リー・ワネル
主演　トビン・ベル、ショウニー・スミス、アンガス・マクファーデン、バハー・スーメク

悶絶ソリッド・シチュエーション・ホラー、ソウシリーズの第三作。
この作品がいろんな意味でのシリーズ転換期となる作品。
まず、この作品でメインキャラとなるゲームの仕掛け人であるジグソウさん、お亡くなりになられます。
第一作からしてかなり重篤な病人さんでしたので、まあどこかでこうならなきゃあかんかったんですが。
で、物語のテーマは「誰がジグソウの後継者となるか」ってことにシフトしていきます。
ある日いきなり拉致され、その人が過酷なゲームのプレイヤーとなるって作品テーマは同じ…なのかなぁ。
どこまで書いていいのかどうかわからないですが、ここ以降、ゲームの質がちょっとずつ変わっていくわけなんですけど。
例によってジグソウによるゲームの被害者の遺体が発見され、大騒ぎになります。
ただ、捜査員たちはこの遺体に違和感を感じるわけでございますね。
ジグソウの出す、めっちゃ過酷なゲーム内容をクリアすると本当に助かるってのがジグソウのルールだったはずなのに、今回の被害者は助からなかったと。
実はこれが今回の作品の重要な伏線なんだってことなんですが。
さてさて。例によって見知らぬ部屋で目覚めた一人の男。
彼は交通事故で最愛の息子を失っています。
で、ジグソウのゲームが始まる。
彼の目の前には、息子が死んだあとの交通裁判で証言を拒否した人だとか加害者に有利な判決を下した判事だとか加害者本人とかがでてくるわけです。
もちろんジグソウの死の罠にがっつりつかまってはります。
彼はそんな人たちを許し、救うことができるのか。
一方、一人の女性外科医も同時に誘拐されております。
彼女は重傷の脳障害をかかえているジグソウを、ゲームのプレイヤーが到着するまで延命させるように指示されます。
そしてその結末は…
こんなとこでしょうか。
パパの採点。１００点満点中６０点。
シリーズの転換期の作品ゆえ、ちょいと評価低めです。

ラストのドンデン返しもかなりパワーダウン。
そのためか、残虐さだけが印象に残る作品になってしまったのが残念なところです。
作品途中で出てくる拷問マシーン、とんでもないできばえでございましたね。
ちょっとびっくりしました。

# 地下鉄（メトロ）に乗って

２００６年ギャガ・コミュニケーションズ・松竹作品
監督　篠原哲雄
主演　堤　真一、岡本　綾、大沢たかお、常磐貴子

浅田次郎先生の小説の映画化。
まあタイムスリップものだと思っていただけたらいいかと思います。
主人公の堤さまはサラリーマン。長い間、音信不通だった父が危篤だという知らせをうけます。
実は堤さまは若いころに兄を亡くしておりまして。そのことで父親との確執みたいなものがありまして、高校卒業と同時に家を出て、絶縁状態だったわけですね。
父のこと兄のことを考えながら地下鉄に乗りましたら。
ハイ、きた。タイムスリップ。
地下道から出た彼が降り立ったのは、昭和３９年の東京。それは兄が亡くなった日でありました。
ってところまで書くと、ははぁ、亡くなった兄を助けるストーリーなんやなって、ここで予想するわけですが、そうはいかない。
次に彼がタイムスリップしたのは終戦直後の闇市の世界。そこで出会ったのがアムールと名乗る男、大沢さまと、その恋人、常磐さま。
そればかりか、その時代にいるはずのない、現代での不倫中の恋人、岡本さままでいる。
え、どうなんのどうなんのって思っているうちに、兄が亡くなった事件はまるっきりのサイドストーリーに転落しちゃいまして、驚愕の事実＋衝撃の結末へと向かって物語が進んでいきます。
うむむ。重いです。
堤さまも大沢さまもめちゃくちゃ巧いから、それだけに重い。
ラストなんかめっちゃどんよりしてしまいました。
ただ、不倫によって壊れそうになっていた家族の絆が、この事件によって再生されることになったんだろうなって思わせるラストにはちょっとだけ救われました。
パパの採点。１００点満点中７５点。
あまりにもどんよりして、重い気持ちになる展開がちょっと苦手かな。
良い原作だし、良い映画だとは思うのですが、ちょっと苦手です。
後半の急展開の畳みかけっぷりが半端なくて、ついていくのに必死でした。
あ、タイムスリップものによくある、タイムパラドックス。この結末だといろんなところでパラドックス起こるような気がするけど。
ええんやろか。
っていうか、どちらかというと「バック・トゥ・ザ・フューチャー」みたいな感じで、元の世界に戻ると渓谷の名前が変わってたり、父親がかっこよくなってたり、つまりは歴史はパラドック

スが起こっても、本来の歴史に近い形に沿って進むんや、みたいな世界観で描かれているようですね。
ネタバレになっちゃうから詳しく書けないですが。
近々原作読んでみようと思っています。

# エビボクサー

２００２年イギリス映画
監督　マーク・ロック
主演　ケヴィン・マクナリー、ペリー・フィッツパトリック、ルイーズ・マーデンボロー

超Ｂ級、いや、下手したらＣ級いくかもしれない映画。
タイトルからしていかがわしいでしょ。エビボクサーやて。
どうせ海老がボクシングすんねんで。
その通り。それ以上でも以下でもない映画。
えっと。主人公はどっちかってぇと人生の負け組でございます。
負け組さんがようさん出てきはります。
で、主人公たち、敵を見つけたらパンチを出す習性のエビがいてることを知り、そのエビのでっかいやつを買い取ってボクサーに仕立て上げてプロボクサーと戦わせようと思いつきます。
で巨大エビを連れて地方をまわる。
で、ついにテレビ出演のチャンスを手に入れるわけですな。
ドサまわりのような巡業生活の中で、主人公はいつしかエビに共感するようになり、友情のようなものを感じはじめます。
でも相手はエビですからね。友情に応えるわけもなく。
ただ普通にエビしてはります。
で、クライマックスは主人公とエビのエキシビジョンマッチ。
しかしロッキーのような感動的な戦いとはならず、むしろグダグダの結末。
そらそやろ。
相手エビやもん。
哺乳類ならあるいは空気読むかもしれないし、爬虫類なら本能で闘うかもしれないけど。
相手はエビよ、エビ。
ほうほう。なるほどなるほど。で？
みたいな感じでした。
この作品をやたら高く評価しておられる人とかおられまして、その方の作品レビューとか読ませていただきましたが。
なんというか、負け組主人公たちのロードムービーとして見たら、すごくよくできていると。
そっか。アクションものとか特撮もの、で、コメディでもなく、ロードムービーとして見なきゃいけなかったのね。
勉強になるわ。
パパの採点。１００点満点中５０点。
私はというと、「起死回生を狙う負け組たちの哀愁ただようロードムービー」とは見られずに、「あんまり面白くない特撮アクションもどき映画」にしか見られませんでした。

かなり残念な作品でございました。

# 奪還　アルカトラズ

２００２年アメリカ映画
監督　ドン・マイケル・ポール
主演　スティーブン・セガール、モリス・チェスナット、ジャ・ルール

でましたスティーブン・セガールさま主演作品。
いつものような作品世界で、いつものような感じで、いつものような展開が待っております。
今回はセガールさまは自動車窃盗団のメンバー。
ん？　いきなりこれまでにない展開かも。
同じく窃盗団のジャ・ルールさまに近づくにあたり、嘘発見器にかかって「ＦＢＩ捜査官なんかじゃない」って信用させまして、信用させます。
これが本当にＦＢＩ捜査官じゃなかったら逆に新しいなって思いながら見てましたが。
やっぱりいつものパターンでした。ってことは、今はあえて書かないけど、やっぱりそうでございます。
盗難車の取引現場をＦＢＩが急襲。セガールさまはジャ・ルールさまをかばって撃たれます。
気がつくとそこは…　って「ソウ」のパターンを使ってしまいましたが、この映画の場合はそうはならない。
気がつくとそこは、ハイテク警備の新装アルカトラズ刑務所でございました。
ジャ・ルールさまと相棒になってまで尻尾をつかみたかったはずの「自動車窃盗団のボス」を逮捕する話はどっかにすっとんでしまって、いきなり新しい展開。
刑務所にいてる、死刑間近の囚人。
彼は大量の金塊を盗んでどこかに隠しているわけなんですが、その場所をどうしても白状しないわけですね。
で、そこに乗り込んできたのは、その金塊を狙ってやってきた武装ギャング集団です。
セガールさま、ジャ・ルールさまとともに、武装集団と闘うこととなるわけでありました。
うん、めっちゃいつものパターンやわ。
作品後半で、お約束の、「実は俺はＦＢＩの潜入捜査員なんだ」的なカミングアウトがあります。
カミングアウトされたジャ・ルールさま、あ、そう、みたいな感じ。
嘘発見器まで使って調べた彼の努力は無駄だったってことですね。
不憫やわ。
パパの採点。１００点満点中７０点。
セガールさまものの割りにはアクション控えめでございます。
「ＤＥＮＧＥＫＩ」あたりからでしょうか、ラップとかのブラックミュージック界のスターをダブル主演みたいな形に据えて、当然ＢＧＭはノリノリラップ、みたいな作品。
ジェット・リー作品でもありましたが。

んまぁそんな感じの作品ですわな。
若干の「またかいな」感は否めないですが、まあしゃあないか。「いつもの感じ」のほうが安心して見てられるし。

# インファナルアフェア　無間序曲

２００３年香港映画
監督　アンドリュー・ラウ、アラン・マック
主演　アンソニー・ウォン、エリック・ツァン、エディソン・チャン

ハリウッドで「ディパーテッド」としてリメイクされた香港映画の傑作、「インファナル・アフェア」。
その続編でございます。
ただし、描かれるのは第一作以後の物語ではなく、それ以前のエピソード。
エピソード０型の続編でございます。
警察に潜入したマフィアの手先・エディソン・チャンさま(アンディ・ラウさま＝マット・デイモンさまの方)と、マフィアに潜入した警察官、ショーン・ユーさま(トニー・レオンさま＝ディカプリオさまのほう)。
前作でワワワって描かれた、「こうなっちゃった経緯」が細かに描かれます。
エディソン･チャンさまと組織のボス、ショーン・ユーさまと警察の警部とのああだこうだもけっこうちゃんと描かれております。
まずマフィア側からの物語。
香港返還を間近に控えたころ、香港マフィアの大ボスが殺されます。
これによってマフィアたちの勢力がかわりそうになります。
四人の大ボスがいてはりまして、それに次ぐ第五人目のボスが「インファナル・アフェア」でボスだったエリック・ツァンさま。
四人のボスはそれぞれに新しいボスとして抜き出ようと思っていたわけですが、殺されたボスの息子がちょっと策略家でありまして、四人のボスそれぞれの弱みを握り、彼ら全員を配下に取り込むことに成功します。
実は暗殺犯はエディソン・チャンさまでして、彼はボスであるエリック・ツァンさまの妻に惚れております。
暗殺の指示はその妻からのものだったわけですな。
で、エディソン・チャンさまは警察に潜入。やがて彼のもたらす情報をもとに、エリック・ツァンさまは組織内部で頭角を現していくことになると、こういう構図でございます。
一方の警察側からの物語。
大ボスの暗殺によって香港マフィアの抗争が激化すると睨んだ警察。
警察側の人間を組織に潜入させようと計画します。
そんな折、一人のエリート警察志望者が警察学校を退学させられてしまう。その男がショーン・ユーさま。
彼はなんと、殺された大ボスの息子でございまして、新ボスの兄弟だったわけですな。
彼という存在を知った警部は、彼を潜入捜査員に抜擢。

ユーさまは刑務所でエリック・ツァンさまの組織の者に近づくことに成功し、ツァンさまの組織に潜入します。
で、警部は警部で、警察内部で順調に出世していくわけでございます。
ここからけっこう話が込み入ってきて、殺された息子の父を殺した犯人探しだとか、マフィア組織内部の権力闘争だとかが激化していくわけでございます。
パパの採点。１００点満点中６５点。
「インファナル・アフェア」の完成度にはちょっと至らなかった、っていうか、全然届いてないですね。
続編だからしかたないかもですが。
面白くするためでしょうが、物語をややこしくしちゃった無理やり感がかなり残りました。
ちょっと残念やなぁ。

# みんなのいえ

２００１年東宝作品
監督　三谷幸喜
主演　唐沢寿明、田中邦衛、田中直樹、八木亜希子

三谷幸喜さま監督・脚本の傑作コメディ作品です。
なんでもご自身のお宅を建築するときにあった、ああだこうだを元にして作品をしあげたってことです。
この作品とか、その前の「ラヂオの時間」とかは三谷作品の中でもとにかく評価が高いですね。
最近のものも面白いんだけど。ちょっと面白さの質が変わってきたような気がします。
主人公は田中直樹さま演ずるシナリオライター。
彼は念願だったマイホームを建てることになります。
で、洒落た家にしたいってことで、田中直樹さまの妻、八木さまの大学の後輩にあたる、新進気鋭の建築デザイナーに設計を依頼します。
このデザイナーが唐沢さま。
で、施工は八木さまの父で大工の田中邦衛さまに依頼します。
うん。この時点ですでにやばいです。
こういう身内つながりで事を決めていったらろくなことがない。
普通は建築デザイナーさんから施工業者を紹介してもらったり、身内つながりとかで施工が先に決まったんならその大工さん経由で設計士さん紹介してもらったりやろけど。
案の定、設計と施工でもめます。
そらそうやろ。
一時期、商業施設の設計施工にたずさわってたことがあるんやけど。
天下の〇林組さんに設計・施工をお願いしたのね。同じ〇林組さんの中でも設計と施工でもめてはったくらいやから。
なんて個人的経験をもちだすまでもなく、唐沢さまと田中邦衛さま、んもうグダグダにもめます。
アメリカンスタイルの家を設計し、良い家をつくるためには納期延長止むなしって考え方の唐沢に対し、頑丈な日本建築が最高だと考え、納期厳守を目指す昔気質の田中邦衛さま。
んもう、グダグダ。
間に入ってハラハラする田中直樹さまですが、今度は田中さまの母が風水とかもちだしてかきまわしてくれます。
暴走する大工の父。切れる娘。
おろおろする婿。
きゃぁぁぁぁぁぁぁ。
パパの採点。１００点満点中８０点。

２０１２年のガキ使年末の「笑ってはいけない」で、この作品がネタとしてとりあげられておりました。
なんか遠藤さま、宇宙人役で特別出演してはったそうで。
完全に忘れてましたが。
もちろんガキ使メンバー、そのネタで大笑いしてはりました。

# チャーリーとチョコレート工場

２００５年アメリカ映画
監督　ティム・バートン
主演　ジョニー・デップ、フレディ・ハイモア、デイビッド・ケリー

ロアルド・ダールさま原作の児童文学、「夢のチョコレート工場」の二度目の映画化ってことであります。
最初の映画化は１９７１年、メル・スチュワート監督の「夢のチョコレート工場」。
なんだけど。最初の映画化のこと全然知らなかったし、とりあえず映画ファンだった私のアンテナに一回もひっかかったことのない作品でございますので…
まあ、そういう感じだったんだろうなって思います。
で、二度目の映画化のこの作品。
ファンタジー映画ではあるのですが、ちょっとグロい描写なんかもありまして、あまり家族そろってご覧くださいって内容ではないです。
ただ、アメリカもののおとぎ話って、実はめっちゃ暗いし怖いしえげつないものが多いので、この作品タッチはむしろ原作に近いものなのかもって思います。
デップさまはチョコレート工場の社長。この工場で作られる「ウォンカ」（役名もウィリー・ウォンカです）ってチョコレートが大人気。
工場にはこの十数年、人が出入りした様子もないのに、チョコレートはどんどん出荷されております。
工場の中は完全非公開。
ある日社長は、ウォンカの中に招待券を入れ、その招待券を手に入れた子供だけをチョコレート工場に招待すると発表します。
一方、もう一人の主人公チャーリー＝ハイモアさま。
絵に描いたような貧乏な家庭に暮らしております。年に一度の贅沢、みたいな感じでチョコレートを買ったら、招待券が当たりまして、ハイモアさま、おじいちゃんといっしょにチョコレート工場に見学にいきます。
見学者は５組の親子たち。なんかみんなかわいくない。っていうか癖がある家族たち。
見学ツアーの中でデップさまから、この５組の中の１組に、さらに素晴らしいプレゼントを用意していると、こういうことになりまして、５組の件見学者たちは足のひっぱりあいとかになるわけですね。
１組、また１組と脱落していきまして、最後に残ったのはハイモアさま。
で、びっくりのプレゼントの内容が知らされるわけですが…
うん。グロい。
脱落した子供が悲惨すぎて、ぶっちゃけ楽しめなかったです。作品中の子供たち、このことってめっちゃトラウマになるやろなぁ。

パパの採点。１００点満点中６５点。
最後はめっちゃええお話になってめでたしめでたしなんだけど、途中がちょっとね。
ティム・バートン監督ってこういう感じの作品好きですよね。
もうちょい素直に家族向けの作品に仕上げてもらいたかったけど…
家族向けのこの素材って、ぶっちゃけ面白くないかもしれませんね。

# スリーリバーズ

１９９３年アメリカ映画
監督　ローディン・ヘリントン
主演　ブルース・ウィリス、サラ・ジェシカ・パーカー、デニス・ファリーナ

ブルース・ウィリスさま主演のアクションサスペンス。
原題は「ストライキング・ディスタンス」。「殴れる距離」っていう意味ですな。
高校のことにバンドでやった曲に「ウォーキング・ディスタンス」って曲がありましたが、こちらは「歩ける（歩いて行ける）距離」って訳します。
なんでタイトルが「スリー・リバース」になったかっていいますと、制作中の仮題が「スリー・リバース」だったそうだからだそうで。
まあどっちでも映画の内容わかりにくいですが。
アルゲイニー川とモノンガヘイラ川が合流して、第三の川、オハイオ川になるわけですが、この合流地帯らへんがピッツバーグのダウンタウンになっているそうで。
バイ、ウィキペディア。
スリーリバーズってタイトルはここからきております。
主人公のウィリスさまは、代々続く警官ファミリーに生まれ、やはり警官です。
叔父～イトコ兄弟も同じような警官ファミリー。
ある日、この街に猟奇殺人事件が発生します。その捜査の途中、ウィリスさまの父が撃たれて死んでしまいます。
ウィリスさま、父が命を落とした状況から、父を撃ったのは警官であると証言します。
あと、イトコの捜査中の過剰暴行の証人になったりしまして、だんだんと警察にいづらくなっちゃいます。
ダメ押しで、ウィリスさまの証言で過剰暴行の被疑者になっちゃったイトコが川に身投げしちゃいまして。
で、数年後、ウィリスさま、河川警備隊に左遷されております。そらそうやろ。
正しいことしても、組織って冷たいのよ。
そんなウィリスさまに女性の相棒が配属されまして、これがサラ・ジェシカ・パーカーさま。
けっこうええ感じです。
で、発生する連続猟奇殺人。しかも被害者はみんなウィリスさまの元カノたち。
ウィリスさま、父が命を落とす原因となったあの猟奇殺人との関連を疑いますが、警察本体は過去の事件は解決済としてウィリスさまと対立します。
で、ウィリスさま、相棒と孤独な捜査をすることになるのですが、今度はその相棒が誘拐されてしまいます。
果たして犯人は。そして結末はどうなるのでしょうか。
って書きましたが、こいつが犯人ちゃうかって思ったそいつが犯人でした。

ちょっとサスペンスとしては消化不良ですわな。
パパの採点。１００点満点中６５点。
なんか人気のウィリスさまにおんぶにだっこ、みたいな作品になってしまって残念。
警察内部の不正を暴くか、アクションか、猟奇殺人の捜査か、どこかにポイントをしぼったらもうちょっと面白くなったのにって感じです。
ただ、ボートで街をかけめぐる刑事ってのがけっこう印象に残りました。

# バブルへＧＯ　タイムマシンはドラム式

２００７年フジテレビ・電通・東宝・小学館作品
監督　馬場康夫
主演　阿部　寛、広末涼子、吹石一恵、伊武雅刀、薬師丸ひろ子

最近ものすごい勢いを感じる阿部 寛さま主演の、まあタイムトラベルもの。
このタイトルを見て、重厚なドラマを期待する人とかいないとは思いますが、細かいところは気にしないで楽しく笑ってみたらそれでええやんか系の作品です。
バブルが崩壊して、ジリ貧の日本経済。んもう破綻寸前でございます。
そんな日本経済を救うべく、一人の官僚、阿部さまが極秘裏に計画をすすめておりまして。
これまた極秘裏に開発された、ドラム型洗濯機型タイムマシン。こいつを使い、２００７年の１７年前、バブル崩壊の引き金となった大蔵省通達である「総量規制」を止めることでございました。
タイムマシンの開発者が薬師丸さま。彼女はミッションを遂行すべく、１７年前に旅立ちますが、そこで彼女からの連絡が途切れます。
さて。物語のヒロインは広末さま。元カレの借金を返済するためにキャバ嬢してはるフリーター。
そんな彼女に、長い間音信不通だった母の訃報が届きます。借金取りは葬儀の席にまで現れたりします。
で、その葬儀の席に現れたのが阿部さま。実は彼女は薬師丸さまの娘だったわけですね。
阿部さまは、彼女の母が日本経済を救うために過去に旅立ち、行方不明になったという真実を伝え、第二のエージェントとして過去の世界に赴き、日本を救うよう依頼します。
広末さま、借金取りから逃げるためと母を救うためにそのミッションを受け入れ、ドラム型洗濯機型タイムマシンで、バブル絶頂期へと旅立つのでありました。
１７年前の世界はまるで別世界。濃い眉毛のねえちゃんがボディコンワンレンで踊り狂ってるわ、若い兄ちゃんは会社の経費で豪遊してるわ。
日本全体が「お金なんか使わないと損じゃぁん」、みたいな空気に包まれております。
広末さま、めっちゃバブルを満喫しながら、若いころの阿部さまを探し出して協力させようとしますが、バブルのころの阿部さま超チャラい。
果たして母はどこに。そして日本経済は再生されるのでしょうか。
「私をスキーに連れていって」だとか「彼女が水着に着替えたら」だとかの、ホイチョイプロダクションの作品だけあって、めっちゃバブリー。
たった２０数年前なのに、まるでおとぎの国のようなバブル絵巻が繰り広げられます。
私はバブル期は貧乏劇団員してたんで、バブルの恩恵とかイマイチ受けていませんでしたが、劇団やりながらでもなんとかなるもんやって思わせた時代だったわけだから、やっぱりバブル時代のパワーってすごかったんやな。

よく考えたら、当時は小劇場演劇なんかにも簡単にスポンサーがついてましたっけ。
スポンサーがついたら、弱小劇団とかでもけっこうな小屋で公演とかできてました。企業が「地元の文化を育てる」「若いアーティストを支援する」みたいな名目で採算度外視して劇場の運営してはったり。
そういう意味では劇団しながらでもバブルの恩恵受けてたんだなって今頃気づきました。
パパの採点。１００点満点中８５点。
バブル時代を象徴するキャラとして、飯島　愛さま、飯島直子さま、ラモス瑠偉さまらが本人役でご出演。
うんうん、ほんま、あのころは良かった。
軽くカクテルでも飲みながら楽しむには絶好の作品かと思います。

# ＯＵＴ

２００２年２０世紀ＦＯＸ作品
監督　平山秀幸
主演　原田美枝子、倍賞美津子、室井　滋、西田尚美、大森南朋、香川照之、間　寛平

桐野夏生さま原作の傑作「主婦クライムサスペンス」小説を、平山秀幸監督が映画化です。
テレビドラマ化もされ、こちらは田中美佐子さま、渡辺えり子さま、高田聖子さま、原　沙知絵さまらの主演。
深夜勤務の弁当工場に勤める四人の主婦。
彼女らは、家庭崩壊かとか、痴呆の母親の介護問題だとか、カード破産だとか、ＤＶ問題だとかをそれぞれに抱えながら働いております。
ある日、西田さまが衝動的にＤＶ夫大森さまを殺してしまいます。
そこから四人の人生は少しずつ本来の人生からコースアウトしていきます。
死体の処理に困った四人、死体をバラバラにしてゴミに混ぜて捨てるという思い切った作戦をたてます。
適当主婦、室井さまのミスから死体の一部が発見され、警察が捜査に乗り出しますが、かつて大森さまとトラブルを起こしていた闇カジノの経営者、間さまに嫌疑がむけられ、一同は難をやりすごします。
そんな四人組に、またまたトラブルメイカー室井が面倒な話をもってきます。
彼女が世話になっている金融会社のオーナー、香川さまが、死体処理の仕事をもってきたわけですね。
多額の報酬を得て仕事を引き受けることになった四人。
しかし、釈放された狂犬カジノオーナー、間さまの復讐が始まろうとしていたのでございます。
いぐわぁぁぁぁぁ。
この話ってこんな展開だったっけ、って思う場面がけっこうありました。
原作を読んでいないので何ともいえませんが、ドラマとはちょっと違う展開でした。
原作どうなんやろって気になりますが、ストーリー展開が重すぎて、ちょっと原作読む気になれないのがぶっちゃけたところですね。
パパの採点。１００点満点中７０点。
日本を代表する新旧の名女優四人の演技合戦。
なんだけど、原田さま倍賞さまの圧勝って印象が残りました。
室井さま西田さまって、やっぱりなんか弱いなぁ。テレビ演技なのでしょうか。下手ではないんだけど、原田さま倍賞さまの演技に圧倒されてしまいました。

# ナイトミュージアム

２００６年アメリカ映画
監督　ショーン・レヴィ
主演　ベン・スティーラー、ロビン・ウィリアムス、カーラ・グギノ、ジェイク・チェリー、ディック・ヴァン・ダイク

この作品、ずっとディズニー作品だと思い込んでおりました。
ディズニー作品っていいますと、ファミリー向け作品でございますわな。
お色気シーンとかあってもほどほどで、きわめて全うな主人公が全うに暮らしていく中で事件が発生しまして、全うなリアクションをとって、適度にハラハラドキドキがあって、まあ事件は解決。
それだけじゃなく、こんないいこともありました。めでたしめでたし、みたいな。
まさにそんな作品。良い意味でですよ。ハッピーエンド＋$\alpha$って着地点がしっかり定まっているから、作品そのものにも悪い印象は残りません。
冴えない失業者のおじさんがスティーラーさま。
別れた奥さんとの間に子供がいて、それがジェイク・チェリーさま。
奥さんはもう再婚間近で、めっちゃ出来の良い新しい旦那さま候補がおられます。
んで、まぁ、ええとこ見せようとして空回りする感じですね。かわいそうだけど。
そんな彼が職安で紹介された仕事が博物館の夜警の仕事でございまして、彼は夜警として博物館の夜を過ごすことになるわけですね。
実は博物館、けっこうな赤字でございまして、それまで勤務していた三人のベテランさんを解雇して、新たにスティーラーさまを雇ったわけでございます。
このベテラン警備員のリーダー格がなんとディック・ヴァン・ダイクさま。ベテランさんがた、深夜勤務のマニュアルだけをスティーラーさまに渡して帰っちゃう。
勤務初日からたった一人で仕事につかなければならなくなったスティーラーさま。
深夜の見回りをはじめたところ、恐竜の骨格標本が動き回っております。
それを皮切りに、モアイ像や原始人、動物の剥製やジオラマのミニチュア人形など、展示物が動きまわり、喋り、好き勝手しはじめます。
先輩警備員に電話しても、マニュアルを読めの一点張り。頼みのマニュアルも剥製に破られてしまう。
ルーズベルト大統領＝ロビン・ウィリアムスさまに助けられ、「この博物館の展示物は深夜になると動き回る」って話を聞いてびっくり。
で、朝を迎えると展示物たちは元の状態に戻ります。
どうやらこの博物館の展示物のひとつ、エジプトの石版のせいで、展示物に命が吹き込まれていることがわかります。
スティーラーさま、博物館の職員グギーノさまにそれぞれの展示物について教わり、二日目の夜

を迎えようとするのですが…
うん。
ほどよいほどよい。
で、誰も死なない流れで物語が推移していきます。
あ、原始人のジオラマの人形が犠牲になっちゃうけど。
まあ厳密にいうと誰も死なない感じです。
起こる事件もほどよい。
で、決着の着地点も実にほどよい。
もうちょっと毒っぽさが欲しいところではありますが。
パパの採点。１００点満点中７０点。
あまりにもええお話で終わってしまったので、基準点にちょいプラスしたくらいの感じですね。
全うすぎて物足りないです。ただ、最近の映画ってどんよりした気分になって終わるものがけっこうあるんで、そういう意味ではええ作品かもしれませんね。

# ハウス・オブ・ザ・デッド

２００３年アメリカ映画
監督　ウーヴェ・ボル
主演　ジョナサン・チェリー、オナ・グローアー、クリント・ハワード、ユルゲン・プロポノフ

人気ゲームの「ハウス・オブ・ザ・デッド」の実写映画化です。
目を覆いたくなるような惨状が繰り広げられ続けるホラー作品です。
目を覆いたくなるってのは、サスペンス描写が優れているとか、スプラッターの特殊効果が素晴らしいからとかでは断じてなく…
あまりの適当さ、あまりのお粗末さに見ていられなくなるって意味の「目を覆いたくなる」作品でございます。
めっちゃ適当でめっちゃご都合主義です。
Ｂ級ホラーラブの私ですが、うん。これはひどいなあって言いながら、逆に笑ってしまいました。
よくＳＥＧＡが上映ＯＫ出したなって思います。
続編も作られたっていうから、まあＳＥＧＡ的には大丈夫だったんでしょうね。
大企業さんの考えはることはよくわかりません。
南の島でパーティが開催されるってんで、チャラい男女たちが大挙して集まります。
なんかの事情（忘れたけど）で島に渡る船に乗り遅れた主人公たちグループ。
なにやらいわくありげな漁船をチャーターして、島に渡ることにします。
ここで船の下働きの男に、「あの島は危険だ」なんてことを吹き込まれたりしますが、聞く耳もつ主人公ではありません。パターンだけど。
パーティをやっているはずの島だけど、誰もいない。
島を探してみると、明らかに妙な建物がありまして。
そこに入ると、数人の男女がおりまして、彼らの話では、いきなりゾンビが襲ってきて、パーティの客が全滅したと、こういうことでございますね。
漁船の船長、実は武器商人でございまして、船の中に大量の銃が隠されておりました。
船長は気前よくその武器を開放。
かくして銃火器で武装したチャラいにいちゃんねえちゃんとゾンビ軍団のバトルが始まるのでありました。
いぐわぁぁぁぁぁぁ。
めっちゃ適当や。
にいちゃんたち何故か銃使えるし。
しかもなかなかの腕前やし。
しかも弾丸補充せんと撃ちまくるし。
みたいな、けっこう適当な作品。

真剣に見たらバカヤロー感が残る可能性甚大ですので、まあゲーム好きなみなさんでワイワイ言いながら楽しんでいただけたらって感じの作品でございます。
パパの採点。１００点満点中５５点。
武器を手に入れた直後あたりの展開がめっちゃいいです。
いかにもゲーム的。
この場面がなかったらもっと最悪な感じになったかもしれません。
とりあえず重火器ガンアクションに救われた感じの作品でございます。

# プール

２００２年アメリカ映画
監督　ジョン・ポルソン
主演　ジェシー・ブラッドフォード、エリカ・クリステンセン、シリ・アップビー

「プール」っていいますと、小林聡美さま・もたいまさこさま主演で文芸系の邦画がありました。
あと、きわめて近い時期（２００３年。この作品は制作は２００２年だけど公開は２００３年です）に、シャーロット・ランプリングさま主演の「スイミング・プール」って作品もありまして。
で、この作品の原題は「プール」とか関係なくて、「ＳＷＩＭＦＡＮ」でございます。
作品情報、検索しにくいのなんのって。
えっと。「危険な情事」の学生版です。で、ちょっと「ルームメイト」入ってます。
主人公のブラッドフォードさまは水泳の選手。めっちゃ強い選手で、将来を期待されております。黒髪清楚な彼女のアップビーさまがいてはります。
まあ順風満帆の学生生活なわけですが、そこに一人の転校生、クリステンセンさま登場。
もちろん魅力的な女性です。黒髪清楚なアップビーさまに対抗するキャラやから、もちろんパツキンでグラマラス。
学校で知り合って、ちょっとしたことから彼女の自宅に招かれ、二人で食事に出かけることになりまして。
で、送って帰ろうとすると、行きたいところがあるのぉ、トカ言われて、夜のプールに誘い込まれて、「私泳げないのぉ。泳ぎを教えてちょうだい」トカ言われて、泳ぎを教えている間に、まあそうなっちゃって。
あんなことしちゃうわけですね。
で、そこから彼女が徐々にストーカー化していって、やがてキレはじめます。
ここらあたりは「危険な情事」と同じ感じ。
彼女の過去云々、ってくだりは、「ルームメイト」と同じ感じ。
しかし暴走モードに入ったあたりのクリステンセンさまの演技は必見でございます。
そしてやっぱり、最後は彼女との直接対決となります。
パパの採点。１００点満点中８０点。
出演者も無名系だし、お色気サスペンスが見れたらそれでいいや、って感じで期待しないで見始めましたんですが、けっこうしっかりした感じでした。
調べてみたら、スタッフのほうはけっこう実力のある人ばっかりだったみたいです。
なかなかの掘り出し物でございました。

# スクール・オブ・ロック

２００３年アメリカ映画
監督　リチャード・リンクレイター
主演　ジャック・ブラック、ジョン・キューザック、マイク・ホワイト、レベッカ・ブラウン、ジョーイ・ゲイドス・ジュニア、ケヴィン・クラーク、ロバート・ツァイ

けっこう面白くて、けっこう感動した作品。
やっぱり音楽ネタには弱いですね。
ジャック・ブラックさま主演のコメディです。
えっと。むかしからハリウッドでは、「どんな大スターでも、子役と犬には勝てない」って言葉がありました。
エリザベス・テイラーさまが子役やってはったころですが。
そういう意味では、エリザベス・テイラーさま主演の「名犬ラッシー」なんかは最強だったことだろうと思います。
で、この作品。やはり子役さんって最強ですね。
しかもオーディションを勝ち抜いた、めっちゃ楽器ができて演技もできる子役さんなので、ジャック・ブラックさまでもこの作品に関しては影がうすい感じです。
さて作品のあらすじ。
ジャック・ブラックさまはロックギタリスト。
悪ノリがすぎてあちこちのライブハウスから出入り禁止を食らうような人。
たまりかねたメンバーからクビを宣告され、おまけに家賃滞納で家も追い出されてしまいます。
教員資格をもっている友人の家に転がり込んだブラックさまですが、そこで友人がいない間にたまたまかかってきた、臨時教員の仕事の電話。
高額な給料にビックリ。そこで彼は友人になりすまして教員として小学校にもぐり込むことになります。
そこで彼が目にしたのは、なんとなくグレーな空気の小学生たち。
しかし、彼らの中には驚くべき音楽の才能を秘めた子なんかもいてまして。
で、ブラックさまは彼らとバンドを組み、バンドコンテストに出場して賞金を手に入れようという野望を抱くのでありました。
こういう音楽系の映画でよくある展開ではありますが、やっぱり紆余曲折します。
で、どうなるんやってハラハラさせておいて、最後のライブシーンでドカンとくると、こういう構造ですね。
めっちゃ堪能しました。
パパの採点。１００点満点中９０点。
クライマックスのライブシーン、泣いちゃいました。
みんなめっちゃ巧いんだもん。

黒人で、みんなからいじめられてて、自分に自信がもてないって女の子が、ソロを歌う場面。
涙ボロボロボロ。
あかん。やっぱり単純な観客です。私。

# 大停電の夜に

２００５年「大停電の夜に」フィルムパートナーズ作品
監督　源　孝志
主演　豊川悦司、田口トモロヲ、原田知世、吉川晃司、寺島しのぶ

何といいましょうか。ロマンティック・ラブ・ストーリーですな。
ある年のクリスマスイブの夜。
まあ、いろんな人がいろんな思いでイブの夜を迎えておられるわけですな。
かつての恋人を待っているバーのマスター豊川さま。
妻と恋人との間で気持ちが揺れている田口さま。
そんな夫とのこと、いろんな思いに揺れている原田さま。
地下鉄で産婦人科に向かう途中の吉川さまと寺島さま。
そんなとき、東京が大停電です。
すべての明かりが消え、静まる街。
ホテルのエレベーターの中に閉じ込められた井川遥さまとホテルマン阿部力さまは、お互いの恋について、ホテルマンと客といった立場を離れて話しはじめます。
地下鉄に閉じ込められた吉川さまと寺島さま。
吉川さまは寺島さまを背負って産院へとむかいます。
宇津井健さまと淡島千景さまの老夫婦。
妻が夫に、ある告白。
夫はショックをうけて家を飛び出し、真っ暗な街をさまよいます。
原田さまの家のテーブルには離婚届。そこに夫の田口さまが帰ってきます。
キャンドルの明かりの中、長い間お互いに向き合おうとしなかった二人は、静かに語りだします。
んで。
豊川さまのバーにキャンドルの明かりが入る。
その明かりに誘われるように、一人、また一人と客が集まってきます。
それが井川さまだったり、吉川さまだったり、宇津井さまだったりするわけですね。
そしてそして、って感じになるわけでございますわ。
っていうか、最終、偶然にバーに集まることになる人たちを、停電の前から描いていたわけだから、最終バーに集まるのは当たり前なんだけど。
でも、主要キャストが偶然にバーに集まっていくあたりは、なんかパズルのピースが一つずつ埋まっていくような感じがして、けっこうよかったです。
パパの採点。１００点満点中６５点。
うん。ずっと言ってますが、ラブストーリー系の人間ドラマって苦手なんす。
がんばって書いてきましたが。

うん。
あ、そう、よかったやん。そうかいなそうかいな。
みたいな感想が最終残ってしまって、あまり楽しめませんでした。

# ハンニバル・ライジング

２００７年アメリカ・イギリス・フランス合作
監督　ピーター・ウェーバー
主演　ギャスパー・ウリエル、コン・リー、リス・エヴァンス、リチャード・ブレイク

トマス・ハリスさま原作の傑作サイコサスペンス「羊たちの沈黙」。ここからから始まる「ドクター・レクター」シリーズの第４作。
ただ、この物語は時系列的には第一話になります。
最近のドラマ的タイトルでいうと「エピソード・ゼロ」って感じ。「殺人鬼・ハンニバル・レクター」誕生の物語でございます。
作品を時系列順に並べたら、この「ハンニバル・ライジング」が最初にきて、次が精神科医として捜査協力をしていたレクター博士が実は殺人鬼だってわかって逮捕され、収監されながら捜査協力するって「レッド・ドラゴン」。
で、クラリスとの出会いとなる「羊たちの沈黙」になって、で、その続編の「ハンニバル」となります。
物語です。
今回は役名で書いたほうがわかりやすそうなんで、役名であらすじ書きますね。
そもそもレクターって人は、旧ソ連、リトアニアの貴族の御曹司でございます。
けっこう裕福っぽい生活を送っていたのですが、戦争の影、ひたひた。
一家は居城をはなれ、別荘に移り住みますが、そこでソ連軍とドイツ軍の戦闘が起こり、父と母がが犠牲になります。
幼い妹と二人きりになったレクターでございますが、二人は別荘に隠れ戦禍をやりすごそうとするわけですね。
そこへやってきたのが、敗走してきたドイツ軍シンパの人たち。
彼らは二人を捕らえた上で、この別荘に立てこもります。やがて別荘の食料はなくなり、彼らは妹を殺害して食料にしてしまいます。
ぎゃぁぁぁぁぁ。
このことがもとになってレクターは記憶を失います。
数年後、孤児院となったレクター城で孤児としてくらすレクター。彼は孤児院を脱走して、遠い身寄りのもとに向かいます。
しかし親戚は他界しておりまして、彼はその未亡人、レディ・ムラサキ(コン・リーさまでございます)に引き取られます。
で、そこで武術をマスターし、日本刀の美しさに魅せられ、合戦絵巻のとりこになります。
屋敷に出入りしている肉屋の口から、心酔しているレディ・ムラサキを侮辱する言葉を聞いたとき、レクターの悪が覚醒します。
レクターは肉屋を始末しまして、そしていつか妹の仇である、例のドイツ軍シンパだった男たち

への復讐を考えるようになります…
物語が物語なだけに、めっちゃどんよりします。
こういう作品って、まあ爽快な終わり方はしないんですが。
まあどんよりしながらちょっと爽快な気分、とでもいいましょうか。
なんかめっちゃ変な感じで見おわりました。
「羊たちの沈黙」は、サスペンス映画としてすごくよくできていましたので何度も見ましたが、それ以降の作品は一回見ただけでおなかいっぱいって感じですね。

# 刑事ジョー ママにお手上げ

１９９２年アメリカ映画
監督　ロジャー・スポティスウッド
主演　シルヴェスター・スタローン、エステル・ゲティ、ジョベス・ウィリアムス

このコラムってね。最初はブログの連載として始まったわけでございまして。
いまはなきポケスペさんですが。
で、パブーさんのことを知りまして。
原稿を電子ブックの形にできるってことと、PDF形式に変換できるってことでこりゃいいやって感じで使いはじめましたが。
そうこうしているうちにポケスペさん、滅亡しはりまして。
滅亡前にデータコピーしててよかったです。
ポケスペさん時代に書いた原稿そのものはとっくに終わっておりまして、現在はすべて書き下ろし。
作品順はざっくり見た順です。っていってもめっちゃ前に見た作品でございます。
みたいなことをくどくど書いている理由はね。
この作品、ぜんっぜん覚えてないんですよね。
断片的にうっすら記憶がある程度で。
スタローンさま主演のポリスコメディってことで、けっこう期待して見た作品だったような記憶もあるのですが。
うん。
当時、なにかにつけ比較されていたスタローンさまとシュワルツェネガーさま。
「ジングル・オール・ザ・ウェイ」「ツインズ」あたりで一皮むけて、「キンダーガートン・コップ」「トゥルー・ライズ」「ラスト・アクション・ヒーロー」あたりのコメディ調アクション怪作を仕上げたシュワルツェネガーさまに対し、スタローンさまは、トホホって印象がぬぐえません。
ぶっちゃけ。
この「刑事ジョー ママにお手上げ」もそう。
悪くはないんだけど、なんか足りない感じ。
作品の素材としては決して悪くはないのですが。
ストーリーです。
スタローンさまは刑事でございます。ある日、彼のもとへママがやってきます。
けっこう強烈なママで、何かにつけスタローンさまは僕ちゃん扱い。
拳銃をがっつり水洗いされて使えなくされたり、とにかくいろいろやってくれます。
そんなママが事件に巻き込まれでしまいまして、目撃者としてスタローンさまの署に出入りするようになりまして、やがてスタローンさまの仕事にも同行するようになりまして。

さあそこからいろいろと事件が起きていくわけですな。
ママって、悪意がなく、とにかく善意でやってはるから何かにつけタチが悪い。
って言ってるうちが華なのかな。
ちょっとは親孝行しなきゃですね。
みたいな殊勝な気持ちにもなってしまいました。
作品記憶にないけど。